

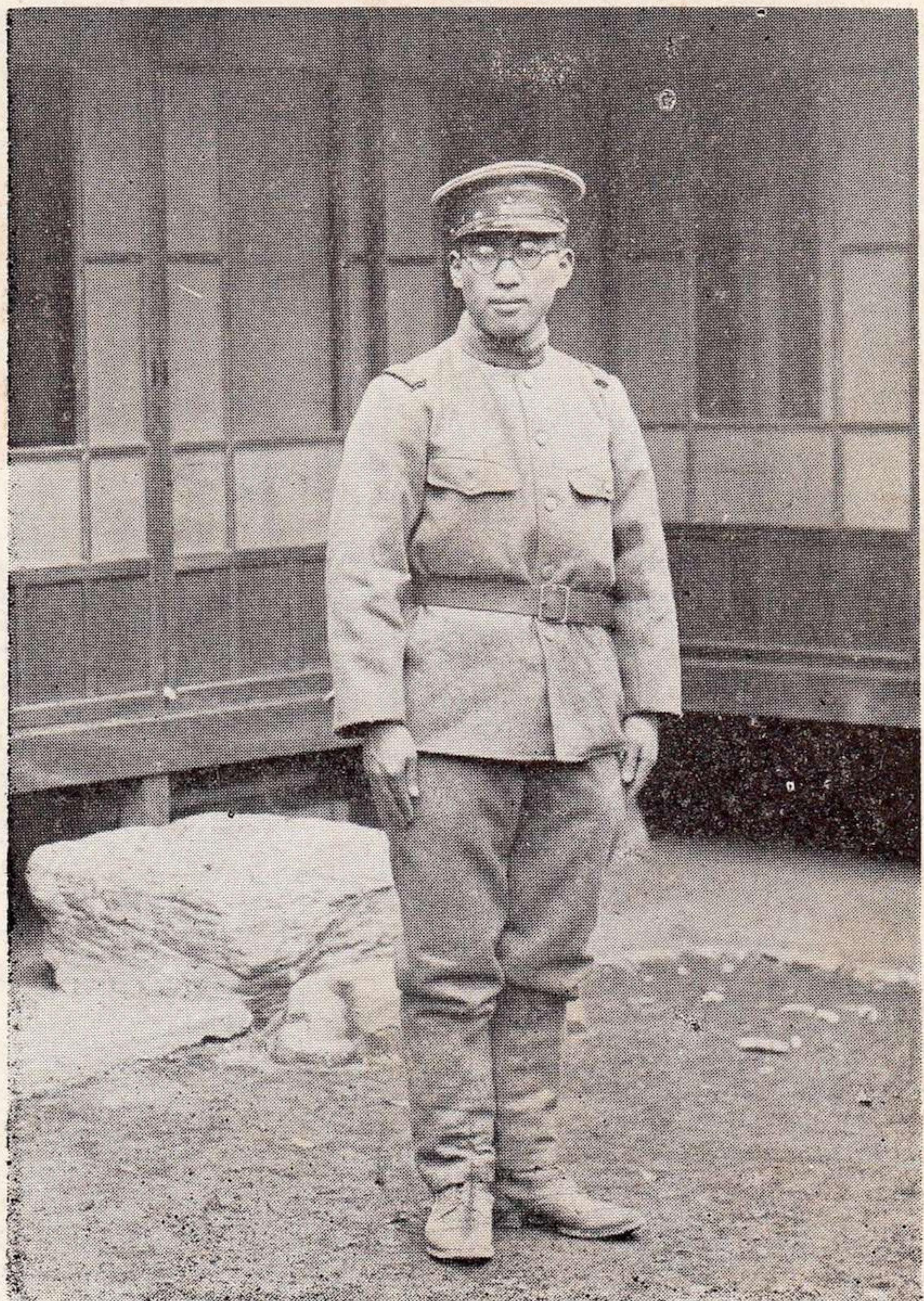
蹴球

第六號

荒井兄追悼號

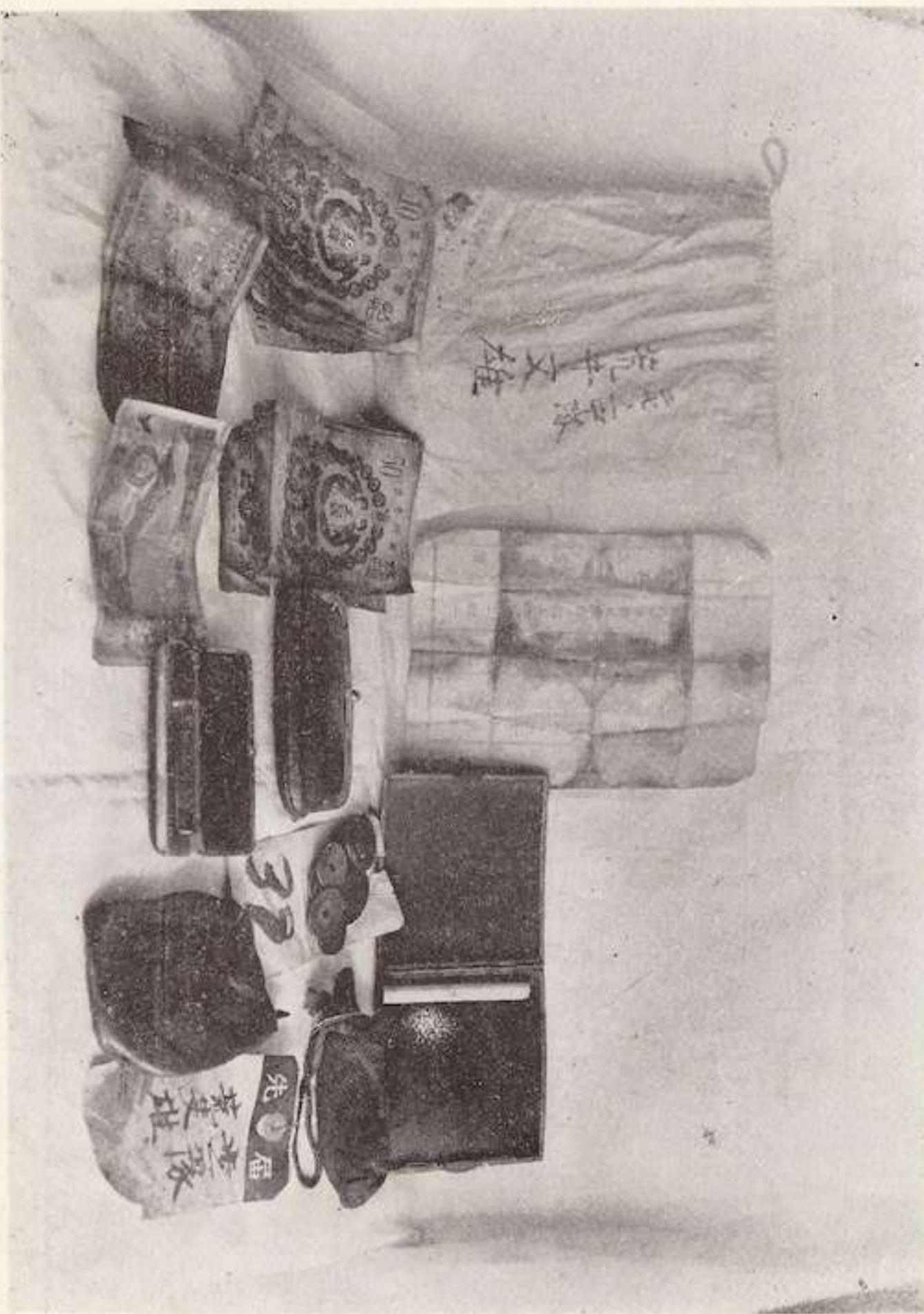
東京商科大學蹴球部部誌





出征直前の荒井兄

(中御門邸にて)





荒井兄の遺品



中學卒業前



商大卒業當時



中支ニテ入浴ノ歸り途



咸寧城内（神野兄撮影）



立教に勝ちて（於青山師範）

十三年度記念撮影



後列左ヨリ 村木、金井、片山、藤塚、青木、山田、池尾、清水、居川、吉岡、堀尾、折下、松岡
中列左ヨリ 櫻井 一人置イテ 瀬藤、石割、吉澤、二人置イテ 水島
前列左ヨリ 渕上、早野、菅瀬、後藤、岩崎、米山、狩森、二階堂、茂木

蹴球〔第六號〕目次

卷寫

追弔

蹴球『第六號』目次

偶斷送

文二階堂晴三九
片池尾隆二西
感森正雄一五

二階堂	譲司	九
神野光司	丸	九
淺枝彥太郎	九	九
角田昇	九	九
大掛隆久	九	九
二階堂晴三	九	九

手 紙 (戰 線 よ り)	日 記
一、戰 線	記
二、學 生 時 代	
三、社 員 時 代	
第 三 部	

其の日	菅瀬十朗	西	荒井さんを憶ふ
二階堂晴三	米山大三	元	荒井さんを憶ふ
守之助	荒川石割	知之四	荒井先輩を悼む
三	金井雄吾	吾四	荒井先輩追悼文
三	金井雄吾	吾四	在りし日の荒井さんを偲びて
三	金井雄吾	吾四	荒井さんへ
三	金井雄吾	吾四	懷しき魂
三	金井雄吾	吾四	荒井さんを悼む
三	金井雄吾	吾四	荒井さんを偲びて
三	金井雄吾	吾四	荒井さんの追憶
三	金井雄吾	吾四	荒井さんを憶ふ
三	金井雄吾	吾四	荒井さんを憶ふ
三	金井雄吾	吾四	荒井さんを憶ぶ
三	金井雄吾	吾四	荒井さんを偲びて
三	金井雄吾	吾四	荒井兄を偲ぶ
茂木利孝	松岡義彦	彦三	荒井兄を偲ぶ

感想	森玄一聖
入部諸感	安田與三郎一聖
入部の感想	山地鴻之翼
入部感想	鶯野和夫一翼
昭和十三年度秋期戰績	一四八 一要
名簿	一要
編輯後記	一要

卷頭言

こゝに第六號は刊行されるに至つたが、再び追悼の名は冠せられたのである。逝きし靈を記念するこの卷頭にあたつて、部をある限りみそなはす既に神と化せられたるそのこゝろにむかつて、ひとつのことばをしるす。

一切の立場を渡ひ盡す時、あらゆる抽象を郤ける時、一個の赤裸々な人間の生くる人生は闘ひのみである。人は靜止することを許されぬ。常にその推移變化の裡に生きてゐる筈である。發展もよし、退歩もよし、迷ひもよし、精進もよし。停止すること死であり、神性への飛躍である。凡々たる一個の生命を依持してゐる限り、如何なる人格も、全體的な眞理、神、愛にその個々たる人格を解消し盡さうとする可能性に參與する。この過程に展く人生は、具象の事實として闘ひの一語に盡きると觀ず。

蹴球は闘ひである。闘ひなるが故に「闘ひ」の本質を持つ。單なる試合に勝つことに含まれる意義を論ずるのではない。闘ふこゝろを言ふのである。

思想の苦惱を逃避し得るものも、肉體の苦惱は甘受して闘はねばなるまい。重ねていふ、一切の人生は肯定、否定の分化發展の闘ひである。

蹴球も闘ひである。打克たねばならぬ。克つ、克つ、克つこゝろが小さき魂に點する灯は、永遠に輝くものでなくてはならぬ。その炎は、常住に彼のうちで燃えてゐるものでなければならぬ。

第

一

部

弔

詞

荒井サン 吾々ニハ今最モ親シカツタ此ノ呼ビ方デ御言葉ヲ御掛ケ申シマス 吾々ハ知ルモ知ラナイモ共ニ集ウテ 荒井サンノ前ニ御別レノ挨拶ニ参リマシタ 今日ハ唯悲シミモ寂シサモ總テヲ乗り超ヘテ吾々ノ心カラナル御言葉ヲ捧ゲ最後ノ御別レヲ致スノデアリマス。

顧ミマスレバ昭和六年四月丁度此頃希望ニ胸ヲフクラマセテ荒井サンニハ豫科ニ御入學ナリマシタ ソシテ吾々ノキマス蹴球部ニオ入りニナツタノデアリマス 吾々蹴球部ト 荒井サントノ切テモ切レナイ紳ノ縁ハ茲ニ始マリマシタ 丁度其ノ頃ノ蹴球部ハ轉落カラ轉落ヲ續ケテ苦難ノ逆境ニ喘イデキタノデアリマス 其ノ蹴球部ガ荒井サンノオ心ニドウ映ジタカハ唯黙々ト部生活ニアラユルモノヲ投ジテ御精進ナサウタ豫科時代ノ御跡ヲ偲ベ吾々ニハ十分デアリマス 淳ニアノ時代ノ大イナル苦闘ハ吾々ガ現在カウシテ安ンジテ住マハレル確固タル部ノ基礎ヲ築キ上グラレマシタ 荒井サンノ一切ヲ宿スモノト信ジテ疑ヒマセン 苦ミニ何時カハ實リノ秋ガ訪レナイデオキマセウカ 荒井サンノ本科ヘノ進ミハ苦シミノ石神井ヘノ訣別ト同時ニ小平ニ於ケル只管實リヘノ秋トナツタノデアリマス 吾々ガ今偕ニ蹴ツテ居リマスルグランドノ上デ 荒井サンハ吾々ニ對シテ明ルク強ク逞マシク部員トシテノ行キ方ヲ御示シ下サイマシタ 吾々ノ中ノ本科ニ居リマス部員共ハソノ 荒井サンノ御姿ヲ今髪露トシテ思ヒ泛ベル事ガ出來ルノデアリマス ア、三部カラ二部一部カラ一部へ何ト言フ飛躍デアリマセウ 何ト云フ前進デアツタノデアリマセウカ レフトインナーノボジションデグランドノ上ヲ仆レル迄縱横ニ馳驅サレタ 荒井サンノ面影ヲ御偲ビシテ今ハモウ申ス言葉ガ御座イマセン ドンナニ辛クテモドンナニ苦シカツタ時モ不平モ愚痴モ唯一言申サレズタウトウ一部ノ蹴球部ヲ實現サレソノ基礎ヲ固メラレテ卒業サレマシタ 荒井サンノ心ノ奥ニハ何ガ潜シデキタノデアリマセウカ

蹴球部生活ノ眞髓ヲ兄弟以上ノ交リニ置カレコノ中ニ自分ノ苦シミモ歡ビモ悲シミモ寂シサモ才互ガ頌チ合ヒナガラ伴ニ生キル事ニ對シテソノ範ヲ垂レラレマシタ 荒井サンノ胸ニハ何ガ刻マレテキタノデアリマセウカ。

思ヘバ誰ヨリモ純粹ナルコトヲ愛シ内ニ外ニ僅カニ一ツノ偽リアルコトモ嫌ハレマシタ 荒井サンノ人格ノ奥ニハヤムニヤマレヌ強イ烈シイ眞實ヲ愛スルコ、ロガ滿チ溢レテキタノダト信ジマス 水ノヤウニ澄ンデ而モ猶苦シミニ打克ツタ明ルサノ中ニハ御自身ノ悅ビヲ尋々ト感ジラレテ居タヤウデアリマス アノ武藏野ノホトリノ名モ無イ草花ヲ手折ラレテ吾々ニ示サレタ 荒井サンノ深イ眼ノ奥ニハ何物ヲモ燒キ盡サナイデハオカナイ潤ンダ愛ノコ、ロガ湛ヘラレテ居リマシタ 一旦部ヲ離レ御相ヲ尙一層ハツキリト描キ出スコトガ出來ルノデアリマス 荒井サンヲ想ヒ起ス部員ハ必ズヤ部生活ノ精粹ヲ掬ミ採リソシテ又マコトトカ眞實トカ神トカ愛トカソーンナ語ノ正シイ人間的意味ヲモ識リ得ルダラウト確信致シマス。

今吾々ガ 荒井サンニ就テ記憶致サネバナラナイ事ガモウ一ツアリマス ソレハ 荒井サンガ兄ノ如ク御慕ヒナサツタ蹴球部中興ノ主長瀬サントノ間柄デアリマス 嘴呼アノ長瀬サンノ所ヘ 荒井サンモモウ参ラレタノデアリマス 荒井サンモ長瀬サンモ御卒業ノ後モドンナニ蹴球部ヲヨク看テ下ツタコトデアリマセウカ 何時モ蹴球部ヲ以テ故里ダト申サレテ弟ノ如ク吾々ヲ導イテ下ツタコンナ貴イ方々ヲ失フトハ蹴球部ハ何トイフ恵マレナイ運命ヲ擔ハセラレテキルノデ御座イマセウカ

嗚呼昨年十一月三日國ヲ擧ゲテノ佳キ日菊香リ秋ノ花ハ馥郁ト匂フ 時遠ク大陸ノ僻地ニテコノ大キナ御國ノタメニ吾々ノ前カラ 荒井サンハ去ラレマシタ アノ人一倍御壯健デアツタ 荒井サンガドウシテ御亡クナリニナツタノカ吾々ハ洵ニ信ジラレナイノデアリマス 然シ 荒井サン 荒井サンカウ御呼ビ掛ケ申シテモアノ懷シイ聲デ答ヘラレル御返事ハ聞エテ參リマセン 同ヒマスレバ前ニ御令兄様ニモ貴イ御生命ヲ御國ニ御捧ゲニナツタ由吾々ハ御後ニ御残リナリマシタ御兩親様御弟妹ノ方々ノ御心ヲ推シテ餘リアルノデアリマス。

然シ今ヤ幽明ノ境ヲ以テ相隔テラレマスル現部員ハ残サレタモノトシテコノ上ハ只管立派ナ蹴球部ヘノ精進ヲ御誓ヒ致スノデアリマス 荒井サンノ肉體ノ命ハ既ニアリマセン 然シソノ御精神ノ命ハ常住ニ蹴球部ノ傳統精神ニ生キテキナイデ居リマセウカ 荒井サンハ今マデヨリ一層ニ接近サレテ日毎ノ吾々ノ部生活ノ行動ヲチツトミツメラレテキルノデアラウト固ク信じマス 今日吾々 荒井サンノ弟ドモ參拾名ハ其ノ最後ノ御別レニ參ツタノデアリマス 荒井サンドウゾ安ラカニ御眠リ下サイアノ清イ明ルイ 荒井サンノ御心ヲ心トシテ吾々ハ茲ニ重ネテ不斷ノ精進ニ邁進スルコトヲ固ク御誓ヒスルノデアリマス。以上僭越ナガラ本年度主將現部員ヲ代表シテ最後ノ御別レノ詞ヲ申シ上ゲマシタ次第デアリマス。

昭和拾四年四月貳拾壹日

東京商科大學ア式蹴球部員一同

代表 二階堂晴三

荒井文雄君を悼む

松本正雄

荒井君は我が愛す蹴球部の友であつたと同時にゼミナールの師も同うした。豫科を卒へられるや淺枝、角田、森田、田島等の同志と揃つて山内正暉先生の研究室に學ばれることとなつた。

慈愛深い山内先生にとつては商大での最後のお弟子であつた。先生は學問研究には嚴格であつたが、運動にも理解があり弟子連中は伸びくと育つた。愈々卒業の際には連中は先生を伊豆の長岡温泉に迄お引張り申して清遊を試みたり、先生の御家族とマーチャンに打興するほど和やかなものだつた。山内先生としては數多いお弟子の内でも特に懐しい親みのあるグループであつたことゝ推察申上げる。

荒井君等が學窓を巢立つた昭和十二年の春は今日ほど就職状況が良くなかつた。私は御相談があつたので自分は荒井君の文才を惜しんで一流新聞の記者として立つては如何かと勧めてみた。同君も其氣になられたやうであるが、諸會社の面會日が早かつたので一應會社方面も受けて見ることゝせられた。御尊父とも御相談の上、東京電燈株式會社を志望することゝせられた。自分は幸ひ當時の同社常務取締役であつた故五十嵐直三先輩の知悉を得てゐたので同先輩に荒井君を御紹介したのが東電の傍系會者たる東西電球株式會社に入社せらるゝ縁となつた。

社會人としても荒井君は満點であつた。會社でも上役によく、同僚によく、下の者の受けもよかつた。月給もたしか年に二回上るほどの昇進振りで、一年たらずして會計課の相當の役に据えられた。尙東京電燈ラクビー部では、無くてはならぬ存在となり、この方面からも段々認められ、寔に前途洋洋たるものであつた。蹴球で鍛えた氣魄と性來の純情とが仕事の上に反映したと、もに、何となくユーモアに富んだ愛嬌のある素振りが一躍會社での人氣者たらしめた。

一學年後の重見君の就職を自分のことのやうに心配してゐたが、同じ丸ノ内界隈に勤勞するやうに決つたので小供のやうに喜んでいた矢先、召集令が下りたのであつた。忙しい間際に一晩自分のためにさいて、行を壯んにする機會を與へてくれた。

「弟のことは俺が引受けた、安心して行け」との自分の言葉は嬉しかつたとみえ「それを聞いて安心した」と語られ、思ふ存分盃を重ねて別れを惜しんだ。憶へば最後の訣別であつた。

六月一日附で駐屯地(多分北京)から次の懐しい頼りがあつた。

「前略 御無沙汰して居ります中に六月にも相成りましたが松本さん始め皆様には相變らず御健勝のこと、拜察致します

下つて私も元氣で御奉公致して居りますから末筆乍ら御休神下さい。
扱て山内先生の退官記念事業如何進捗致しましたか、折りがありましたらお知らせ願ひ度いと存じます 自分達が早く整理に懸らねばらぬ所を遅延致し松本さん達に許り御厄介願つて申譯もありません又蹴球のO・B會如何なりましたか 長瀬大先輩の遺志を一片も成就しない中にこちらに来ました事はかへすくも心残りで御座います 蹴球春の成績如何ですか 遠く離れて何も出来ない私は唯、心をこめて大商大蹴球部二部に優勝を祈るのみです 折がありましたら蹴球部諸兄に宣敷く御傳へ下さい。

松本さんに何時も御迷惑許り懸けてゐた日の事、共に勝ち 共に喜び 共に敗け 共に泣いた日の事 今はそれも思出 昨日も明日もない軍人の生活を克明に味はつて居ります 自分達は唯興へられた命令の下に 唯其の瞬間を最喜を盡して守ります 既に數次の匪賊討伐を経験致し 頭上を掠め飛ぶ弾丸の音も 近邊に炸裂する砲彈の音も聞きました 幸ひ元氣にて氣候風土に敗くる事無く過して居ります。

飛ぶ雲の色昇る太陽の姿は何等故國と變る所も無いのに 支那は何たる悠長な國でせうか 「眠れる虎」とはよく言つ

たものです。

五千年が何の爲に過されたか？と考へます 文化は都市に偏在 地方部落民は五千年の昔その儘の夢を貪つて居ります 自動車は無し 電燈はつかずと云つた部落のみ多く その不衛生さは驚く許りです

然し自今達軍人は何でも造営します 支那家屋を利用して立派な宿舎を作り 洗面所 便所等を忽ちに造るのは勿論 料理等も其道の大家がるて珍味？なるものをつくつて呉れます 今日は小豆をゆでゝ澤山戴き目下大きなお腹を抱へて居ります

只今ニュースがはいりました 初年兵が全部一等兵に昇進すると云ふニュース まだ其の眞偽のほどは判りません

幹候の方が如何なる事か まだ確たる命令が發せられて居りません どうならうとベストを盡せばよいのです

洗濯も巧になつて参りました 奥様洗濯に忙殺されます様でしたら 汚れもの小包にでもして御送附下さい 綺麗にして洗つてあげますよ（冗談でして自分は洗濯は一番下手で何時も皆に それでも洗つたのかと言はれます）

日も暮れて ベン先も心許なくなつて参りました 今日はこれで 皆様に宣しく

ゼミナール諸先輩 近藤先輩によろしく

文
草々
雄

松 本 様

文雄君の面目躍如たる手紙である。自分は何度繰返し／＼し讀んだことだらう。恩師への切々たる報恩の情と、母校蹴球部に對する限り無き愛情を盛つた文である。悲しい哉、文雄君はこの手紙を記された五ヶ月後には二部優勝を知る由もなく、神去られたのである。

憶へば昭和十二年秋から冬にかけてのリーグ戦には小生は荒井君と五回とも一緒に観戦した。小生は職業柄比較的時間の都合がつき易いが、文雄君に致つては入社後間もないことであり、會社を抜け出すのが一苦勞だつた。

こんなこともあつた。試合のあつたある秋の日、文雄君は會社に出勤するや朝から歯が痛むと稱して、しきりと頬のあたりを掌で抑へてるた。正午頃になると課長に恐る／＼歯痛の故を以つて早退の届書を提出に及んだ。課長はニツコリ笑つて之を受取られた。文雄君はその足で直ぐ小生の事務所へやつて來た。一緒に食事をした。歯が痛むといふに隨分食ふものだと一人で朗に笑ひ續けた。早速自動車を走らせて赤のユニホームの激刺たる姿に接した。翌日課長はモミクチャにした例の早退届を荒井君に返してくれた。不審に思つて荒井君は早速昨日の出勤簿を見ると早退にも何にもなつて居らぬ。情ある課長の取計らひに文雄君の感激は一入だつた。

母校蹴球部必死の努力も酬ひられず十二年度のリーグ戦には全敗を喫した。文雄君と小生とは五回観戦して五回敗戦の憂き目をみせられた。荒井君は戦ふ者より觀る者の方がつらい、觀る者の苦しみを始めて味はつたと感慨を洩らされた。文雄君が背廣服も何も忘れて學生時代その儘の氣持で、グラウンドの真中に走り、或は控室で選手と相擁して悲憤の涙に暮れた姿は鈴木大掛、重見、村井、林田、淺田、小西、後藤、岩崎の諸氏や今の本科二年、三年の連中には殊に印象が深いことだらう。一回でも勝つて欲しかつた。文雄君を一回だけでも喜ばして欲しかつた。もう、あの時限り未來永劫に文雄君は親しく試合を観れない運命にあつたのだ。

六月二十一日附で矢張り北支の駐屯地から次の通信を寄越された。

「漸く暑くなつて参りましたが相變ず御元氣にて皆様お過しの事と存じます 既に當地は内地の真夏の様です 其後自分も元氣で匪賊討伐に警備に元氣にて從事 弾丸の洗禮を受けてこの方一ヶ月餘となりました 今後の行動に就ては種々取沙汰されて居ります 状況逼迫の目下、幹候の試験も如何なる事やら皆目不明です 只書類丈は提出して置きました

先生、蹴球部各位によろしく

末乍皆様の御健康を御祈りします。

荒井文雄

松本正雄様

荒井君の屬する部隊は七月に北支の駐屯地を出發したそだから武漢攻略を前にして當時の逼迫した模様が目に映するやうだ。

愈々粵漢線遮斷の覆面の部隊として將に本格的戰闘の始まらんとする直前に次の手紙を記して呉れた。
「〇〇に着きました 愈々元氣旺盛です

征途既に秋色濃く日中は暑熱も凌ぎよく朝晩はめつきり涼しくなりました 凋落の冬を迎へた蒋介石も纏ては没落の冬を迎へる事でせう

草枕重ねて秋の〇〇哉

星空の下、松蟲、鈴蟲、鬱蟲の鳴く音を身邊近く聞き乍ら結ぶ露營の夢も亦格別です
然し殷々たる砲聲を聞くにつけ 憎むべき蒋介石の顔が眼前に浮び出て参ります

未乍ら御健康をお祈り致します

九月八日

松本正雄様

〇〇は瑞昌と想像せられる。文雄君の豊かな詩情と共に燃ゆるが如き鬪志が窺はれるではないか。

其後更に十月上旬の日附で最後の音信があつた。殘念なことにこの手紙がどうしても見當らない。皮肉なもので餘り大切にし過ぎて却つて紛失して仕舞つた。この手紙は實に悲壯のもので、既に幾度かの激戦を経て、更に苦戦が豫想せられ、戦死をも覺悟せられた一文で其の中に「荒井一等兵最後の御奉公の秋が参りました」との一句は未だに、はつきり記憶してゐる。恐らく若溪あたりで記されたものであらう。自分の胸は騒いだ。併し如何ともする術はない。ひたすら神佛に文雄君の武運長久を祈るのみであつた。

然し乍ら、噫々、萬事休す。十二月十日附で御尊父より文雄君の戦死の御通知に接した時は、たとへようもなく力を落した。名譽のことゝは申し條、悲しき極みである。仕事は當分手に付かない。働くことも苦痛になつた。友人や先輩に逢へば文雄君を知るも知らぬもない、其の平素の人なりと、武勳を語つた。酒でも飲めば相手も共に泣いてくれねば、胸がおさまらない。川村通君の義弟に當る同盟通信社の塚原俊郎君の如きは新聞記者として粵漢線遮斷行に従軍せられただけに特に同情してくれた。インテリ部隊、學士部隊として謳はれた本間部隊の苦戦談を聞かされた。從軍記者としても何度か戦死を覺悟した程の難行軍であつた。其の行動が祕せられただけに氣の毒な部隊だつたとのことである。

さりながら文雄君は最後迄闘つてくれた。粵漢線を遮断する目的を達する迄、戦へたのは蹴球で鍛えた強固な精神力と旺盛なる體力、氣力の外の何物でもない。

文雄君に就て語り度いことは多いがつらい。萬感こみ上げてきて胸も張り裂ける思がする。先立つものは涙であつて筆が進まぬ。春去り、夏來り秋のリーグ戦も近づいた。併しもう文雄君と一緒にに行けぬ。幽明既に境を異にし、呼べど叫べどある人懷こい姿はもう見えぬ。嗚呼、悲しい哉。

遮莫、文雄君よ、君の軍人としての勳は君國を泰山の安きに置くものであり、君の蹴球部に對する熱情は多感な學徒をして感奮せしめすには措くまい。感泣せざるものは部員にあらず、日本男子にあらず。君の血潮は脈々として蹴球部に流れてゐる。在天の靈よ、乞ふ、安んじて眠れ。(昭和十四・七・八日)

荒井君を憶ふ

水島茂

戦地で二度目の正月を明後日迎へると云ふ昭和十三年十二月三十日、廣東の街は日の丸と五色旗が翻り、各宿舎の前には途方もない大きな門松が野戦の正月の前景氣をつけて居り、將校も兵士も戦捷の春を迎へる嬉しさを面に表はしてゐる時……

「荒井文雄君遂に陣歿さる」の悲報を受取らうとは……

餘りの事に暫し呆然として涙も出なかつた。どうしてもあの元氣な君が死ぬなんて信ぜられなかつた。

「虚言だ！ 荒井君は死ぬものか！ 荒井君は今頃元氣で中支の戦場を駆け廻つてゐるのだ。荒井一等兵は泥にまみれた軍帽で酷寒を冒して、暴虐な敵と、祖國の爲に血の慘む思ひをしながらも戦ひぬいてゐるのだ」

「荒井君、そうだな、君が死ぬなんてそんな馬鹿な事があるものか、同じ一兵卒の俺だつて此の通り元氣だ、君だつて張切つて働いてゐるだらう。ナアさうだらう。」

嗚呼、だが、いくら僕が君の死を否定しても餘りにも惨めな報せが相次いで來ては、僕一人がいくらそんな馬鹿な事があるものかと頑張つてもどうにも仕方がなかつた。

男が、然も帝國の軍人が涙を流すなんて……だが思ふ存分泣かして呉れ、俺の一番好きな一番信頼した、一番敬服した友が此の聖戦の犠牲になつたのだ。之が泣かずに居られるものか。荒井君、俺は涙が鼻をつたつては軍服に落ちて滲んで行くのを無精に腹立たしく思ひながら、それでも如何ともする事が出来なかつた。

空虚な心で此の春を迎へ、何心なく部誌『蹴球』第五號長瀬兄追悼號を開いた。そして「長瀬さん！ 僕が先立つにせよ、あなたが先立たれるにせよ、何れはお別れせねばならない運命と思つては居りました。然し斯んにも早く御別れしようなんて……實際僕には信じられません」と眞情を吐露して長瀬兄の死を悼んだ兄が又永遠に此の世から別れようとは餘りにも皮肉だ。人間の運命とはこんな皮肉に出來てゐるものかと運命の神を呪ひ度くなつた「長瀬さん！ 僕達は頑張ります、苦しめる丈苦しみます男が何ぞ挫けませう、如何なる運命の下に於ても、男一匹の命を投げ出して世に處します。」と兄が長瀬兄の靈に誓はれた言葉は餘りにも早く實現した。

荒井君、君が野戦病院のベッドで春秋に富む一生を終へんとした時、どんなにくやしかつたでせう。御両親や御兄弟にも會はれず、此の儘永遠に別れてしまふかと思はれた時、どんなに悲しかつたでせう。其の時の君の胸中を察すると胸が張りさけるばかりです。

然し君も祖國を護る人柱として男としての此の上ない任務を果され満足されて永眠された事と信じます。

荒井君、僕等は何と云つて君に感謝してよいか分らぬ。たゞ僕も銃後の一員に戻つた今日、銃後の勤めに邁進して國家の爲全力を盡す事をお誓するより他にありません。

戦地に今尚活躍してゐる二階堂、神野、淺枝の諸君も、又内地に在つて出動の命を待機してゐる豊田、角田、森田の諸君も兄の復讐を心に誓はれてゐる事と思ふ。

我が蹴球部の精神を此の聖戦に勵々と高揚させた君の偉業は永遠に心の故郷、蹴球部に傳はると信じます。

荒井君を悼ふ

神野光司

(神野兄の陣中便りより抜萃)

出征以來御蔭様にて至つて元氣にて、昨十月廿七日武昌に入城、約一ヶ月駐留の後、年末北支へ参りました。零下廿五度内外ですが無事過して居ります。

今回紙上に於て荒井文雄君の名譽の戦死を知り、衷心より哀悼の意を表します。部も再び第一部昇格の新春を迎ふるに際し誠に遺憾でなりません。——松本先輩宛の御書面より。

長瀬大兄の急逝に續き、昨春荒井君の死を聞き、心中暗憺たるものがあります。

荒井君は實に惜しい人でした。商大六年の生活に所謂都會の嫌惡すべき何物にも染まらず伸びくとした才能を思ふ存分部の生活に又學業に打ち込んで明朗な(眞の意味で)生活をして居ました。又、純情な持主で誰にも好感を持たれ元氣に充ち充ちた青年がありました。全く惜しいことをしました。——二階堂兄への御手紙より。

北支へ轉進途中、荒井君戰傷死の記事を見て實に驚きました。

あの純情にして明朗な荒井君の性格を貫く強いファイトは常に部の氣持の中心でした。都會の文化の中につれて此等に少しも汚されず、明晰な頭と生一本の性格で六年間の生活にぐんぐん伸びて行つた荒井君の元氣な足跡が深く印象づけられて居ます、全く惜しい事をしました。——石割兄宛の御手紙より。

荒井兄を悼む

鈴木彰

總ての人々に愛されてゐた荒井兄。世の中に之程あらゆる人々から可愛がられ親しまれてゐた人は恐らくないであらう。吾が商大蹴球部の先輩、後輩の誰もから荒サン／＼と親しまれ彼が在學中、あの頑丈な雄姿をグラウンドに著す限り常に蹴球部の空氣は和やかな朗らかそのものであつた。

荒井の(敢て敬稱を省くを許されたい)純そのもの、日常の態度には常に教へられるところが有り、自ら頭の下ることが何度もあつたことであらうか。この純眞な人のよい荒井が中支の華と散つて茲に半歳餘、この間に俺は何を考へて過したことであらうか。自分の肉體の半分を奮ひ去られた様な、その肉體を省りみることが尙更に死ぬよりも苦しい、務めてその悲しさ苦しさより遠ざかりたい、餘りにも切實な淋しさの爲何んとかして忘れない氣持……で一杯なのだ。もし彼の死を深く考へる時、この俺としてはとてもこのまゝ平穩に生きて行くことが、俺一人が、なんとしてもすなまゝ様な氣がして……あの神の様な荒井が死んで自分の様な何一つ取柄のない人間が安逸にその日／＼を送つて行くと思ふと……その矛盾の激しさ、恐ろしさに到底一日を生きて行く自信を持つてゐのだ。社會に出来てもこの植民地の一隅は、なにしろ内地人の數が少ないと、お互にしつかりまとまつて行かねばならぬといふ氣持の多分に有ることの爲に世間的の荒波には幸か不幸か未だにさらされてゐない。しかしろくと予盾のあることは些細の事にも少しづつ感する様になつたが、今度生れて始めて會ふ矛盾を荒井の死によつて始めて體驗した。矛盾と云はうか運命と云はうか誰があの強いやさしい荒井が、すべての人々に愛され續けた荒井が、中支の野戦で神に召されやうと考へ得られたであらうか。

未だに自分は荒井の死をはつきり意識出来ない。遠い霞の奥の方へ「オーライ鈴木すぐ歸るぞ」と云つて消えては行つたが、その中に何處からか「オイ今歸つたぞ」と笑顔で後から肩をたゝかれそうな氣がする。荒井の死を絶對的に考へて了ふことがなんとしてもつらく淋しい。よく俺達が夜いやな夢を見る。そして目が覺めてあゝ夢でよかつたとはつとする氣持、これが今度の荒井の死に起り得るとしたらどんなに嬉しいことだらうと何度思つたことか。思へば荒井とは長いノヽ交際であつた。豫科一年から學部卒業まで一日として會はない日はなかつた。俺の生涯にとつては彼と愉快に共に學び共に遊んだあの學生々生活が一度とない、最もたのしかつた時代となることであらう。

うらゝかな春光の芝生にそゝぐ石神井のグラウンドで褐色のパンツをはいてボールを蹴つてゐる小さくはあつたが逞しい肉體の持主が俺がみた最初の彼の雄姿であつた。それから六年間雨の日も風の日も今は亡き長瀬大先輩、中支に活躍されてゐる二階堂先輩等に或る時はどなられ、或る時は勵まされ試練の蹴球部生活を送つたのであつた。

馬が合ふとは彼と俺の仲を云ふのかも知れない。二人ともよく遊んだものだ、彼は常に人の云ふ裏の意味を考へない、人に云はれたことを眞向ふから受けいれると云ふ性質であつた。そんなところが俺の最も好きな半面であつた。よく麻雀もした。人に薦められゝばいやとはどんな場合でも云はぬよさが彼にはあつた。何をするにも他人の感情を不愉快にさせない天才であつた。じいーと目をつぶつて考へる時、今更に荒井と共に過した思ひ出が次から次へと浮び上り、一體彼以外とつきあつて面白いことが他にあつたであらうかといふことに気がつく。本當に彼と交きあつて愉快であつた。彼も亦僕を愛してくれた。

彼との長い生活の出來事を一つ／＼思ひ出して行くとそこに彼の躍如たる半面が伺はれる。そしてそれが彼でなかつたら平凡な生活の一片に過ぎなかつたことも、彼なるが故に面白くいつまでも腦裏に残る。彼が如何に朗らかな愉快なユーモラスにとんだ人間であつたかを今更深く／＼感じる。學部一年の時であつたか、關西に遠征した時のことがあつた。その歸途一日京都に下りて遊んだ事がなつた。小雨の降る静かな霞んだ様な京都の八坂神社に詣でて、それから清水寺に行くことに衆議一決。

不案内なる爲ジャンケンで負けたものが道を聞くことになつた。折よく蛇の目傘をさしたお嬢さんが敷石をわたりながらこちらに來るので運悪く、運よくかな、荒井が負けて仕方なしに帽子をとりながらすゝんで行つた。

てくれくさそうにどもりながら「エ、清水へ行くのはどちらに行きますか」すると傘をなゝめにした處が稀に見る美人でそれにあたりの静かなせいもあつたらうが「清水ハンはこの道を真直ぐに行つて……」とでもやさしい聲で云はれたので荒井ボウーとして「そうですかどうも有難う」と云つて丁寧に頭をさげて歸つて來た。それで皆で圍んで「なんと云つた」と聞いたら、荒井の云ふことがふるつてゐる「あんまりきれいな聲でボウーとして何云つたか分らなかつた」といふので大笑ひ。それ程彼は純真そのものゝ好ましき學生だつた。

又程度を越した無精もので汗に汚れた臭いユニホームを平氣でよく着てるものだつた。夏などブウーンと香つてなんとも云へぬ氣持になつた。それが如何にも荒井らしく現在朝鮮に來てコツ／＼煩雜な仕事を片付けながらも時にあのユニホームの汚れた色と破けたパンツと汗の香ひを思ひ出してとても懷かしいものがある。

ブレイに於ては彼はレフトインナー俺はライトバックであつた爲、練習の時はいつもぶつかつた。火の出る様な練習中よくこの野郎やりやがつたな」と争つたものであつたが、終れば氷の解けた様にほがらかなわだかまりのない二人であつた。

荒井が社會に出てから會社の務めの關係で青山の俺の姉の家に下宿してゐた。ともかく誰からも好かれる荒井は俺の姉からも、姉の子供にも大の氣に入りで、荒井さん／＼と馴まれてゐた。出征してからも青山の姉とは絶へず文通があつた様であつた。會社務めの時、餘り遅く歸る日が續くとよく叱られてすまなさうな顔をしてゐたつけ。サラリイ日にはよく無理をして奢てくれたことも二度や三度ではなかつた。

それにもまして有難かつたことは、學校を出てからも常に「近頃のフォワードは走つてゐるかい、突込みあるか」と始終自分の長い經驗から尊いコーチをひそかに忠告してくれた。試合のある時は時間の許す限り應援に來てくれた。いつも／＼彼の

熱心さ、學校を出てからもいつまでも商大蹴球部を忘れない難有い氣持には頭が下つた。

人の好かつた荒井、誰にも愛され敵を持たなかつた荒井、よき兄、よき友、荒井こそ、死ぬまでつき合ひたかつた。何者にも換へ難い先輩であつた。

小平のグラウンドには日々吾々の若き蹴球部員の血の出る様な猛練習が續けられてゐることだらう。星移り年慣れど、いつも吾が蹴球部の試練場として部員のバイクが印せられることであらう。

若き商大蹴球部員よ、尊き荒井先輩の足跡の残された小平グラウンドにて常に真剣な練習を續けて呉れ、荒井は二度と諸君のグラウンドに顔を出されることはないであらう。しかしだ。絶えずあの亭々と聳ゆる一本松の頂上より常に諸君の練習を見守つてくれる事であらう。グラウンドに出た時ほんの一瞬でも心の中で荒井先輩の爲に心からの冥目を送つて欲しい。彼は常にあの暖い目で諸君等の眞摯な練習を見守り續けてくれることだらう。

朝鮮の一隅より遙かに彼の靈の安らかなるを祈つて筆を欄く。

昭和十四年六月廿一日

荒井兄を悼む

村井恒典

荒井君、思へば長き様で短かき六年間だつた。四部の昔より共に年を取り、同僚として共に喜び共に泣き、商大蹴球部の爲に働く來た過去を振り向いて見て誠に感慨無量。今君を殺した武漢の空を遠く兵營の一角より睨み改めて云ふ、敵は必ず取るぞと叫んでゐる。この叫だ。つよくリーグ戦の後に叫んだ聲と同じ聲だ。

貴君の名譽ある戰死を聞いたのは入營一月前、小生は不幸にして病床に在り、切歎扼腕、必ず仇は報いるぞと心で叫んで何となく涙が出て來た。

實を云ふと君の事だから抜群の手柄を立て、例の通りニコニ微笑み乍ら「何大したしたことないよ」と云ひながら凱旋して来る光景のみを胸に描いてゐた。小生の樂天觀はみじめにも破れた。餘りに以外な現實、アルバムに見る漫才三人男、色々の思ひ出。小生幸にして入營、元氣よく軍務に精進、鈴木も朝鮮の天地で、小生同様の心で歯をかんでゐる事だらう。

荒井君、君は長瀬先輩の良き後繼者だつた。餘りに可愛がられ過ぎて早く呼ばれたのかい。今頃ジドンノとテイホーの音はナリシブクと例の調子で碁盤を圍み乍ら天國で語り合つてゐる事だらう。

思へば盡きない君の追憶、限られた時間で而も無才書き様がない。今後兵營の中で蹴球部魂で頑張る事を誓つて君の冥福を祈る。

荒井の魂よ安かれ。（兵營の窓より 十四・六・十九）

荒井さんへ

小西正夫

呼び慣れた言葉で「荒井さん」と、言つて見る。もうそれだけで、私には何も書けなくなります。「荒井さん」といふ四つの文字が醸し出す響の中には、俗っぽい意味ではなくて貴方が生きてゐるといふ悲しい安心が宿されてゐる様に思へます。それなのに貴方の追悼號を出す可く、計畫はどしどこ進んでゐます。その上、私はその編輯員の一人でもあるのです。悲しい安心は本當に悲しい安心となりました。

この様な氣持ちである私には、貴方の追悼文なんか書ける筈がありません。私は、今でも悲しい安心を悲しい安心にしたくないと、秘かに念じて居ます。そんな譯ですから、追悼文の事を聞いてからは、何か美しい純い物語を書いて差上げたいと思ひ立ち、今日迄色々と考へ続けて来ました。しかし、花々の名前さへ満足に云へないやうな者には、全く出来ない相談である事に思ひ當り、淋みしい心を抱いてその計畫を断念致しました。私の物語の題は、「黄楊の櫛」とつけようと思つてゐました。四國路の春を背景として靈場を廻り廻るお遍路さんを登場させて、黄楊の小櫛が持つ沁々とした懷しい味を出し得たらと思つてゐたのです。貴方の遺された尊い日記を読んでゐる間に、物語を諦めた私には、貴方に話し掛ける以外には書き様がないといふ事が判然と致しました。

今日も亦暑い一日が來る事でせう。暑い戰場で貴方は如何しておられるのでせう。否如何されてゐたのでせう。昨日私は、路上で夏の強い光を浴びて死んでゐる蜥蜴を見掛けました。私は、この蜥蜴を醜惡と憎みはしましたが、決して憐れむといふ氣は起りませんでした。そして貴方だつたら——と、私の心の貧しさを想はない譯には行きませんでした。貴方が、敵の屍に花を手向けられたといふその花はどんな花だつたのでせう。

人間が死んだら花に生れ代るといふ事は成程美しいかも知れません。或は、土になると觀じて憎惡悲哀を超えられるのかも知れません。しかし貴方が亡くなられたら、とはどうしても考へられません。私はこれからも、折に觸れては今の様な氣持ちで話し掛けの事でせう。そういう私は、山彦の昔話を夢見てゐる者かも知れません。

今日は死んだ人の靈が、人間の世界に歸つて來ると云はれる盂蘭盆の日です。今日こそ貴方と悠つくりお話する事が出来るでせう。

追

憶

池 尾 隆 二

シーズン・オフの會の時などによく「池尾お前俺の代りにリーグ戦に出るつもりでなくちや駄目だぞ！」と云つては私を勵まして下さつた荒井さんだつた。そんな時、私は何時も「よし頑張るぞ！」と荒井さんに抱きついたり、固く手を握つたりして、泣いて精進を誓つたのだつたが、その後大した上達もせず遂に荒井さんの後を繼ぐことが出来なかつたのは殘念でもあるし又荒井さんに申し譯ない氣もする。

荒井さんが咸寧の野戰病院で戰死されたと云ふことを聞いた時も心の一隅では「嘘だ！ 嘘だ！」と弱く呟くものがあつたが次の瞬間には、荒井さんのあの寂しげな、悲しい顔付が涙で霞んだ様に思ひ浮んだのだつた。

こう云ふ言葉は失禮かも知れませんが、純情で無邪氣な荒井さんの御性格は深く心の底に在る悲しみに打ちひつて、朗らかに語り、朗らかに笑ひ、みんなと一緒にになつて冗談も云はれる靜かな強さを持つて居られた。

私は自分も荒井さんの様に、何時までも純情で無邪氣でありたいと何度も思つたことだらう。社會へ出てからも、學生時代の純情で無邪氣な御性格は少しも變らず、益々自由に、希望に燃えて話されるのを聞いてどんなに美しく思つたか知れない。

又出征されてからも常に吾が部のことを心に掛けられて、度々よこされたお便りには、吾々後輩を激励し、部の限りなき發展を祈つて居られた兄の温い御心がひしそと感じられ、又軍人としての立派な平常からの御覺悟の程も察せられて讀む者をして奮起せしめないではゐない強い——何かがあつた。

荒井さんに就て印象に残つてゐることは色々ある。僕等が豫科一、二年の頃の合宿には、グランド往復のランニングを今

様にみんなが一緒に轡つて走るのでなく、終の方になると、次第に早い者だけがトップを競つて走つたものでした。その時荒井さんなどが大概トップを走つて居られた。僕など後の方から走りながらそれを見てどうしてあんなに體が續くかと不思議に思つたものだつた。又新らしい靴を穿いてマメも出来ずに平氣で練習されてゐた。三日、四日も平氣でそれを續けて居られる内にもう靴の方が伸びて型が變つて來るのである。僕など靴に馴れるのに人一倍苦勞する方だから、そんな時には全く羨ましいと思つた。

商大蹴球部が三部から四部に轉落して最も逆境にあつた頃から、その學生生活六年間を專心蹴球部の爲に捧げられて、蹴球部今日の基礎を造られたのには兄の力、亦實に大であるのを思ふ。

事變の前途、尙多事多難にして、吾等青年の意氣と力の要求せられる所も亦實に大である。此の時に當つて永遠に東亞建設の尊い礎石として大陸に華と散られた兄に對して、吾等は只、蹴球部今後の發展向上をお誓ひして、その靈にお答へしようではないか。

荒井さんを憶ふ

狩森正雄

荒井さんは今や亡し。忘れもしない昨年十一月三日の明治節に荒井さんは戦死されたのです。荒井さんが亡くなられたなんて本當に嘘の様だ。何だか夢の様な氣がする。荒井さん!! 荒井さん!! といくら呼んでもあの人なつゝこい荒井さんの聲はもう聞かれないのでだ。

何時も朗らかな荒井さんでした。淋しい氣持になつてる時でも荒井さんと話して居ると自然に陽氣になつてくるのでした。

私が蹴球部へ入つた時も一番近づき易いのは荒井さんでした。あの親切な、情の厚い、快活な荒井さんも既に此の世には亡いのだ。あのやさしい笑顔にも二度とお目にかゝれないのだ。

平生は朗らかな荒井さんも練習や試合になるとまるで熱と意氣の權化のやうに見えるのでした。あの汗と泥に汚れたユニフォーム姿の荒井さんが目の前に浮んできます。グランドを汗と泥にまみれて縦横無盡に駆けめぐる荒井さんの姿が浮んで来ます。蹴球は單なる足技ではなく精神力だといふ事を如實に示して下さるのでした。黙々と頑張つて我々に身を以て範を垂れて下つた。又倒れてヘドをはくまで頑張られた荒井さんのあの精神力、意氣と熱は私の腦裏に刻みこまれてゐます。グランドでは倒れるまで頑張る全身之れファイトの荒井さんも練習以外では實にやさしい、人情味の濃い荒井さんでした。我々を大きな愛でもつて抱擁して下さいました。家に歸られては親孝行な荒井さん、總てに我々の範とすべき荒井さんでした。園芸に於ても麻雀に於ても蹴球部のナンバーワンでした。又詩の上手な荒井さんは常に我々を驚歎させました。荒井さん!! この我々の敬慕してやまぬ荒井さんが幽明境を隔てゝ、もう二度と再び此の世で逢へないと思ふと、何と言つてよいか言葉で表はせません。誠に感慨無量です。長瀬先輩が亡くなられ、今又荒井先輩を失ふ事は我々として之以上の悲しみは有りません。部誌第五號の長瀬兄に捧ぐの題の下に、荒井さんが「長瀬さん、僕が先立つにせよ、あなたが先立たれるにせよ、何れは御別れせねばならない運命と思つては居りました。然しこんなに早く御別れれしやうなんて……實際僕には信じられません」と書いてあります。長瀬さんが亡くなられて一年たつかたゝずで荒井さんが亡くなられるなんて誰が考へられませうか。荒井さんも今は長瀬さんと御一緒に蹴球部の前途を見守つて居られる事でせう。

荒井さんが今度戦死されたのも、その倒れて後己むの責任感からだつたと思ひます。蹴球部精神を戰場でそのまゝ實踐され倒れるまで頑張られ、護國の鬼となられたのです。たとへ荒井さんの肉體はなくなつても、その倒れて後己むの熱と意氣、荒井さんの精神は何時々迄も蹴球部の中に生きてゐると思ひます。我々は荒井さんの精神力を範として倒れる迄頑張る事を御

誓ひ致します。謹しんで荒井さんの御冥福を御祈り申します。

荒井さんを憶ふ

菅瀬十朗

荒井さんが名譽の戦死をされた。然し初めて聞いた時にはどうしても信じられなかつた。

御骨が東京驛に着いた時、變り果てたその御姿を見て、ほんとに荒井さんは既に此の世に居られないのを知つた。人生なんてわからぬものだとつくづく感じた。

古い部誌を讀んでるたら、荒井さんの長瀬さんに對する追悼文がのつてゐた。その始めにこんな風に書いてあつた。

「長瀬さん!! 僕が先立つにせよ、あなたが先立たれるにせよ、何れは御別れせねばならない運命とは思つて居りました。然しこんなに早く御別れしようなんて……實際僕には信じられません」と、荒井さんが長瀬さんに書かれた此の文を亦僕が書かうなんて、ほんとに僕にも信じられません。人の事は自分の事、運命は如何に廻るものか、ほんとにわかりません。今に僕もこんな運命になるかもわからない。人の命なんてはかないものだ。

荒井さんが亡くなれても、肉體は死滅しても、その我々に對して與へられた教訓は永久に残るものである。荒井さんの仕事は我々蹴球郎員一同が受繼ぐ、それが我々のなすべき唯一の御恩返しだと思ひます。あの朗らかな荒井さん、身なりをかまはぬ荒井さん。何んとなく神々しい氣がする。然し徒に悔んでも仕方がない。荒井さんの與へて下れつた教訓を胸にだきしめて、我々は之れから世の中へ出ます。そして頑張ります。どうか地下の荒井さん御安心下さい。

其の日

二階堂晴三

荒井さんの悲しい報せの齋らされた客臘の其の日である。

菊かほるよき日をゑらみくに遠く屍をうづむ君がこゝろは逝くや君いくさのおとのとよみたつ支那のおくにぞ心とびける

道もなき野末の秋のはなとちる君がのこせしかほりたゝへむ

其の夜米山君と松山の荒井さんの宅へ。焼香して涙を禁じ得なかつたものは、往きとかへりの松山のみちを生きるものとして歩んだのである。

松山の月すむ秋の夜のみちは君をむなしく待ちにけるかも

在りし日の君なつかしみ逝く秋の人もとほらぬ宵のみちいぬ

東京驛で其の日あの遺骨を吾々は迎へたのである。

いや白き布もてつゝむ君が魂むかへしものは重々あのみぬ

×

×

×

×

これまで國立の生活のつれづれなるまゝに、時々詠んだ歌を書きとどめておいた。いやそれは歌と名付けられるものではないことを固より承知してからのことであつた。その歌はたゞ自分の狹む世界の其の日其の日を記念するだけにとどまつて十分なもので。他人の前へ出してとやかく言つて貰ひたくないものであつた。言ふまでもなく、自分などが短歌を弄ぶとその道の

人からめ警られるのを惧れたし、自分は自分の自由を愛したからである。その撻を破つてまで、こゝにこれらの歌を選び出したのは、全く荒井さんの追悼文に困りはてたからである。心の思ふまゝに筆が走つて呉れぬ苛々しさを身を以て體験した人はよく分ると思ふが、自分などもその體験を一しほして來て、それを菲才のせゐと諦めてるるものだから困つた揚句がこの歌となつた。

荒井さんは確に筆で書けない程自分には或る力を以て臨まれる。そしてその壓倒する力が奈邊にあるか解せない哀れな自分は撻を破る大冒險をして、文を歌の形式に藉りた。自分のこの生意氣な試みが誰かに不快の念を起させたとしても、自分は唯このうちに信てるる眞實を持つてると答へるばかりである。自分はあの歌を愛された荒井さんにもこの僭越を謝り。部の人達にも寛容を御願ひして筆を措く。

荒井さんを憶ふ

米山大三

(一)

荒井さんが御戦死になられた事を知つてから、自分は時々夢の中で荒井さんにお合ひする。いつもその度に「何だ、荒井さんが亡くなつた等と云つてゐたがやつぱり虚だつたのか」と云ふやうな驚きと喜びとをして我々を非常に悲しめた荒井さんに對して一寸非難するやうな氣持とを感する。だが夢の中の荒井さんはいつも黙然としてゐて何事も云つて呉れぬ。そしてあらぬ方をちつと見つめてゐる。非常に嚴肅ではあるが何か淋しそうなお姿である。

荒井さんの夢から目覺めた時、自分は常に悲しみや淋しさのどん底に陥る。週囲は闇であり全くの静寂である。自分は獨りぼつちでねてゐる。自分の心を紛らはしてくれる何物も無い。いやでも荒井さんの面影や色々な思ひ出が自分の心の中に一ぱいに迫つて来る。そしてその面影や思ひ出には常常に死と云ふ暗い陰がつきまとふ。もう一生涯この荒井さんには絶対にお會ひすることは出来ないのだと云ふ悲しい事實が常にすべての思ひ出や面影を暗い淋しいものにしてしまふ。

わけても自分が思ふのは荒井さんがお亡くなりになつた時のことである。野戰病院の一隅に澤山の或は負傷し或は病に倒れた戦友と共に、あのなつかしい荒井さんが死を目前に控へて臥して居られるお姿を自分は思ふのである。あゝその時の荒井さんの御心は如何であつたであらうか。荒井さんは何を思ひ何を感じたであらうか。お家の人々の事は勿論、松本さんや淺枝さんや角田さん達の事をも考へたであらう。亡くなられた長瀬さんのことも思つたことであらう。それから又自分達の事や部の事も色々思ひ出して下さつたに違ひない。闇と靜寂の中に獨り目覚めてこんなことを思ふ時淋しさと悲しさとが、そんな言葉では表はすことの出来ぬ深刻な感情に自分は胸がしめつけられるやうである。自分は此の思ひに耐へ切れぬ、氣が狂ひさうである。自分は床の上に轉々として、此の餘りりにも強烈な悲しみから逃れ出んとして闇へ續ける。

(二)

荒井さんは如何なる人であつたか。若し自分が荒井さんを知らぬ人にこの様なことを尋ねられたとしても自分には何も答へることが出来ない。何故なら荒井さんは自分の持つてゐないものを、自分が常々欠けてゐると思つてゐる所のものを、非常に豊富に身に付けて居られたからである。自分には眞に荒井さんを理解し得るだけの力が無いのである。

荒井さんはサツカーレ三万才の一人である。荒井さんは明い朗らかな又無邪氣な人であると云はれる。確にこれ等も荒井さん的一面であると自分も思ふ。だが此の一面のみを見て、此れを荒井さんの全面に及ぼさんとする時大變な誤りを犯すこととなる。荒井さんは朗らかな人であると云ひ切つてしまふには實に餘りに深いあるものがある。我々の魂の底に強くひどくあるものが、荒井さんを思ふとき自分の心に迫つて來るのを感する。

此の荒井さんの中にあるあるものとは何か。自分自分は様に理解して居る積りであるが、自分は決して今此所にそれを述べると云ふ専越を敢へてしようとは思はない。何故なら自分が荒井さんをかくの如き人と考へるのも、實は自分自身の姿を荒井さんの中に映し出してゐるに過ぎず、自分の如き未熟な廿二才には絶対に眞の荒井さんの御人格を表す事は不可能であると信するからである。

唯自分が敢へて云ひ度いことは荒井さんのグラウンドに於ける張頑りである。荒井さんの練習振りを見た事のある者は誰でもよく知つてゐる所のあの不撓不屈の頑張りや斃れて後已むの心意氣や、そして又試合に於けるあの文字通りの必勝の氣魄や感激の涙は如何して單なる所謂無邪氣な朗らかな人から湧き出て來得ようか。あの頑張りや、あの張り切りは荒井あんの御人格の深みからほとばしるものであり、部を愛する心の發露でなくて何であらうか。荒井さんの頑張りぶりを靜かに思ふとき、自分は荒井さんの眞の姿を知り得るやうな氣がする。

(三)

荒井さんが亡くなつた、あんなに元氣であつたあの荒井さんが白布に包まれた變り果てたお姿になつてしまつた、としみじみと考へるとき、自分は運命とか死とか云ふ事を數へられるやうな氣がする。

自分も今迄死と云ふ事は度々考へた。しかし今度程死と云ふ事實が強く痛切に自分の心の底にひびいたことはない。荒井さんが死んだやうに總ての人は必ず死なゝければならないのだ。自分が愛する人も又嫌惡する人も、大臣も、學者も、百姓もすべての人間はいつかは焼かれて灰となるか、埋められて冷たい土となつてしまふ關係をもつてゐるのである。此の自分も何時かは必ずあの冷たい土の中に獨り埋められて行く身なのだ。自分は此の如何ともする事の出來ぬ事實をしみ／＼と考へる時、たまらない淋しさとそして人なつかしい感情が湧き出て來るのを感じる。さうしてあらゆる人に對して、自分が嫌ふ人、輕侮する人に對しても限りない親しみの心を覚えるやうになる。そして又此の事は自分に、自分の一つしか無い短い生涯を大切にするやうに教へるのである。自分は毎日／＼の生活がそして更に自分の一瞬／＼が、一呼吸／＼が自分にとつて極めて大事なものと思はれる。

荒井さんのことを、荒井さんが亡くなられた事を思ふ度に自分は自分の心の中から、浮ついた輕薄な氣持が消えて行き、自分の生活の一時々々が潤ひのあるものと成つて來るのである。

これもある世から荒井さんの靈が罪多き自分によびかけて呉れるのかも知れないと思つてゐる。荒井さの靈に恥かしく無いやうに、眞面目に生きて行くことを荒井さんにお誓ひ致し度いと思ふ。

終りに臨み心より荒井さんの御英靈御冥福をお祈り致します。

荒井先輩を悼む

荒川守之助

昨年十一月荒井先輩には中支那の野に於て名譽の戰死をせられたとの悲報に接し、驚きの餘り言葉も出なかつた。一度び出征せられたからには御國のため戰野に散るは武人として、荒井先輩も本快とする所でありませうが、然し戰場に武勳を立てると共にその豊かなる經驗を基としてのその後の活躍こそ我々の常に期待してゐる所であつたのである。眞に殘念でならない。私は荒井先輩とは個人的な接觸はなかつたが、然し蹴球部を通じて多くのことを學ばせられた。殊にグラウンドに於ける淺枝先輩と共に縦横に走り廻られた姿は我々を壓するまでに迫力を持つてゐた様に思へる。

今は皆大陸に活躍せられつゝある淺枝、角田、森田、田島諸先輩と共に荒井先輩には蹴球部再興の中堅の士として種々盡力せられて來たことを思へば、あのグランド上に示された偉大なる精神力も當然のこと、肯づかれる。それにつけても、私も個人

的に指導せられる機會のなくなつてしまつたことが殘念でならない。

最後に衷心から荒井先輩の御冥福を祈つて筆を擱く。

荒井先輩追悼文

石割知之

此の度の事變により、我々蹴球部員は惜しむべき先輩を失つたのである。蹴球部の萬才師として笑ひを振まかれ、どんなにつらい練習をも、辛いとか疲れたとかいふ表情を見せずに、笑つて我々をよくリードして戴いた荒井さんも、今は中支咸寧の野に護國の鬼となられたのである。荒井さん（荒井先輩等と固苦しい言葉は亡き兄にはふさはしくありませんので、荒井さんと呼ぶして戴きます）の憶ひ出といつても、悉く愉快な、朗らかな事のみが浮び出し、未だ豫科一、二年の私に取つては亡き兄の胸に藏された淋しさ、等といふものは読み取れなかつたものであります。

卒業されてからも、よく私達をお尋ね下さいまして、或る時は會社を二時間程抜けて私達のリーグ戦に備へる單なる練習マツチに應援に来て下さつた事もありました。あの年は不運にも全敗し、殊に對明大戦に敗れ一部陥落の憂目に遭つた時、穢いユニフォーム姿の選手と相抱かれ、共に涙を流され、我々をはげまして下さつた光景が私には最も印象に残つて居ります。蹴球部の生んだ詩人、荒井さんも同じく蹴球部生みの親の長瀬さんに次いで世を去られた事は、私達部員に取つては亡き兄の足跡が大きいだけに悲しみも大きいのであります。

一部復活の成る數日前に荒井さんが逝かれたのは我々に取つては殘念である。草葉の陰で、既に御承知になつて居るとは思ひ乍ら、せめて御生前に此の報せを聞いて共に喜こんで戴きたかつたのであります。

昨年の遠征の時、三商大の懇親會の席上、大阪商大の人が荒井さんの思ひ出と云つて、次の様な話をした。

「荒井さんが本三の時、即ち此の前の遠征の時の、矢張り此の三商大會合の席上で、「三商大戦も此れで最後だから、あと

は草葉の蔭で眺めて居たい」と云はれたのをはつきり覚えて居りまして、何となく豫言が當つた様で感慨深い。」

私も此の時の事は覚えて居るが、大阪の人々に云はれて、始めて思ひ出したのであるが、私もその當時の光景を思ひ浮べて、感慨に耽つた。

色々思ひ出があるが、どんな些細な愉快な思ひ出も兄の面目躍如たるものがある。私達は荒井さんが凱旋されて、兄獨特の戦場話を聞く事を幾度想像して居たでせうか。これから私達を色々指導して戴き、相談にも乗つて戴くべき人でありますのに、今はもう逝かれたのかと思へば夢の様であります。せめてもの御恩返しとして私達の今年の死にもの狂ひの奮闘の結果たる一部優勝といふ最大の花束を靈前に捧げたいと思ひます。

在りし日の荒井さんの悌を偲びて

金井雄吾

「荒井さん」と私はこうお呼び掛けするのが最も親しく荒井さんの御風格を偲ぶ事が出来るのです。此の追悼文を書き乍ら静かに冥想すれば、あの特徴のある唇を突き出して、にこにこと微笑しながら私の真正面へ握手しやうと、手を前に出して進んで来られる御姿がまざまざと脳裡に浮び上つて参ります。

思ひ起せば、私が荒井さんに始めてお目に掛つたのは、昭和十年の豫科入學後の蹴球部新入部員の歓迎會の席上ででした。其の直後荒井さんは私の下宿へお出でになり、共に麻雀に打ち興じた事もありましたつけ。以來御卒業迄の二年間種々御

世話になりましたが、荒井さんは絶対に理窟めいた事を言はれた事はありません。部室では始終ニコニコと快活にしてゐられました。ほんとうに親しさの溢れた方でした。種々の換歌を作つて歌はれたり、字探しをして私共を笑はせたり、部室の清い朗かさは全く荒井さんから醸し出されてゐました。

グランドでの荒井さんは部室での荒井さんとは全然別人かと思はれる程に、突進に突進を重ねる軽タンクと言つた感じがある程の頑張りを示されました。我々はよくこんな話をしたもののです。「あんなに始終驅廻つてもヘバリを知らない荒井さんの心臓は一體何で出来てるのだらう」と。然し神ならぬ人間の荒井さんも大いなる疲れがあつたに相違ありません。それを誰にも一言も洩らさず頑張り抜いた點こそ、「眞の人間荒井」の姿だつたのでせう。荒井さんは我々商大蹴球部の無言の傳統たる「頑張」を無言の裡に私共に教へて下さつたのでした。

あの快活な荒井さんの微笑の中に私は一種の淋しさの籠もつてゐる事を何となく感じてゐました。所が何時か重見先輩が荒井さんの寮の室友と共に寫された寫真を示されて云はれましたのに、「此の寫真が荒井さんの本當の姿だよ」荒井さんは快活にしてゐられたが實は淋しさの半分まじつた微笑だつた」と、此の淋しさは何の淋しさであつたかは勿論私には分りません。然し荒井さんの最後迄國の爲戰友の爲に働くかれて遂に名譽の戦死をなされた事を考へます時、荒井さんを失つた悲しみはある淋しさがより一層私をして涙をこぼさせます。恐らく荒井さんはあの淋しい笑顔で己が任務、己がベストを盡した満足感に浸りつゝ御他界なされたのでせう。

眞のサッカーマン荒井さん、眞のスポーツマン荒井さん。私は眞のスポーツマンたる荒井さんを心から御慕ひすると共に今後益々研鑽努力して、以て眞のスポーツマンとなる様に努力する事を荒井さんの御靈に誓ふ次第であります。

荒井さんの御靈に捧ぐ

だが其の聲は

悲しさうだ

何が悲しいのだらう

何の爲に飛んでゐるのだらう

いや飛ぶのが

彼の任務だ

彼は何時迄も

唯黙つて

何時迄も

倦まず撓ります

飛んでゐる

一羽の鳥が森の上を
飛んでゐる

何時迄も何時迄も

あちらこちら

と飛んでゐる

倦まず撓ります

飛んでゐる

荒井さんへ

清 水 蘭

懷しき魂

早野廣太郎

何にも書けない私は、私の總てを捧げて荒井さんの御冥福を祈るのみです。許して下さい。(十四年五月卅日夜)

私は荒井さんの事を想ひ出す時はいつでも、蠟燭の光から受けるあの親しみ深い雰囲気を感じずには居られない。丁度暗い室の一隅に瞬く淡い燈が、その下に坐るあらゆる人々の上に温い光を同じく投げ與へるやうに、荒井さんの風貌とその心は、なにかしら蠟燭の光に似た温い人間的な氣分をその接する人の總てに與へすにはおかなかつたのである。それは何故であらうか。それは、荒井さんが稀にみる純粹な魂の持主であつたからに外ならない。都會的な空氣によつて餘りにも疊らされた心を有する人は、兄の人格の裡にかくあるべき人間本來の姿を見出す事が出來たに相違ない。荒井さんと交る人は誰でもその素朴な飾らざる態度から、健康的な誠實な魂の所有者のみが知らず識らずの間に發する魅力に氣がつかずにはゐられなかつたのである。あらゆる意味に於て原始的な、素朴な心に對した時、人々は太古に何處かに置き忘れたと思つた人間の美しき魂を、活きくと眼前に見て驚かされたのであつた。それにひきつけられたのだ。

電燈の光のみに依つて眼を慣らされた近代の人々は、蠟燭やランプの光が醸し出す光景の裡に、或る趣を發見する事が度々ある。其等の光は、ネオンの持つ華かさを有せず、又其等の中に電燈が與へるるあの人間の秘密の底までをも照し出さうとする科學の誇を求める事は出來ないが、吾々の祖先達がその下で愉しげに語りあつてゐる鄙びた空想や、他人の秘密はそつと片隅に隠してやつて、その人の有する明い方面のみを見て行かうとする謙讓な氣持を見出す事が出来るやうに思はれる。荒井さんが詩を好まれたのも、その心中に此のランプが點つてゐたからであると思ふ。此の光によつて事物を見る時、あらゆる物は生命を有するやうになり、眼に映る總ては様々の陰影ある美しき姿を呈し來り、山や川や野の草木の上に、限りなき情緒がゆるやかに燃え上つてくるのであらう。

此の質朴なそして情熱に溢れた魂を吾々の部の中に有してをつた事を、どれ程感謝してよいか分らない。此の美しき精神に依つて照された事を、如何に誇らかに語りあつた事であらうか。荒井さんから受けた印象は、永遠に吾々の心の裡に、蹴球部の中に流れてゆくであらう。

去年の春、健全なる肉體と、それにもまして男らしい精神を有してをられた荒井さんは、胸中に祖國への烈々たる愛を藏して、勇躍大陸へと出發された。吾々は都合によつて見送る事は出來なかつたが、同じ兵營に居られた角田さんの御話によつて、その時の光景をありくと思ひ泛べる事が出来る。荒井さんの軍服姿の脊に、最後に角田さんが人垣の間から『荒井!!』と呼ばれたさうであるが、此の聲も何千人といふ家族の人々の昂奮に遮られて荒井さんの耳には届なかつたのか、振向きもせずに旗の波にかくれてしまはれた。私は此のお話をきいた時、この親しい二人の友達の心を想像して無量の感慨にうたれざるをえなかつたのである。

昨年の秋、荒井さんが戦死された事を耳にした時、吾々は茫然として口に出す言葉も知らなかつた。燃ゆる闘志によつて最後まで頑張られた荒井さんが、弱りゆく意識の中で何を思はれたかを想像する時、更に暗然として涙の下るのを禁じえない。祖國への愛と、御両親や御兄弟への限りなき愛情は、荒井さんの若き生命を幾度か暗い世界から逃れさせようとしたであらう

に。きつと荒井さんの両眼は涙に濡れてゐた事だらう。朝まだ、野の草に光る清き露の様に、美しき魂にも、天は此の尊い朝露を與へたであらう。

一本の蠟燭は遂に消える運命を持つてゐる。併しその時が全く豫期せざる程に早く來たのは、惜んでも餘りある事である。尊い魂が消えたと知つた時、吾々は今更乍ら荒井さんの存在の大きかつた事に驚き入つた。人間に一番必要なものを持つた人を吾々の周囲から失つて了つたのだ。弾丸の下から吾々の部の優勝を希つて居て下さつた此の先輩の魂に對して、吾々は茲に感謝の念を捧げると共に、荒井さんの如き熱を以て今後の生活を行つてゆきたいと思ふのは、自分一人ではあるまい。

此前、荒井さんの御通夜をさせて頂いた時、蠟燭の向ふに親しい寫眞の姿を仰ぎ乍ら未だ荒井さんが何處かに生きて居られるやうな氣がしてならなかつた。

荒井兄を悼む

堀尾貞一

一昨年起つた日支事變は日本を一大轉換期に立たしめたが、時局は此の日本の社會の一部分である蹴球部に影響を與へずには居なかつたと云ふのは、毎年卒業される諸先輩の悉くは兵役の義務に服され又は名譽の應召をされ、茲に遂に蹴球部出身最初の戰死者として我等の荒井兄が水へに靖國神社に合祠される事となつたからである。

荒井兄に對して我々は何とお言葉してよいか判らない。荒井さんが今日の蹴球部を造り上げられた功績は云ふ迄もないが、それ以上に我々はあるの親しみある笑顔や所謂蹴球部三萬才の一人である荒井さんの機智に富んだ言葉を忘れる事は出來ない。練習前や練習後には我々は皆荒井さんと共に笑つた。併し乍ら蹴球の練習には飽く迄荒井さんは眞面目で熱心であつた。私は豫二の夏の合宿の時猛練習を前にして、ヘタバつてゐる時に荒井さん一人が元氣よくボールを蹴つて居られたのを思ひ出す。我々はどれだけ荒井さんに勵されたか判らない。

商大を出られてからも蹴球部の事を一時も忘れないで、試合には何時も必ず顔を出して皆を激励された。

出征されてからも、我々は北支から戰場便りを頂いた、その中にも荒井さんらしく「今から蔣介石の首を取りに行きます」と云つたユーモアな一節もあつた。我々は荒井さんが元氣で漢口戰線に戦つて居られる様を想像して居たのに、我々の想ひも及ばぬ苦勞をされ、遂には咸寧で亡くなれようとは……。

我々がリーグ戦に優勝し一部復歸を實現したのも見られなかつたのは、遺憾の極である。されば、荒井さんの生涯の大部分は蹴球生活をして送られたのである。我々のなす事の出来る最大の追善供養は今年度リーグ戦に最も立派な戦績を得て、よつて以て蹴球部の發展に努力する事であらう。

荒井さんを偲びて

吉田富彦

荒井さんが戰傷死されたとの報を聞いた時、其は直ぐに信じる事が出來ませんでした。誤報であればよいがと獨言したのです。二年間蹴球部で同じボールを蹴つた荒井さん、そして卒業せられてからも試合の度毎に激勵しに来て下さつた荒井さん、恐らく荒井さんのおの元氣な御姿を知つてゐる人は誰も信じる事が出來なかつたでせう。御遺骨が到着し御葬式の済んで終つた今日でさへ部室に行けば御會ひ出来る様な氣がしてなりません。

荒井さんのグランドの御姿、あの旺盛な鬪志を以てあらゆる苦しみに打ち勝つてくれた／＼になる迄練習して居られた御姿、

其の頑張りは吾々下級生にどれだけ活を入れて下さつたか測り知れないので。四部のどん底に落ち込んだ我が蹴球部を故長瀬さんを先頭にして新なる蹴球部の確立に日毎、努力して来て下さつたのです。現在の蹴球部よりはずつと部員も少くチームを作れるか作れないかの人數でよく毎年優勝する事が出来たのは當時の先輩諸兄の撓まさる努力と、そして大いなる愛による團結が然らしめたのです。

グランドでは黙々として練習して居られたのとは反対に部室では邪氣のない純心な明朗さでなごやかな雰囲気を作つて居られた荒井さん、直接御話しする機會の餘りなかつた私達下級生達にも本當に懐しく感じられてならない方です。賑かな反面又淋しみの感じられる荒井さんも私達の胸の中に強く印象つけられます。

荒井さんと一緒に練習する事の出來た私達は實に幸せだつたと言はなければなりません。

荒井さんの魂は蹴球部傳統の精神に融け込んで、永遠に吾々を守つて下さいます。

吾々は諸先輩の血と汗によつて築かれた傳統の下に於て之を受け継ぎ、更に發展に努力する事こそ荒井さんの御努力に僅かも報いる事が出来るのです。

最後に荒井さんの御靈の御冥福を御祈り申し上げます。

荒井さんの追憶

吉澤貞雄

荒井さん程私に純粹な追憶を残してゆかれた方はない。荒井さんの追憶には全然陰のない邪氣の無い暖い心の思出許りがある。

偉大とか、傑物とかいふ感じを離れて、荒井さんは何時も荒井さんを圍む人々がなくては考へられない方であり、接する人がどんな人であつても、識らず／＼の間にその人々の好い、人間的な面のみを引き出して、暗い、意地悪な面を封じて了ふ人だつた。

荒井さんは人生の明い面のみを見て、暗い面を忘れられてゐたのぢらうか。二階堂さんが言はれた様に、荒井さんに淋しい一面があられたなら、兄は暗い面を知る淋しさは、自己の胸深くしまつて、無暗に他人に洩さなかつたのであらう。告別式の際におめにかゝつた御寫眞の顔には、思ひなしかその淋しさが見られる様な気がした。

あの元氣な兄がはかなくも忽然と去られて了つた。攝理の偉大さと、人間の弱さの前に嚴肅な氣持で頭をたれたい。

荒井さんは自ら愛の一微分子として、普遍にして永久なその源に歸られたのだ。

荒井兄を憶ふ

片山光夫

「荒井兄が戦死された」といふ報を聞いた時、兄とは二度とは御會ひ出來ないとはどうしても思へなかつた。野戰にある身故、若しかすると本當かも知れぬとは思ひ乍ら、唯この報せの間違ひなることのみを祈つた。幾ら願ひ、祈つたけれども遂にこの報せを誤りとさせることは出來なかつた。

大君の赤子として戦場で屍を曝すことは男兒の本懐とは申しながら、斯くまで早く兄を護國の鬼とさせたくなかつた。もつとく働くで戴きたかつた。兄が生前我々に示されたあの「意氣と熱」とを以ても少し我々を導いて欲しかつた。

地味で底力のある兄を憶ふ時、我々は「兄よあなたは強かつた」と叫びたくなる。どんなにへたばつても疲れた様子を少

しも見せずチヨコくとグラウンドを走り廻られる様が憶ひ出されてならぬ。又「トホ、」と常に微笑みを面に浮べて快活さうに話される姿が目に見える様だ。

我々は兄が我々に示して下さつたあの努力——「何糞負けるものか」と云ふファイティングスピリットを以てこれからうんと頑張らねば兄に申譯がない。

荒井兄よ、安らかに眠り給へ!!

荒井さん

桜井孝次

荒井さんが亡くなられた。江南の戦野で雄々しくも逝かれた。遂に倒れて再び起つ能はざる迄、頑張り通されたと聞く。思へば、漢口戦への出陣を前にして、頂いたお便りが最後であつた。蹴球部へ切々たる愛情を籠められた、あのお手紙。私の眼前に浮ぶのは、荒井さんのドリブルのお姿である。そしてあの優しい笑顔には、限りない愛が秘められてゐた。

荒井さんが背廣を着るようになられても、私達の試合するグラウンドには、常に荒井さんの姿があつた。

私達は二部へ陥落して終つた。そして二部優勝の吉報を、お傳へすべき時には荒井さんはもうこの世には居られ無かつた。

併し荒井さんの魂は、私達の胸に生きて居ります、しつかりと抱かれて居ります。

荒井さん、私達は生きて行きます、苦しみます、そして頑張ります。どうか私達を見守つて居て下さい。

荒井さんを偲ぶ

鈴木英二

昨年秋も終りを告げんとしてゐた十一月の末、グランドに於て後藤主將より荒井さんの戦病死の報を聞いた時、暗然として暫くの間は信ずる事が出来なかつたが、部隊長よりの死亡報告書を拜見して、夢でなく本當に亡くなられたのかと深く哀悼の涙にくれてしまつた。

私が豫科へ新しい希望を持つて入つた時、荒井さんは本科三年であつた。豫科一年の私からは本三の方々は年齢の離れてゐる爲であらうが、偉い、又一面怖い様に見えて、此方からは敬遠してゐた様に記憶してゐる。當時の本三は五名居られたのであるが一番早く冗談も云へる様になり、言葉も餘り敬語を用ひずに話せる様になつたのは荒井さんであつた。今迄もよく云はれて來たが、本當に荒井さんは純心な、無邪氣な情に篤い方であつた爲に我々最下級の者も早く懐く事が出來たのだと思つてゐる。

當時荒井さん、村井さん、鈴木さんの三人を萬才トリオと呼んでゐたのであり、部室で良く洒落の言ひ合ひをしたり冗談を云つて我々を笑はしたものである。グランド外に於ての荒井さんは愉快な、情ある人であり、グランドに立つても和氣藪々として練習し浅枝主將の寡言實行型と荒井さんの和氣藪々型とはよく結び付いて皆を引つぱつて行つた。荒井さんの身體は人一倍丈夫の方であつて（私はこう思つてゐた爲に荒井さんの戦病死を信ぜられなかつたのである）如何なる猛練習でも、苦しそうな様子一つされた事はなかつた。

今でも私の腦裡に強く残つてゐるのは、對農大戦の時の荒井さんの姿である。その時のリーグ戦は商大は早大に一勝したの

みで農大は全敗であつたが、商大が負ければ再試合となるので負けられぬ戦であつた。球場は帝大で前半確か二一〇とリードされ後半三一〇と引離して一點の差で危く一部に止まつた苦戦の一戦であつた。此の時前半の二點の重荷を後半にて覆へしたのは商大蹴球部獨特の精神力と、死物狂ひで頑張り石に囁りついても勝たんとする氣魄があつたからこそ、見事勝利を得たのは勿論の事であるが、中にもインナーをやられた荒井さんの縁の下の力持的な活躍があつたなら、或ひは負けてゐたかもしない。兎に角荒井さんは元來地味なプレイヤーであり、此の時も華かなプレイ振りは見られなかつたが、決定的なチャンスを作つて味方を有利に導き、遂には農大を打つ棄つて榮冠を得たのであつた。此の時荒井さんの姿が尊く見えたのは私一人ではなかつたであらう。

以上拙い文ではあるが、此處に荒井さんを偲ぶと題しまして一ヶ年と云ふ短い間を通じて私の見た荒井さんの姿を描き、御靈前にお供へし、以つて御靈魂の御冥福をお祈りし、今秋リーグ戦にて我々一同の奮闘を天上より御覽下さらん事をお願ひします。

荒井さんを偲びて

松岡義彦

僕自身の中では荒井さんを偲び、懷しく思ふ情に満ちてゐてもさてあらたまつて筆をとると、どうしてもうまく表現出來ない。荒井さんに對する美しい思ひ出を拙い表現によつて冒してしまふ様に感じさせへしてくる……。

僕が何も分らず豫科へ、そして蹴球部へ飛込んだ時、荒井さんは本科三年で左のインナーとして活躍されてゐた。當時の淺枝さん始め森田さん、角田さん等々、我々豫科一年生には相當こわい人達の中に荒井さんは何となくやわらかい感じで、下級生の者にも親しみ易かつた。僕は丁度荒井さんと同じボヂショーンを練習しるので、お話をする機會も多かつた。夕暗の迫つたグラウンドから部室への歸路練習中の事について話して下さつたが、少し早口に云はれるので良く聞きとれなかつた事等、懷しく思ひ浮ぶ。そして僕にとつては始めての、荒井さんには最後の合宿では荒井さんの健脚に驚かされた。

未だ身體の回復しきつてゐなかつた僕は、グラウンドへの往復のランニングに、或は朝のランニングにいつも荒井さんの姿の見えなくなる程引き離されたものだ。それからリーグ戦、關西遠征……荒井さんとの一年足らずの蹴球部生活は餘りに短かかつた。遠征の最後の日、旅館の二階で荒井さんは一人消然として考へ込んでゐられたのを覚えてゐるが、恐らく「俺がボールを蹴るのも今日でおしまひだ」と云ふ日にならなければ分らない様な複雑な感情に浸られてゐたのだらう。こんな所に荒井さんの眞の一端が覗はれはしないかと思ふ。

荒井さんが出征された時も、自分の親しい者だけは危険から逃れるだらう、と云ふ小供の様な心理状態から戰病死されるとは夢想だにしなかつたし、戰病死された報に接しても何か放心した様なおかしな氣持から容易にぬけられなかつた。殊に先月の御葬式の時御骨の前に於て、あのくりくとした目も、あの強引な強蹴を叩きつけて屢々蹴球部を危機から救つて下さつた健脚もあんな小さな中に收められるのがどうにも不思議で仕様がなかつた。そしてその時どうしても荒井さんの亡くなられたのを事實として受け入れなければならないと感じ、私かに荒井さんの御冥福を祈り、將來の蹴球部をお誓ひしたのだつた。

荒井兄を偲ぶ

茂木利孝

自分が一年に入つたとき、ぼろくなつたパンツカラまるで「フクチヤン」みたいにお尻をはみ出させて物凄いダツシユ

で球をゴールの右左に蹴り分けてゐた人があつた。荒井さんであつた。部屋へ歸つて來ると支那語ばかりの快活でなみるる浅枝、村井、鈴木、大掛さん達を笑ひ轉げさせてゐたのも荒井さんであつた。

兄の行く處到る所朗な爆笑があつた。靄々たる雰圍氣があつた。ひき込まれる様な無邪氣さ、これが自分の心の中に刻み込まれてゐる兄の姿である。

凡そ現代人は嚴重なる自我の殻の中で行動してゐる。之を犯されぬ程度に友とつき合ひグループにつくす。自分は荒井さん程この自我を減して心から蹴球生活を愛され、部を愛された方は少いと思ふ。又兄程部員全體の親みを受けられた方は少いであらう。

我々が第二、第三の荒井さんとして大陸に働く日も遠くはないであらう。その時兄はきっと双手を擧げて迎へて下さるであらう。

荒井兄の英靈よ、永遠に安らかたれ。

第一 部

荒井さんの書簡

久しく御無沙汰申譯もない。

既に青葉の五月而も君は朝鮮鎮南浦勤務と聞く。所變れば水變る、體に氣を付けてくれ。又何時か元氣で會へる日をたのしみにしてゐる。長い事一緒に味ひ、共に過した學生生活も今は夢、君は半島に、我は中華に夫々の道を行くのも又異なるもの。自分も益々元氣、榮ある皇軍の一兵として御奉公してゐる。軍服を着けて二月、日方もふえるし食べ方もふえて今では食器も食べて終ひそうな元氣だ。

幹候志願したが激烈な競争だ、頑張る事丈考へてゐる。

支那の風土も大分内地とは異なるが君の居る半島には類似してゐる事だらう。

晝の暑さ、夜の寒さ、その差のはげしいのは五月といふのに參つてゐる。之で行くと末が案じられるが人間の適應性は案外に強いものらしい。

蹴球も英軍が來たりして相當賑からしいね。君の姉さんから手紙貰つたが相變らず皆様元氣らしくて結構だ。

半島の面白い事でも知らしてくれ。まだ君とて會社になれないから隨分忙しいことだらう。月始めて貰ふ氣持はどうだい。

蹴球の主將とか、相變らず頼光の靴か。（在學中鈴木さんの靴は大きかつた爲）

その中何れ、御大事に。

（註）荒井さんの此の御便りは昨年五月朝鮮に居られる鈴木彰兄宛の書簡で、此の度、鈴木さんより御報せ下さいました。

蹴球部諸君!!

其後は御無沙汰致しましたが相變らず元氣にて御過しの事と存じます。既に春のシーズンも終へて、恐らくは春の回顧に、或は来るべき秋への心の構に、心忙しいものがあると思ひます。

此の便りの着く頃は諸君は皆懐しい故郷に、或は招く海に、山に銷夏の夏を逃つて居られる事でせう。海もよし、山もよし!! 然し目前に横はる國家の非常時を、又直ぐに来る秋の血みどろのリーグを忘れてはならないと存じます。

承はれば春の成績は、豫科に於て良く、本科に於て悪い様子、春の一事を以て直に秋を圖るの尙早に失する事は勿論であります。但、本科の悪い事は何と言つても心淋しきものがあります。如何か此の小生の心配が、杞憂であれかしと、遙かに御祈り致します。

傳統の豫科對浦高定期戦も未だ結果を知る由もありませんが、如何でしたでせうか。察するに、茲數年前の悩みの種たるゴール前の捌きが、或は春に於ても拙かつたのではないかと思ひます。ゴール前の捌きは思ひ切つてやる事が肝要です。一度自分で判断したならば、其の判断が正しきものか不正なるものか顧みる必要はありません。なさざると遲疑する事は最も悪い事だと思ひます。自分の判断の命ずる儘、敢然とプレイし、例へ失敗しようと構はないと思ひます。もし失敗したならと云ふ如き日和見的或は責任回避的のプレイはゴール前に於ては絶対に排他すべきであると思ひます。

次に小生も渡支以來四ヶ月、何時の間にか一等兵となり、相變らず元氣で匪賊討伐や警備に従事してゐます。實彈も近頃ではへとも思ひませんが唯迫撃砲を打ち込まれる時丈は心膽聊か寒い形であります。

自分達は日本が最も其の誇とする軍の花形機關銃分隊である丈に、辛い事も人一倍、面白い事も人一倍です。自分の役目は八貫匁以上ある銃身を擔いで行軍し、戦闘に際しては分隊長と小隊長との連絡を取る事です。十里も行軍して頃を出し、やつと戦闘になり銃身を下したと思ふのも束の間、今度は小隊長を探して連絡です。時々獨りぼつちになりますが、其の時は拳銃

が唯一の頼りです。匪賊と云ふ奴はこちらが少いと思へば強氣に出てくるので小生の役目なまく氣がつかれます。此の間の如き、三千米も獨りで連絡に行つた時は、一寸淋しかつたです。

近頃は、なまくチヤツカリした戦法を修得、匪賊討伐の後には西瓜討伐をなします。又残飯を支那人にやり、洗濯させたり、ゆで卵を貰つたり、經濟學の奥義を發揮してゐます。

然し、斯うしたのんびりした生活もこゝ二三日、近い中現在の警備地を立つて蔣の息の根を止める爲、某地に向ひます。もとより、一度意を決して國を出たからには敢て生還は期しません。職分の存する所身命を君國に捧げて水火尙辭せざるの覺悟であります。

既に同じ日、都を立つて同じ日に大陸に渡つた何名かの戦友は大陸の土と化しました。「東洋永遠の平和のために」又平和の曉も見ず、無念護國の鬼と化した戦友のために今ぞ一等兵荒井文雄の御奉公致すべき時は参りました。

此の次帝都が、陥落の報に喜びの潮と化したならば、其の時は遠く異郷にあつて城頭高く翻る日章旗を仰いで相擁して泣いてゐる自分達を、或は武運拙く自分達を想像して下さい。もう何も考へて居りません。

皆頑張つて、自分達が陥落の目的を貫徹する頃は、必ず嘗て一度は占めたりーグ一部を戦ひ取つて下さい。
御機嫌よう!!

合宿は辛からう!! 然し辛いのは君達許りでない。お互に辛い時は、お互の事を思つて頑張らう。

O・Bによろしく

七月十八日

戰線日記抄

三月十九日（晴）茲ニ光榮アル皇軍ノ一卒、荒井二等兵ノ支那駐屯軍トシテノ日記ハ始マル。思ヘバ長イ水陸ノ旅モ恙ナク終へ大陸ノ春ヲ今ゾ踏ム——

——自分ノ如ク腕力ノ乏シイモノガ、ヨク機關銃中隊ノ一員トシテ任務ヲ達成シ得ルカ如何カ危惧スルモノデアルガ、要ハ只ヤツテ見ル迄ノ話デアル。「一寸ノ蟲ニモ五分ノ魂」五尺ノ體ヲ持ツテヰ乍ラ出來ナイト言フ話ハアルマ。大陸ニドツシリト足ヲ踏ミツケテ精一杯ニ張リ切ラウ。

午後御眞影軍旗ノ遙拜式アリ、皇軍ノ一員タルコトノ光榮ト感謝ノ念ヲ新ニシ、後聯隊長殿ノ御挨拶アリ、ソノキビノトシタ言葉ト父ノ如キ諭ハ深ク我々ノ肝ニ銘ジテ忘レ難イ所デアル。班ニ歸ツテモ唯氣許リアセルノミデ何モ出來ズ人ノスル事ヲ見テ居ル許リ、サル程ニ點呼トモナリ、消燈トモナリ、就床シタ。ナカニ眠レズ、脳裏ニハ家ヲ出ル時ノ父母ノ嚴肅ナ顔、アノ沿道デ受ケタ歎呼ノ嵐ガ、刻ミ込マレテ刻々ニ目ハ冴エル許リ。三歳ノ田舎ノ兒童モ、腰ノ曲ツタオ婆サンモ、汚イ乞食迄モガ、萬歳ヲ叫ブ東海沿道線ノアノ感激!!

手柄立テズニ如何シテ歸レヨウカ。

三月廿一日（雨）（日）始メテ味フ大陸ノ雨、音モナク降リ音モナク止ム。西山ハ霞ミテ見エズ、昨日讚歎シタ大陸ノ風景ハ今日ハ雨ニ閉サレタ。

——「星一ツ歩ク姿ヤ支那ノ春」（荒井二等兵支那ヲ行ク圖）

三月廿一日（晴）（月）春季皇靈祭

——「星一ツ歩ク姿ヤ支那ノ春」（荒井二等兵支那ヲ行ク圖）

凡ソ雄大ナ事ヲスル支那人ノ癖デハアルガ、萬壽山モ亦其ノ癖ノ一ノ現ハレデアル。

彼ノ東洋ノ「クレオパトラ」西太后ノ夢ノ跡、湖ハ滿々タル波ヲタタヘ、堂廟ハ巍然トシテ聳エ、其ノ精巧多彩ナルコトハ驚ク許リデアル。岸邊ヨル波ノ囁キハ西太后ノ歎カ、空行ク白雲ハ光緒帝思ヒヲ空ニ馳セルノ圖カ、唯變ラヌモノハ天地ノミダ。——

四月一日（金）（晴）昨夜一時一二时不寢番ヲヤツタガナカノヽ氣ノ疲レルモノデアル。犬ノ遠ク吠エテキルコトスラ神經ニビリ、ト響ク位ダ。——自分ノ射撃ハ、アレ程待ツテキタ今日ノ此ノ會ニモ拘ラズ、全クミスボラシカツタ。班ノ仲間ガ皆良イ成績ヲ得タノニ自分ダケハ不成績デ班ノ面汚シダ。情ケ無クテ行軍ノ歸リモ足許リ重クナル、班長殿ニ對シテモ面目ナイ。

敗軍ノ將兵ヲ語ラズ唯捲土重來センノミダ。

四月四日（晴）（月）大陸ハ早クモ内地ノ夏ヲ思ハセル暑サダ。——今日ハ四並ビノ四月四日。自分ハ何時モ並ビノ月日ニハ何カヨイコトヲスルコトニシテキタガ、今日ハ何モヨイコトヲシナカツタ。——

四月六日（水）（曇）今日ハ本職ノ實包射撃——幸ニ甲デ合格、今日ハ教官殿ノ前デ此ノ前ノ様ニ淋シイ氣持デ報告シナクテモ濟シング。——故郷及ビ勤務先ノ會社（トウランプ）ヨリ第一信ヲ受ク。皆元氣ナ由之デ何モ心配スルコトハナイ。

父母ノ安ラカナ顔が目ニ見エル。

四月八日（金）（晴）——今日ハ妹ノ誕生日手紙デモ書イテヤラウカ。

五月四日 六時半整列、六時四五分討伐ノタメトラツクニテ出發。——六時良郷ニ長辛店經由到着砲聲殷々タリ。

五月十四日 ナスコトナク午前入浴午後設營。「始メテ五月十二日匪賊掃蕩セリ。記念ノ一日。理窟モ何モナイ。只アルモノハ「前ヘ前ヘ」ノ氣持チノミ。河ヲワタリ、畠ヲ走リ、足モ進マナクナル。迫撃砲ヲ打ツ音ガハツキリ空中ノ彈ヨリ發スル。

軍人ニハ昨日モ明日モナイ。唯刻々ノ命令ヲ遵守シテ與ヘラレタ現時點ヲ固守センノミ。

五月十八日 衛兵ニ服務中午後五時頃土匪ノ捕虜ヲ見ル。自分ノ捕縄ニテ之ヲ縛ル。

五月廿一日(雨)——夜十時折カラノ雨ヲ衝イテ、東門南門ノ方向ヨリ匪賊ノ夜襲ヲ受ク。直チニ出動交戦スルニ至ツタ。各小銃隊ノ機關銃ヲ頼ミトスルヤ頗ル切、吾々ノ分隊ノ責任ハ重且ツ大デアル。城壁上ヲ行進スルトキ、敵ノ射彈ガ或ハ唸リヲ生ジテ頭上ヲ飛ビ、或ハ餘韻ヲ殘シテ闇ニ消エ去ル。始メテ事實上ノ敵弾下ヲ潜ツタ我々ノ心臓聊カ寒カツタ。交戦四時頃迄——

五月卅一日雨後晴風強シ

- 一、故國ハ遠キ涿縣ノ
窓ヲ冷タク濡ラセドモ
二、兎將去ツテ今イヅコ
夢ハ曠野ヲ彷徨フカ
三、南京落チテ徐州又
山河ヲ超エテ落チテ行ク
タニ雨ハソボ降リテ
警備ノ任務忘ルベキ
波ニ流レテ落チテ行ク
雨モ今宵ハ貰ヒ泣キ
空シク敗レ敗兵ハ
榮華ノ夢モ今ハ無シ

(以上涿縣ニテ落書)

六月七日 黎明ノ長イ茲北支ハ寢タト思フトスグ朝ダ。然シ乍ラ、朝外ニ出テ吸フ煙草ノ味ハ又トナイ。木ノ葉ハオ互ニ朝ノ來ルノヲ囁キ乍ラ露ヲ拂ヒノケ様トモシナイ。大キナ塊ガ空ヲ過ルカト思ヘバソレハ鳥ノ群ダ。時鳥ガ「血ヲ吐ク」ト云ハレル聲デ孤空ヲスギテ行ク。——

六月十四日 午後二時半、頭上ヲ掠メテ一發飛ビ去ル。小瘤ナ!! 敵ヨ!! ト思フ間モナク下ル出勤命令。敵ハ大膽ニモ驛ヨ

リ數町先ニ現ヘレタノダ。ヨーシ!! ト許リ、覺シキ方向ニ前進敵ノ退路ハ正シク此ノ通り逃げ足早イ敵ヲ追撃スル野戦ダ。絶好ナ位置ヲ占メテ、教官殿ノ仇ト許リ射撃開始斃レル敵逃ゲル敵野戦ノ快味ヲ満喫、快哉ヲ叫ブ。歸營五時半。銃が大分汚レ手入ニ大童。

六月十九日(晏) 昨夜ヨリムシ歯痛ム。豫防注射ノタメカ。頭重ク氣分惡シ。隣ノ通信隊ノ如ク輕イ氣持チニナレナイモノカシラ。

六月廿四日(晴)

とつぐにの名もなき花を捧げつゝ君がみたまに我は祈らむ
梢洩る月のあかりを避け乍ラ中空高く銃音を聞く

——第一線ニ出ルコトハ愈々確定的ナラム。

六月廿五日(晴)

今日も亦いたむつはもの歸りゆく言の葉も無く頭たれつゝ(傷病兵歸る)
汽車は行く煙残してとつぐに、思ひ亂れて残陽に立つ

六月廿七日(晴)——捕虜三名警路隊ヨリアヅカル。

露繁き高梁畑踏み越えて有明空をつはものは行く
六月廿八日(晴) 暑氣激シ。——捕虜三名アリ。

七月一日(晴) 昨夜繕糸洗濯心地ヨシ。

すぐ手を止めて見上ぐる星明り遠く離るもしばし忘れぬ

七月四日(晴) 炎暑益々旺ナリ。間食曉二ヶ半、バインアツブル半個、サイダー一本、久シ振りニ上ル。

人二人殺され居れり叢に花をたむけて徐に去る

流星一つ二つと飛びにけりいづくか知らぬほとゝぎす啼く

千人針キユツと引締めふりかへる友の顔には微笑のあり（襲撃の夜）

血しぶきをあげてアジアの野に死せり匪賊にあれど敵のなきがら

涿州の野に起き臥して幾月か支那の愚民に日々に似て行く

今日人の冥福を祈つた人は、明日は戦線の華と散つて行く。之が戦争である。

七月七日（晴）——既ニ入隊シテカラ四ヶ月餘、精華大學デ猛訓練ヲ受ケタノモ昔、然モアノ時ノ教官殿ハ今ハ幽明境ヲ異ニシテ居ルノダ。圖リ切レナイ人ノ世乍ラ何カ物哀レサラ感ジテナラス。

七月八日（驟雨）午前五時半城内ノ方向ヨリ銃聲盛ニ聞ユ素破ト起キ上レバ、忽チニ城内ヨリ「襲撃ヲ受ク」ノ電話アリ、一同待機中迫撃砲三發前後ニ落ツ。サル程ニ、城内ヨリ射撃ノ依頼ヲ受ケ東門射撃、匪賊ハ逃亡ノ由。然シ敵ハ、驛ト南門ノ中間ニ廻リ盛ニ發砲、コノ間長辛店ヨリ大隊本部應援ニ來リ十時南門ノ方向ヨリ西門ヘト攻撃セリ。聞ク所ニヨレバチエツヨ一、捕虜二、遺棄死體十、小銃ノ如キハ約十獲得セリトカ。

失地をば恢復せんと意氣込むらし迫撃砲三發陣營に落ちぬ

七月九日 愈々第一線ニ出ルコトハ確實ニナレルモノ、如シ。

歩哨線に螢飛び交ふ夏の夕

音に聞く迫撃砲の三發も落ちて陣營とみに色めく

遠くなり近くなりする雷鳴の間にはげしき銃音のする

同じ日に故郷をば立ちしともどちの逝ける日悲し雨も歎くか

うるさきは匪賊のみかは蠅の群晝寝する間も我を襲へり

叢に光る螢の影薄し中華の夏も哀れ深めり

夕ざりて波も静めり永定河血潮をのみし日はいつのこと
歸り行く武士の手の繩帶の夕日に赤く輝け居れり

七月十三日 汽車ニテ往復スル兵隊モ益々多キヲ加ヘテ來タ。自分達ガ第一線漢口ニ出ルノモ直グノコトグラウ。皆廿五歳ガ

厄年トカ、誰ガ真先ニ死ヌカトカ、多愛モナイコトヲ言ツテ喜ンデキル。匪賊ノ彈丸ニ當ツテ死シング者モ相當居ルノダ。一線ヘ出テ死ヌノナラ何モ文句ハ無イ。名譽此ノ上モ無イ。

夕ざりて波も静めり永定河血潮をのみし日はいつのこと

七月十四日（晴）朝衛兵勤務中松林店ヨリ襲撃ヲ受ケテキル情報來ル。中隊本部一ヶ分隊午前十時半驛ニ來リ、我々機關銃一ヶ分隊ト合流出動。炎暑甚シク、行軍誠ニ辛イ。汗ハ目ト云ハズロト云ハズ全身之汗。銃身ハ肩ニ食ヒ込ム。其ノ中彈薬手ガ參ツタノデ、彈薬ヲ背負フ。南辛店ニ行クモ既ニ匪賊ハ逃亡ノ跡、地闊駄踏ムモ既ニ遅シ。再ビ頤ヲ出シテ行軍フラ／＼進ム。松林店ノ驛近クニテ西瓜討伐多々的之ヲ食フ。今日ハ傳令トナリ松林店ノ驛迄約千五百米ノ地點デ、自轉車ヲ搔拂ヒ道ヲ急グ中チエーンガコワレ途方ニクレル中折ヨク支那人ガ自轉車デ來タノデ之ヲ無理矢理ニ奪ヒ松林店驛ニ至リ連絡ヲ取リ歸ル。歸途又々自轉車ガコワレタノデ之ヲ棄テ附近ノ支那人ヨリ奪ツテ歸隊。二臺モ自轉車ヲコワストハ自分モ亂暴者ダ然シ狀況ガ悪い場合ハ、傳令ニ行ツテ自轉車ナドコワシテウロ／＼シテキル様ナ場合匪賊ニ襲撃サレルンダラウト思フ。

夜、間食ノビル大イニ呑ミ調子ヲ出ス。齋藤ハ今日入室、我分隊モ一人去リ二人去リ三人去リ、殘ル所分隊長殿藍田上等兵殿金子小野花田西郷各一等兵ニ自分ノ合計七名ノミ。稍淋シクナツタ。期セズシテ一班ノ幹部候補生ノミノ分隊トナツテ終ツタ。七月十三日弟ト深澤節子氏ヨリ慰問品到着嬉シキ限リダ。本日大半平グ。米良征也氏山本洋一先生ヨリ受信。

七月十五日（晴）

當用日記より

一月一日

高商大會の涙未だ乾かざる中に、早くも年はめくつた。然し乍ら僕は未だ未だ若いのだ。

除夜の鐘と共にすべての煩惱を洗ひ去つて、元旦の明朗さで輝しい未來へのスタートを切らう。未來には考へ且つ圖る可き事が多々ある。本科入學!! 二部昇格!! 勉強にも運動にも多事多端な廿一才を厄年ならざる様心掛ねばならぬ。名犬ハチ公の心の少しでも僕のものと出來たら僕は幸福である。

今年は大年だもの。殊に。略……。

凡々たる僕の事故考へねばからぬ。

N兄をサッカー部より送り出す事は痛手だ。元日早々上京N兄の家でお正月を祝ふ。後略……。

一月八日

自分の親しい人が喜ぶのを見ると自分も嬉しい。後略……。

一月十三日

早朝N兄を訪ねる。

有益なる話を聞く。略……。

N兄の云つた言葉と、忘れられないNの姿が浮ぶ。サッカー部は俺に取つては生命の親、生命の泉だ。サッカー部には俺の俺は永遠にGと同様にサッカー部を去りたくない。もし俺が商大を感謝する心あるならば、それは同時に、我がサッカー部に對する感謝である。よき先輩に育まれよき土臺の上に立つサッカー部、永遠に發達しろ!! 然し乍ら、慢心的な部員を持つことをつゝしみ、同時に自らも謙譲であれ!!

二月十日

豫科の送別會セーヴで開かる。此の間送つて居たと思ふ身も既に送らるゝ身となつた。今更の様に月日の立つの早い事を嘆く。

然し乍ら、纏つた蹴球部といふ雰圍氣の中に居る時は幸福である。Kが高商大會の事をしんみり話すので可哀想になつた。一本氣な彼の事故、敗戦に對する彼の責任を強く取りすぎてる事だらう。高商大會の賞ひは、まあ／＼今年の二部のリーグ戦で試みよう。後略……。

四月廿三日

今日は日曜だけれど、我々一部を目指して進むものは一日の休息は許されない。朝九時から絶好の春日和の光をうけて國立で練習。キック割合によし、十二時練習を終り一同ピール携へて花見。後略……。

五月十四日

Oが一年生の交通費補助の事を言ふと、「僕達が一年のときはそんなの貰はなかつた」と云ふO〇よ!! 僕達がが辛かつたから、愛する部員達に僕達がした様な辛さはさせまいとするのが常ではないか。後略……。

五月廿一日

帝大との試合バックは終始堅陣を張つたが、F・W相變らず動かず一対零にて敗る。決定的なチャンスは商大の方に餘計あつたけれども、今一步と云ふ所で何時も逃してゐた。バックの防戦に對し申譯なし、

後半脳震盪を起して倒れたのは殘念の極み。後略……。

九月十二日

蹴球部のさゝやかな出陣式をなす。

この出陣式をして一部への出陣式ならしめたい。血は燃え希望は涯てなし。一部へ！ 後略……。

九月卅日

あゝ時は來つた。戰雲低く風騒ぐ。

四部へ陥落、恨を呑みし臥薪嘗膽の二星霜、我々は遂に二部に達した。

今ぞ、多數先輩の血と涙とに報ゆるべき日は來たる。最後の練習終る。

東高何するものぞ。當つて碎けんのみ。神よ！ 我はベストを盡さんのみ。

十月一日

今日試合なので學校へは出ない。

昨日の不眠を取りかへすべくつとめるが、なかなかうまく行かない。

怪しまれた天候も、秋らしい日和となつて、商大選手の氣を勵ます。

今日ぞ満つる日!!

神々や兄にベストを盡くさんと誓し甲斐ありてか、遂に二點を挙げ二対零にて勝つ。バクの堅陣固く防備固し。

周圍の雰囲氣急なるを破り出場せるE兄及びサブの人々に感謝すると共に、N主將以下エレブンの力闘に感謝す。

十一月九日

あゝとう／＼明治に勝つた。

清正公のお守をしつかり胸に私はベストを盡して戰つたのだ。戰は三對一。

あと残るのは成城、法政、鎧袖一蹴せん。

十一月十五日

前略：。一橋新聞グラビヤ附發行さる。サッカー優勝確實なる記事あり。恐るべきは慢心であり、心のゆとりだ。後略。

十一月十七日

あゝ遂に優勝。

感概無量。

十一月廿一日

愈々明日は今シーズン最後の試合。

神宮球場の芝生高らかに踏みて凱歌奏せん。神々に祈るのみ。私はベストを盡さん事を。練習最後。一時半より小平にてな

す。

F・Wの調子未だ出です。

十一月廿二日

あゝ遂に三年連覇なる。

すべてを恵み給ひし神々に感謝する。

斯くて目指すは一部に於ての戦だ。

兄よ眠れ!!

十二月一日

師走。巷には冷い風が吹いてゐる。

凶作地東北地方の夜半又寒からずや。

早慶戦を見る。三對三にて遂に引分、再試合とたる。試合後二部優勝のカツブを受け感概亦深し。後略……。

十二月六日

俺達の前には未だ澤山の問題が残つてゐる。目的か？ 手段か？

小さい自我に捕はれず大我を見つめる。

寄附に喘いで歸る足取りは重い。

極端に叱られて「乞食の眞似か」と言はれると全くむつとするが、學校のため部のためを思へば暫くの間此の辛さも忍ばう。

神崎與五郎の心構こそ肝要だ。

十二月十二日

前略……。Eさんも關西に行き度がる事しきりだが、來年の彼を思へば此の際涙を振つて分れねばならぬ。

Eさんの心中察するに餘りあり。

× × × ×

何時見ても本科生の不健全な顔色だ。

遠征寄附。豫科の試験。メンバーの不足。どこを見ても限りない淋しさと憂鬱に閉される。然し、俺達がクサツタラ如何なるのだ？

附記

以上は、原文の儘を個人的、或ひは家庭的關係のものを除き、大部分は蹴球に關係あるものを抜きました。紙の關係も考

慮いたしまして、思ひ切つて短くいたしました。

此の年は、最愛なる兄を失ひ、非常なるショックを受ける共に、自分の重なる責任を感じ、又躰への自信を失つた様でござ

ります。兄の遺牌袋を鉢巻にいたしまして、練習いたしましたのも此の當時です。

昭和十二年度 サラリーマンの記より

四月一日

愈々今日から新世界に、——東西電球株式會社に、登場する事となつた。

新しい世界に對し夢と希望を載せて、——だが、絶へず斐ひかる不安の中に、——省線を降りて會社に出たのが、八時五十分。九時より、H課長より祝詞を戴き、次いで社長より訓辭を聞いた。大要次の如くであつた。中略……。

午後五時、氣疲れを背に負ふて、放たれた鳥は歸る。今日より、増野さんの所に御厄介になる事となつた。夜種々買物をなす。

四月二日

會社員第二日。雜沓せる市電にのられて、會社に登場。出勤簿に初めて捺印。昨日の分も含めて。以下略……。

四月十一日

朝來訪せる弟と共に神田に行き、帽子、レンコートを買ひ、其の足で神宮で北寧足球隊と早稻田との蹴球戦を見た。何れも妙技を盡して奮戦したが、結局北寧は先取得點一ヶ点を守り通して早大を屠つた。然し乍ら、敗れた早大と雖も、之に因つて見るになかく強く、依然秋の王座を覗ふ第一候補と見られる。後略……。

七月二十一日

久しく御無沙汰して居たN兄を、腰越の別荘に見舞ふ。案外御元氣だつたので安心。四方山の話をした後、學生時代その儘な張切をして、N兄弟妹、N夫妻等と遊ぶ。中略……。N兄のお父さんと園碁をなし、三目おかげで一勝二敗にて敗る。「窮鼠猫を噛むの戦法にしてやられた。後大喜びで歸る。

七月二十七日

朝、相當長い地震に夢を破られて起床、悠然と仕度をして居たので却つて遅刻。

會社の仕事能率よく、山と積んであつた傳票籠の底漸くに見ゆる程度となつた。後略……。

七月廿九日

北支事變多事。續々召集令下る。以下略……。

七月卅日

前略……。當直なので、去り行く皆の陰を憾み乍ら残る。北支事變益々多事、避難中の邦人三百名虐殺とか。憤激果てしなし。

七月卅一日

昔ならば夏休の今日此の頃、相變らず暑い日の光を受け乍ら出勤。午前中ムシバ痛み仕事の運行遅々として進まず徒らに日の長さと暑さとを嘆く。北支事變益々多事。M兄も出征とか愈々残る所は我々か。中略……。

昔の仲間も遠く去れば……。

煙草の煙の行先が誰にも分らない様に、俺の行く先も誰にも分るまい。只分らう事は、勤かし難い一つの大いなる力に勤かされて行くと云ふ事丈。豫算過剰。

八月二日

財政益々窮乏。北支益々多事。朝Sに電話したが彼も外出したとか、朝起するやうになつたか。久し振に仕事暇となり始めて傳票籠空になる。後略……。

八月四日

常に新しき轉換面を求めて止まぬ人の生活に比し、我が生活の何と心もとなさよ。現在に於てすら極めて狹範圍なる生活圖を、更に局限しながら生活をする我的何と意義の無き事よ。人の笑を買ひ輕蔑の笑以外を招かぬ我を、悲惨さを、我は知らざるにはあらねど。一小時の稽味を求めて長時の榮を放棄する我れを神は何と見るや。

現在の利益に於て、一つのものに似非傾倒を示し他の眞の求めて止まぬものに、眞の傾倒を保つもの、人の世の偽り多き又わびし。我も亦人の世に生れて偽りを知らざるにはあらねど、闇の夜に、ともすれば吸はれ勝なる淺慮なる若き心は此の偽りを忘れんとす。後略……。

なぶりては蔭に笑ふ人々の

あまりに多き浮世なる哉

八月六日

前文略……。北支事態漢口も急迫とか。

Sは今日から足利の方へ行つた相だ。

友も去り人も去り身邊日々に淋し。

會社の名刺始めて貰ふ。廿四年の年も徒に過ぎて行く。振り返つて見る我が身も徒らに乏しく、昨日今日の歩みも亦覺東ない。唯、此の中があつてぞしい我が回想錄に光彩を與へて與れるものは蹴球である。

共に勝ち、共に泣き、共に敗け、共に泣いたあの昔、苦しくはあつたが、悲しくはあつたが、今となつて何と懐しい事だらう。我も亦、次第に感激を忘れた人の社會に身を投ぜんとしてゐるのだ。中略……。

廿四年間に見た社會の種々相、憎惡なるその姿にち蹴球あればこそ溺れなかつた我も、今その唯一の柱を奪はれて心の陣容日に危く、日に搖ぐ。

八月廿五日

蹴球部始めての合宿出陣式を行ふ。M、T、兩先輩の激勵の辭を、新宿キリンビヤホールで部員一同聞く。其の後一行は蟲鳴く小平へと道をとり、寄宿の娛樂室を借りてN、T改めて激勵す。月を仰ぎ微風を受けて歸る。時十時半。

八月廿九日

朝弟が來た。中略……。

N兄を送らんとして東京驛に駆けつけけれど、既に影もなく銀座に行けど、照りつく舗道に惱み果てなし以下略……。

八月卅日

應召軍人が、一昨日から二名泊る事となつた。國家多端、北支の空益々險惡、御國のために炎暑の中を活動する皇國の武士

に幸あれ。

歸途老ひたる父母が、子を見送る様を目のあたり見て思はず涙ぐんだ。幾山河の道を歩いて來た事やら、もう一目會つて置かうと曲つた腰に杖して歩いて來たのだらう。中略……。

近頃思ふ事は、結局人間は、一つの身を託す可きものを持つて居なければならないと言ふ事だ。日毎に荒んで行く自分の氣持の最大の石は此の歟陥からだ。學生時代は蹴球と云ふ大きな宿所があつた。殆んど盲目的に服従して行つた蹴球生活あつて始めて意義がある様な氣がした。然し、今の所何もない會社の仕事も、全精神を籠めて頼るには餘りにも殺風景であり、宗教も今の所親しみ難い存在だ、何も宗教を輕蔑する譯ではないが、今飛込んでも一足飛びに宗教迄に到達する事は不可能だ。何か一つ頼る可き或ひは身を託す可きものはないか。

九月十六日

防空演習、休みなので、Mさんと將棋をして二勝。Sを呼んで四方山の話に夜更くる迄時を過した。株の話、亡友Tの思ひ出話、浮世の思ひ出話はなかり)に盡きず十一時頃迄瞬く間に時を過して終つた。

今年は秋が早くやつて來たやうだ。街に降る雨も冷やりとした氣配が多分に感ぜられ、道行く人の影にも一抹の淋しさを覺ゆる。北支に戦ふ皇軍も、思ひの外早い秋の訪れに少しばく苦しみを脱し得た事と思ふが、道は今後益々嶮、遙かに奮闘を祈るのみ。

蹴球も今日メムバー発表になつた様だ。早慶帝が強い様だが、今年はレベルが例年に比して劣り、AクラスBクラスの接近が濃くなりはしなからうか。母校商大は如何に、曰く「?」。最近の調子を聞いて見ると、FWが調子が悪い相だ。今の中に調子が悪いのはいゝが、餘り長く調子が悪いのは如何かと思ふ。

九月十七日

朝秋雨を衝いて出勤途中、櫻田門日比谷間に断線あり、此の間を昔なつかしいランニングで通す。以下略……。

九月十九日

折角白木屋と野球をしようと張切つてゐたのに又雨でクサつた。

立教との試合は三対〇で勝つた由、然し三対〇の僅少の差では事情の如何を問はず淋しい氣がする。

九月二十二日(晴後曇)

午後時間を盜んで一高との試合を見學したが、三対一で辛勝とは情けない。FWは、K・Kの缺員はあるとしてもあれでは低調過ぎると思ふ。外に目立つた事は、バツクが合宿中にタツタルに専念したと言つて居るのに其の成果らしいものが見られなかつた事だ。帝大のグランドが固くスライディングに適せぬと云へばそれ迄だが。以下略……。

九月二十五日

前文略……。早法戦は引分。早稻田の粗雑なプレイが目に浮ぶ様な氣がする。さるにても、法政の試合上手は際立つたものだ。中略……。

九月二十七日

北支討伐益々進捗するも安心をゆるさず。勇士の血潮幾度か戰の野をそめ、其の骨幾度か異郷の土となりし事か。巡略……。

前文略……。近頃、會計係の空氣がしみこんだのか、算盤の音が妙になつかしいものになつて來た。淡い電燈の下で、静かな事務所で、ハジク算盤の音は、一種の妖仙な氣さへ覺へて心の落つくのを覚える。

武高との試合は如何した事であらう。

鈴木からは何とも云つて來ないが負け譯もあるまい。今シーズンは何となく例年とは違つた感じがするシーズンだ。

或は學校を出たためか、或は現役を離れた爲か知らぬが、とに角一種の低徊氣味のものが胸の奥底深く横はつて居る。

九月卅日

神宮大會は、早大が帝大を一対〇で破つて優勝したが、帝大の實力にも物凄いものがあり相だ。今から十月九日の第一戦が案じられてならぬ。雨は益々強く降つて居る。十一時。

十月一日(雨後晴)

前文略……。都新聞に、五年間の戰友淺枝荒井を送り出して云々とあつたのに又々昔をしのんでしまつた。晝休K、N來訪。以下略……。

十月二日(雨後晴)

近頃、北支でスポーツマンの戰死をよく聞く。日頃鍛へたスポーツマンシップと、隆々たる體軀に物を言はせて華々しく散つて行く事だらう。ラガーフットボールの戰死。中略……。

夜鈴木を訪問。M、Oが決つたらしく目出度いが、外の四人も早く決つてくれるといゝのだが。後略……。

十月三日

前文略……。蹴球シーズンの幕切り、帝文、早明戦を見る。前者は、豫想を裏切り文理大が二対〇で快勝し、後者は、早大が堂々たる貫録を見せて九一三で快勝した。早大失點三は一面早大守備線の不調かも知れないが、反面から見るならば明大FWの銳さである。

さるにても、母校専大チームは苦境に立つ事となつた。M、Oは夫々就職したが、他の面々は未定との事早く決つて呉れ、ばいゝが。神ケンの軍服姿に初めてお目に掛る。

十月七日

社會の各階級の人達が、雄々しくも北支の華と散つて行く。友田恭助の死亦哀悼の外なし。昨夜の痛飲祟りて仕事の能率悪し。めつきり風冷く秋の落寞を感じる。

十月九日

母校商大蹴球部リーグ第一試合帝大戦に、四對一にて敗る。痛恨久し！
バツクの健闘に報ゆるものなき脆弱なF W線嘆はし。後略……。

十月十四日（雨後晴）

寝耳に水のN兄の召集。然かも、彼は今日三時の汽車で立つて行つた。新妻をあとに然も颯爽と男らしい姿を示すN兄凱旋の日を待つのみ。後略……。

十月十七日

前文略……。昨日の試合慶明蹴球戦は、結局十對〇で慶應勝に歸した。慶應のFW俊敏、忠實な動きが、眼に映る様な氣がする。今年の慶應は渾然たるチーム力の強さを誇る様だ。こゝ二三年早慶の蹴球戦法は一變して來たかの如く思はれる。嘗つて奔放なる戦法にグランドをロシングキックに織りなした早大の昔日の影は洗はれて、昨年あたりから老獴さを多分に織りませた巧緻なる試合振りが眼に残る。慶應は理論より理論へと推進して來たのであるか稍々もすれば形式に流れ勝つた。然し昨今の慶應の試合振は明かに精神的方面の充實を示してゐる。帝大は調子が重い。各個に見れば卓越せるプレイヤーを持ち乍ら、全體となると如何して斯く調子が重いのか。

十月廿一日

N兄逝く！

神宮でみんなを鼓舞し、東京驛にN兄を送つた雄姿も、今はすつかり變りはてた聲なき姿だ。
何も云ひ得ない！

十月廿二日（曇）

N兄！

頭ボンヤリして何も出來ず。

夜種々打合せする。後略……。

十月廿三日（晴）

ショックを受けてからすつかりボンヤリして終つた。皆して（蹴球部）御通夜した。

昔乍らの寫真、呼べば直ぐにも答へさうなのに、もういくら呼んでも歸つて來ない魂。

あゝ、人の世は又果敢ない。

體重三貫も増して、後六ヶ月も辛抱すれば大丈夫だと云はれた時、どんなにか心で喜んでゐたNさんだらう。職場に立つたら斯うしようあゝしようと、自分の夢をたのしく描いて居たらうに……。

蹴球の試合も遂に慘敗を見せたのが、此の世の見せ終ひ、實際惡戦苦闘の歴史だつた。御通夜を終へて歸る時、Nさんと話して來たがもうたまらなく悲しかつた。

どうして——死んだのだ。

十月廿四日

盛大に葬式行はる。

涙も新に焼香！ 親思ひ、兄弟思ひの彼！

どこを取つても人間味の一杯に溢ちてゐるNさんだ。男の中の男。あのむつちりした口から言葉少なに語り出す言々句々。「荒井は自信がない」と、よく言はれてゐた。

十月廿六日

Tと二人して痛飲す。一人共Nさんの事許り思ひ出して、しづんで終つたので思ひ切り呑んで終つた。

十月二十八日

昨日初七日、都合悪く行けなかつたのが殘念今日行つて來た。寫真を見ると涙が出ていけない。昔乍らの姿、然し今は幽冥境を異にして斯してゐるのだ。

Nさん眠つてくれ。僕も男だ必ず恥しくない男になるぞ！ 後略……。

十一月三日

明治節の佳辰に雨降り、時局多端を思はしむ。明日の試合が氣にかかる。

十一月四日

試合が氣になるのでMさんと午後出掛ける。皆死に者狂ひに張切つたのに、ちつとも酬ひられず遂に明治に負けた。こんなにも不運があるものだらうか。

シュートする球はゴール寸前にも拘らず皆出る。ボストに當りバーに當り返つて終ふ。選手の心があまりに張切つた爲か、實力なきためか。泣くにも泣けないとは此の事だ。

九十分押し通して壓して負ける。恐れてゐたショックがこんなに早く發するものとは思はなかつた。見る僕もかうなんだ。恐らく選手の胸中はどんなものであらう。

十一月十一日

十一、十一、と並びのよい日、斯ふ云ふ日には何かよい事をして置くべきだ。確か煙草の値上りも去年の今日ではなかつたかしら。

十一月十三日

商大蹴球部早大に四一〇で敗る。得點力なきを如何にせん。以下略……。

十一月十五日

前文略……。Tを自宅に訪れ部の事に關し、先生の記念事業に關し痛恨す。

落ちる勢は斯るものか、今更何とも出來ない微力を嘆く。折柄來訪せるHとも語る。

地下のN兄の嘆き。あゝ。

十一月十八日

前文略……。S來訪。新しき部誌を手にして言ひ知れぬ懷しみを覚えそぞろ昔を忍ぶ。思ひ現在に至れば餘りにも悲惨なる面に思はず戰慄す。商大蹴球部よ！ 久遠の理想に燃えろ。選手よ、サブよ、大商大の蹴球部のために、より大なる愛を捧げよ！

己れを殺し、人に對する感情を殺して、大商大愛に生きて呉れぬか。

十一月十九日

前文略……。明日の商慶戦如何。決して勝つて呉れとは云はない。

從來のかもされた雰圍氣を彩然と解いて、皆が皆シツクリした氣持でやつて欲しい。文理大背水の陣を残す、今課題はそれだ。

人に對する些細な感情を、大商大蹴球部愛の前に捧げよ！

勝つも負けるもピツタリしてこそ喜び、嘆き得るのだ。現在の如き雰圍氣にあつては、負けても口惜しくはないだらう、勝つても嬉しくはないだらう。落ち悲しくはないだらう。商大の蹴球部を自分の感情だけで獨占するな。絶對的な境地を茲に見出さぬか。

十一月二十日

商慶戦七対二にて敗る。かねて覺悟はしてゐたが、いざ現實となると思ひ悲しく胸を抉る。敗れ行くもの、姿斯くも悲惨か。無理もない専門部に二対一で漸く勝つた位では、又慘澹たる雰圍氣に思ひ至れば。

あゝローマは一朝にしてならず、されど滅るは早し。商大蹴球部よ！ 遂に汝は倒るゝか。早帝戦、帝大勝の他山の石の番狂はせだ。

十一月廿三日

明治神宮に參拜し落付いた氣持になつた。去年此の道を黙々として歩いた事が思ひ出されてならぬ。

Nさんのお母さんより懇切な手紙を戴き恐縮す。

寫し影のお前に語る言の葉は

思ひで深き昔の友垣 (Nさんのお母様)

されば我亦、

思ひ出は再びめぐる此の秋に

我はぐくみし君はいすくに

後略……。

十一月廿五日

待望の月給日「來て見れば後一月は來ぬものを」。殘業八時半迄。本格的風邪氣味となる。Kより督勵の手紙貰ふ。明後日の試合、Kが傷ついた上にTも不出場との事、苦戦の程忍ばれる、何事も最後の一戦だ。後略……。

十一月廿七日(土)(晴) 昨日より支店長會議

十一月廿八日(曇氣味晴)

朝Tの家を久し振で訪れ皆さんの元氣な顔を拜す。其の足でN邸を訪れ御詫びをする。折よく來合せたK兄と共に、Nさん

のお父さん弟さん妹さん達と晝食を戴き乍ら語る。皆亡き人の徳を忍び思ひ今に至れば只暗然たるもの。K兄の軍服姿も板に着いて來た様だが、著しく肥つて來た様に思はれる。墓参をし心ゆく迄詫ぶ。

早慶蹴球戦。五一にて慶應の勝、完勝と云ふ可きか。慶應エレヴンの巧技闘志共に早大を完全に抑へ、宛も蹴球の極地を行くが如きブレイ振は讚歎の外ない。

夜T、Tと新宿で落合ひ、豫科の若い人達を慰める意味で遊ぶ。まだ前途程遠い此シーズン。皆元氣で頑張る様祈る。後略……。

十二月七日

前略……。今年はよくくの祟り年。嘗つて神宮原頭相擁して泣いた勝利の夕、思はずもさけんだ勝利の唄、然るに今は蹴球部育ての親N兄既に亡く、昔の榮光今いづこ。後略……。

十二月卅日

午前中で會社を終り全國高商大會決勝を見に行く。豫科(關東)對同志社(關西)の試合も、豫科の巧なりードに七一〇にて凱歌再び關東に上る。豫科一年連霸偉とすべし。

殊に豫科に渾然として湧くチーム力に感服する。優勝牌授與、並びに挨拶をさせられ面喰ながら、吉澤の汚い手に……。

夜濱の茶屋にて豫科優勝の祝賀會に列席。痛飲す。

昭和十三年度

一月三日

前略……。夜Tと共にタクシーにて丸銀に乗り着け、T、M、T三兄の入營祝に出席。Mに久し振りに會ひ昔變らぬ彼の風貌に接す。

「友あり遠方より来る又嬉しからずや」

後略……。

一月五日

前文略……。午後一時半下關行櫻にて、T入營のため熊本へ出立、坊主頭も凜々しく國民の義務に着かんとす。Y先生始め蹴球部員其の他多數の見送中西行す。

後略……。

一月十日

風邪漸くなほり久し振に出勤。仕事山積し手のつけ様もなし。

T、Mなどは今日入營、我は近衛の補充なり。故郷の父に手紙出す。

一月十一日

前略……。愈々東京に殘る蹴球部同期生は我一人のみ。なすべき事あまりに多し。後略……。

一月十二日

前略……。

連日の快晴、今冬未だ雪を見ず。

一月十五日(晴)

夜商大蹴球部卒業生送別會出席。なか／＼面白し。Nに三十一才、四十一才を誓ふ。又前途遠し。後略……。

二月十八日

前文略……。支那駐在部隊の一部交代とか、Sさんには昨日召集令下つた由、そろ／＼番が僕にも廻つて來さうだ。心の準備をそろ／＼とゝのへて置かう。後略……。

二月十九日

遂に来るべきものは來た。召集令!!既に覺悟は出來て居る。只此の上は男子の本分を盡さんのみ、故郷より父母妹來る。本人の僕よりも父母の心配が思ひやられる。然し今は私情に辯々すべき秋ではない。落ち着く先は北支か將又南支か、亦問ふべきでもない。人間到る所青山ありだ。千歳の嘴に一聲を詫る鶴も、萬年の甲に光をむさばる龜も天地悠久の姿に比すれば餘りに果敢なき存在ではないか。青年日本の榮光を負ひて昭和新生國家の第一面に飛び出す、又快哉!! 東京驛に米良を送り萬歳を叫びし我今將に彼を追ひて立つ。醜状を萬世に残さんか、一瞬の榮光に生きんか、又問ふべき所にあらず。中華は男子の晴舞臺! 我も中華に亦死なん! 後略……。

二月二十四日

連日の酒浸りか、身體の調子意ならず只昨夜味ひたる一生一度の感激は忘れ得ず腦裏を去往す。中略……。

東京への名残にと、下宿の奥さんと新宿武藏野館にてチャツブリン演する所の「モダンタイムス」並にベルリンヴァリエテを見る。中略……。

ニュースと共に「守れ大空」なる短篇をやつて居たが、銃後もあゝなると並大抵ではない。却つて勇躍第一線につく兵士達の方が心安い様な氣がする後略……。

覺悟はよし！

附記

此の年は新しき希望を抱き新社會に送り出され、多忙なる會社の事務をなすと共に、兄亡き後の父母に孝養を盡す様つとめ、理想と現實との矛盾を感じ、亡き兄と遊びし幼年時代をなつかしみ、又學生時代への執着を断ちがたく、二十四歳で夭逝せる兄の年に達したる自分の今更に何等なす事なくすごせしを嘆き、これよりの行動を兄に誓ひ種々の誘惑を退け様と努力いたして居りました。やがてすべての人々すべての物に感謝いたしつゝ出征いたしました。只々すべてのものに感謝をさゝげて居りました。

第三部

先輩の書翰

二階堂謹司

眞夏の炎暑を偲ばすが如く、五月に入ると猛烈に暑く此の分で行くと、今年の夏も去年の其に劣らない事と考へてゐます。それでも雨降りの日とか、雨曇りで風のある日等は少しは涼しい様です。然し江南の新緑初夏の候も全く鮮やかな色を見せて快い限りです。

今頃内地は暑からず、寒からず、國立あたりは氣持の良い緑の天地を現出してゐる事と想像してゐます。

其の後隨分御無沙汰しましたが、部員各位には打揃つて御元氣に蹴球部を通じてあらゆる方而に研鑽を進められてゐる事と存じます。

昨日は又結構なる慰問品を御送附被下、よくある慰問品と

は異り、非常に考へられた又誠意の籠つてゐる慰問品にて皆様の御親切を痛切に有難く感する事が出来ました。早速戦友と又部下と観て楽しみ喰つて楽しむ事が出来ました。常に不

變の銃後の、然も、我が親愛なる蹴球部諸兄の御後援を深く感謝する次第であります。御慰問していただきました小生相變らず頗る達者に中支那派遣軍最後方部隊として上陸以來の此の上海に居を構へ、全軍に補給すべき衣糧諸品の補給原點として活躍してゐます。中略……。

經理官として出征してゐる者の中では、我々の如き仕事に當る者が最も地方人に近い仕事をしてゐる事になります。其丈中々意味のある事が多い様です。小官此の部隊にあり、糧秣前線補給の計畫を擔當してゐます。

一年六ヶ月に亘るとする此の中支に於ける然も上海に於ける生活に、今日では若干此の地の氣候風土にも馴れて參り、長期抗戦に備へる用意も出來てゐます。

今から何年續くか見當のつかない此の聖戦に參加するに當り、概ね張り合ひのある仕事を擔當してゐる今日、學校時代鍛練の蹴球部精神に常に活氣を得て、最後迄健闘する覺悟で

愈々我が蹴球部も部員諸兄の涙ぐましい眞實の努力の賜として、昨秋は東京大學リーグ第二部で優勝し、今秋は堂々一部の強豪を相手に決戦を交へる事になりました。部の歴史淺

く他校に比し S.M. に事缺く我校として、生きる道は蹴球を

通じて眞實なるものへの進展、發展あるのみ、即ち牢固抜く可から不るの團結を持し、堅忍不拔、不撓の精神を以て考へ且つ戰ふの外なしであります。

遙かに江南の空より諸兄の御健闘を衷心より御祈りしてゐる次第であります。

簡文以て近況報告に兼ね御禮言申上げます。

草々

五月十七日

神野光司

拜復

向暑の候、部員諸君御一同には益々元氣に蹴球を追つて御精進のこと、思ひます。其後は久しく御無沙汰しました。

昨冬武漢から北支へ轉進し、内蒙から山西省に行動の後、春暖と共に再び武漢の地に歸り、一ヶ月の後再度北支へ來ました。今回は山の中ではありません、北支の首都の附近に居ります。當地に於て合宿の時の元氣な諸君の寄書を拜見、主將を中心とする強固なる團結、名譽ある商大蹴球部の姿を見て

い時であり、自信を以つて話す時です。

和を以て進むことが大きな力であると自覺した時、その和は結局は日常、部を思ひ或は隊を思ふ努力から生れた處の氣持に根ざすのではないかと感じます。

これは軍隊に於ける小生の拙ない體験に過ず、最近の部には更に進歩した考へ方があると思ひますが御参考迄に書きました。

二階堂先輩を始めとし、部を巢立つた諸君が、大陸に御活動の由、皆、部に於ての體驗を種々なる型に於て、方法に於て實踐され、活躍されてゐること、思ひます。小生もその一人として負けない様に頑張る積りでゐます。

諸君も各々その優秀なる個性を十分に發揮されて御奮闘下さる様希つてゐます。

諸君の御心こめし慰問の品々無事入手しました。合宿の中に地方別に考へられて作つて下さつた小包の状況を思ひ出し、心から喜んで居ます、有難度う御座居ました。

最近は慰問と云ふ新らしい仕事が増して大變ですなあ。

抑へ切れぬ喜びを感じました。

今年の秋が終らぬ限りは何も言ふ事は出來ぬと多くを語らぬ二階堂君の心境、春の合宿は雨が多く所期の効果は果せ無かつたが縦、横の連絡を増してよかつたと語る米山君の氣持、これでこそ商大蹴球部だと嬉しく思ひました。

分隊長に話す事があります。各分隊長が俺は今日は十以上否負を以て他の分隊長と争ひをして小隊内の和を亂して了つたら、折角爲した十二の仕事は八位の價值に低下して了ふ。それなら最初から八の仕事をして他の分隊と協調してやつた方がよい。仕事を成し遂げる迄に各自が自己の信する所に邁進せんが爲に自己と戦ひ、他人と競ひ進むのはよいが、それが分隊の行動としてやがては中隊長を核心とする中隊の行くべき道に反する時は、速かに己を矯めて大きな和の下に來り、進むこそ眞の自己の任務を達成するものだと話します。假へ各人の素質が秀で、るても最後に到着すべき和を知らぬ團體は結局烏合の集に等しく、團結の力は發揮出来ない。

蹴球部に於て體驗したことども與へられた事をよき教へとして、部下の前に及ばず乍ら語る時は、自分にとつて最も嬉しい

故荒井君戰病死の地、咸寧（武昌南方七十五秆）へ輸送をやつて居ました。恐らく十一月三日頃も輸送中であつたと思ひますが、神ならぬ身 荒井君が咸寧野戰病院に收容されたとは夢知らずに居つたのです。

今春再び武昌から思出の地咸寧に行き荒廢した城内に感慨無量の一時を持ちました。同封の寫眞はその時のもので當地へ來て引伸しましたから送ります。

砲撃の爲泊るに屋根無き迄に破壊されて居ます。昨秋とは異り城内春寂寥であります。

最近は北支も暑く百十度になりました。交代の新兵さんの教育に行動の餘暇は飛び廻つて居ます。

今日はこれで失禮します。

又お便りしませう。亂筆で失禮しました。

淺枝彦太郎

昨秋武昌へ入城後直ちに友軍追撃戦の爲

の隨事を差上げないで失敬許りして居ます。S君から送つて

拜啓 先達から慰問袋を貰つたり、手紙を戴いたりしながら

貰つて居る新聞も、忙しい裡に有難く讀まして貰つて居ます。

北歐の一角から波動して來た今次の外蒙國境の紛争も、○○駐屯の吾々部隊の出師で治つた模様。學生時代の試合度胸が斯んな場合にも役立つのかと思へます。

元氣で凱旋何時もの事ながら此から何を仕出かさうかと考へたりして居ます。

(この葉書は六月初めに來たものです)

角田昇

拜啓 内地もだいぶ暑くなつた事だらう。愈々元氣で小平に

國立に張り切つた毎日を送つてゐる事と思ふ。僕もお蔭で至極元氣昨八日任地○○に到着した。乍他事御安心乞ふ。

東京を出發の際は疲れてゐるのに多勢の御見送り本當にく有難たう。

大阪で水島兄に會つた。多少やつれた面影に一年半の戰線生活の苦勞を偲ばせつゝ愈々元氣でやつて居られた。

更に内地を離れて○○では二階堂先輩に三年振りで會つた。

お互にはちきれるような元氣で握手を交はした時の感激は僕ものだ。かういつた感激に浸りつゝ自己のベストをつくす事を期して戰線第一便を擱く。

最後に二階堂主將以下全部員の御健康と、一致協力豫期の成 果をあげられん事を遙かに祈り上ぐ。

六月九日

大掛隆久

啻に新しい年を迎へるばかりでなく、去るものは去つて往

く。そして後に残るものは、それをとゞまらしむることは出来ない。別れなければならぬ運命は、既に二つの生物には最初から豫定されてゐることは知つてゐながらも、別れると云ふことは沟に寂しいものである。そして哀なしいことである。この氣持に透徹して或るものを見出さうとつとめると、われは思はず純粹な愛の系列の中に住んでゐるのを發見する。そして去り往きしものゝ裡に、わが相をどんなに寂しく描き出してゐることであらうか。思うにお互が愛の系列に住みあつてゐる時は最早二つのものは融合して餘りにも調和して

には一生忘れ得ぬものだ。その日朝から自動車で○○の舊蹟を案内してもらひ、杯を重ねて蹴球を語り故郷を偲んだ。實に懐しい感激の一 日だつた。

爾來僕は獨り旅を續けてやつと昨日北支の山奥のこの都會にやつて來た。こんな山の中でも既に日本人が陸續とつめかけて商業に工業に目覺ましい程の活躍振り實に意を強うするものがある。

氣温は既に日中は一〇〇度をオーバーしてゐるけれど、空気が乾燥してゐると朝夕ぐつと涼しいので、蒸し暑い東京なんかよりは遙かに住心地がよさそうだ。

今日トラックで町を走つてゐたらとある運動場にゴールボストが立つてゐるではないか、蹴球場入口とはつきりかゝれた掲示板をみて急に足がうなりはじめた。まだこの町の事情がさつぱり解らぬのでボールのありかは見當はつかぬがその内折を見てあの廣場で思ひ切つて蹴つとばしてやるつもりだ。戰地へ來たといつてもまだ銃聲一發聞けず、生水がのめぬのが一寸痛い位で何の苦しみも感じてゐない。

此處を一寸離れると未だ匪賊の奴がうよ／＼してゐるそだからその内には傳家の寶刀に物云はす機會が來るだらう。

(この葉書は一月に來たものです)

後藤岩崎兩兄送別文

二階堂晴三

最後に二階堂主將以下全部員の御健康と、一致協力豫期の成 果をあげられん事を遙かに祈り上ぐ。

六月九日

關西遠征も無事に済んだ事と思ふ。必勝の信念に燃えて出發せられた諸兄の氣持を思ふ時實に尊いものに觸れる氣持がす

る。蹴球は誠が根底を爲すと故長瀬先輩は說かれた。軍隊は一誠が根底を爲すと聞き、極めて短期間乍ら之を味ひつゝある。如何なる時如何なる場合に於ても人間が眞剣になる時は一貫した何物か支配する様に思はれる。今年のリーグ戦に勝した事は思ふだに嬉しい事だ、選手諸兄の御苦勞は云ふ

のである。

今、後藤、岩崎兩兄を蹴球部は送つてしまつた。別れる感情は、何に於ても異なるものではない。何故なら吾々は互に何年かを協同の生活に委ねて來た點に於て、魂の接觸は何かに於てして來たからである。吾々は兩兄の人格の叙述は僭越であるから煩めねばなるまい。若しもこの叙述が兩兄の不本意の因となつて不快の念を喚起せしめる様なことがあつては申譯がないのである。

後藤さんが何を爲たか。部生活に何を残したか。岩崎さんが部史の一頁をどう刻まれたか。しづかに吾々の胸の底に回出し得るものと信するから、それを敢て言ふ必要はない。その正しい像が吾々の兩兄の總てであり、兩兄の部に残された正しい相なのである。兩兄の人格、或は行爲なぞは必ず部員達の部生活のどこかでこの像となつて臨まれることゝ思ふ。

今や「新しい時代」と呼ばれる潮は生活のあらゆる領域に

押寄せて來るこ。世界のうちへ雄然その一步を印せられた兩兄の健闘を祈るばかりである。後顧の憂ひに悩む様な蹴球部であるなら、吾々は寧ろ兩兄をそれより先に恨むものであるも又決して容易なことではない。

○所謂「新段階」は長瀬さんを知る者が無くなりかけて來た時に叫ばれて來たものであることを深く反省する必要がある。

○「生きることが既に一つの藝術である」ならば蹴球部生活を立派に生きることは亦比^{たゞ}なき一つの藝術であらう。一個の藝術家たることが至難の如く、一個の蹴球部員たることもない。

時の流れが彼の三項目には表現されてゐない「聲」を抹殺せんことを惧るゝ而已。

偶 感

狩 森 正 雄

× × × ×

が、幸ひにしてこの憂ひなきを明言し得る所に既に兩兄の足跡があつたのである。安んじてその仕事に就かれて下されよ。蹴球部は善良なる新らしき先輩を持ったことを感謝する氣持であるから。そして常に言はれて來た蹴球部に感謝する氣持で世の中を堂々と押切つて頂きたい。吾々は殘つたものとしてそのつとめを果す覺悟を決めてゐるから。

最後に一言附加るならば、吾々は長瀬さんを識つてゐる最後の年級の人と別れることが何かしら、しつかりと結びつけられてゐた岸邊の纜を完く解き放たれた様な氣がすることである。そしてこの意味た於て兩兄の送別が一しほと身に沁み亘ることである。

以上甚だ簡単に送別の微志を述べた次第である。

斷 片

池 尾 隆 三

○「運命は性格の中にある」と云ふ。

蹴球部の性格は如何。蹴球部の運命は如何。試合の勝敗、リーグ戦での優勝、或は轉落がすべて運命或は偶然の支配

お互が赤裸々な虚心坦懐な氣持で眞剣にぶつかり合ひ、勵ましあつて人格は陶冶され向上して行くのだ。蹴球部自分でなければ味はえない妙味があるので。本當に部員同志の附合ひは心と心の附合ひでなければならぬ。何等の偽りがあつてはならぬ。

眞實が根本である。

× × × ×

理論よりも實踐が大切だ。百の名言より一つの實行だ。兎もすれば理論のみに走りがちだ。我々は蹴球部員だ。實踐から理論を引張り出さう。

× × × ×

自信と自惚を混同してはならぬ。自信は持たねばならぬ。誰がなんといつても、自分は自分の道を進んで行かねばならぬ。自信をもつて突き進んで行かねば進歩發展はない。然し自惚は退歩のもとだ。自惚は自己を破滅に導く。大いに心せねばならぬ。

誠だ！ 誠だ！ 真實だ。何をやるにも誠をもつてやらねばならぬ。蹴球部生活は誠と誠、魂と魂のぶつかり合ひだ。

一人一人の精神が大切だ。技術の練磨も精神的要素の上に於てなされるのである。根本を忘れてはならぬ。

× × × ×

我々は苦しまねばならぬ。どんな苦しみにあつても決して

悲しんではならぬ。苦しみは我々の心を練磨してれる。苦しまなくては到底知り得ぬ境地がある。自らその苦しみの中

に一筋の光明を見出した時、我々は決して不幸ではなく、最も不幸な幸福の中に居るのである。我々はうんと苦しまねばならぬ。

苦しみを受ける時、静かに考へて見るがよい。其の苦しみに堪えた時、我々はそれだけ向上する。どんなことがあつても苦しみに負けてはならぬ。どんなに苦しみが迫つて來ても突進せねばならぬ。何處までも試練に堪える可く努力を續ければならぬ。苦しみが大なれば大なる程其れに打勝つた時我々はより一層向上し、より幸福である。精神上にも、肉體上にも進んで苦しまねばならぬ。苦しんでこそ、それだけの向上があり進歩發展があるのでだ。

× × ×

浦高戦が目撃の間に迫つてゐる。今年こそはどうしても勝

たなければならぬ。只意氣と熱あるのみ。本科生もサブとなつて商大蹴球部三十八名が一つになつてぶつかつて行かう。

ある。さう云ふのは馬鹿な考だ。人間の智識ではどうにもならない事をどうにもならない方法で考へる。そしてその考へは何時までいつたつて深くも入らなければ、しつかりした土臺にもぶつかれない。何時まで行つてもきりがない。

考へるには考へ方がある。「明日天氣でないと困る」之は事實であつても、今の所やむをえない。又個人が個人の事情で天氣にしたり、雨を降らしたり出來たら大變だ。日でり續きの時は皆一致して雨が降らないと困ると思ふであらふ。然し降らないと困ると考へた丈では駄目である。どうしたら雨が降らせられるかと考へるか、雨が降らないでも困らない設備をするにはどうしたらいゝかを考へるのがよい。自然の方則に何處までも從順でなければならない。人間はぼんやり考へるのでは何にもならない。少しづゝ考がはつ切りしてくる考へ方を見つけなければならない。この爲にも蹴球をやつてると大いに役立つと思ふ。

だから好い考が出れば何處までも追求すべきである。

すべて眞理の發見とか、大なる發明とか云ふものは一寸した事に疑ひを入れ、或は思ひあたる所から、だん／＼秘密の寶庫に入り込む事が出來たからで、注意と考が生れたからで

豫^{ヤハ}の諸君、浦高のグランドで嬉し涙に咽んでくれ。豫^{ヤハ}がオール商大の原動力だといふ事を絶えず念頭においてくれ。本科生にリードされるのでなく下から盛り上つてくる力が欲しい。

考へる事

菅瀬十朗

蹴球をやり出して既に六年にならんとす。

豫科時代には無茶苦茶にボールを蹴つた。何も考へずにボールを蹴つた。然し段々ボールを蹴つて行く中に考へるようになつた。そして考へる事が如何に大切であるかを知つた。

人間が人間らしく生さるのは、人間に考へる力があるからだらうと思ふ。然し考へ方に馬鹿と利口がある。「馬鹿な考へ眼るにしかず」と云ふがそれは事實だ。馬鹿な考は頭を悪くする。生きる力を奪ふ。考へてどうにもならない事を考へたり考へてわざ／＼自分の壽命をぢめめる人も居る。

考へない方がいゝ事許り考へる事はよくある。頭が段々悪くなり、神經衰弱になつたり、氣狂になつたりするのもよくたるものである。

ある。考へる世界、すべてを一ぺん分解出来るだけ分解して其處から人生に役立つものを見つけ出す。

よき頭の持主は自分を生かす思想をとつて、それに益なきものはすて、顧みない。

糞をとつて滋養分をする胃腸はないと思ふが自分をくさらす思想を有難がり、自分を生かす思想に無頓着な人間は時々ゐるものだ。彼等は自己の内心の要求に反逆した罰をうけたものである。

自分の一生に役立つものはとれるだけとる。人間に生れた以上は、人間として生きられるだけ生きて行く。その爲には考へる事が必要だと思ふ。

球想陰影

二階堂晴三

時計の音のみが静かに音をたてたが、灰皿の縁に置いた塵は動かうともしない。私の部屋では先程からしばらく沈黙が續いてゐる。弱い音が刻んでゐる時も知らずに、自分を忘れてしまつた顔と顔。こゝには泛び上ることの出来ない小さい

ものゝあらゆるものが、滲み出たのかも知れない。

「さうだ、蹴球部の哲學的意義の體系が要るんだ。あつてもなかつたんだな。」

獨白の聲が、この部屋の隅に吸ひ込まれたが、後は依然として渝らない静けさである。たゞあるものだけがある。

窓を開ける。雲がきれたのであらう、急に明るい日射しが満いだゝは満目溢るゝばかりの若葉である。互の視線は落つともなくこの新綠の上に落ちつく。そして流轉の自然界が今餘りにも輝かしい綠に領されてゐるのに氣付いて、身を委ねてゐる沈黙のまゝに、お互の懐しい追憶に沈むのである。しづかに過ぎ去つた部生活の一日一日に溯つて行けば心の壇は恰も切つて落されたやうに多數の懷ひ出が流れ出る。そしていまそよ風にはたはたと揺れて、光りと陰影の相亂れる綠の中に、その限りない「おもひ」の絲を紡けば、詩となる歌となる。描くことが出来るなら繪にもならう。洵に輝く綠の裡には、人間の歎びや、望みや、誇りを、勝利を美しく湛へる。さうして陰影の糸が人の持つ悲しみや愁ひや迷ひの相を宿すのである。

互の胸奥は併に歩んで來た跡を回想して縋れ合ひながら親

——それは貧困とさへ呼び難い空虚なのであるが—— 慄然としてゐる魂を發見する。そして痴者の歌ふ聲を意識してからと云ふものは、私の過去の凡べてでは、斷ち難い鐵の鎖に捉はれてゐながらも安心を裝ふ、自己陶醉の笑ふべき耽溺であつたことを知つて悲しんでゐるのである。かやうな實感が私を今どこまでも苦しめる。にも拘はらず私はこゝに四つの小文を錄さうとする。固よりかくの如き輕蔑に値する球想なのであるから、私は無理に球想の陰影と題した。

最近俄はかに生じた部生活の本質に對する批判的傾向に、心からその發展を希求して熄まない眞實のこゝろを、さて私はここに書きたいのである。恥づべき球想の投げた陰影に、かかる聲が叫ばれるとは矛盾であらうが、この矛盾を私は部員諸兄の寛容に訴へたい。全く蟲の良い私である。こんな私が今からの蹴球部に絶へないなら、尠くとも現狀維持を脱殻し得ないならば、蹴球部は衰亡してしまふであらうと言ひたい。

一切の過ぎ去るものは、唯譬諭に過ぎない。發展は今後にある。否定さるべきものが過去に葬り去られるのは當然である。私のこの輕蔑に値する文は否定して頂きたい。葬り去つ

和の眞只中についた。そして求むるまゝに、隔け込みたいやうな静寂が與へられたこの一時こそ、互の心中には、人間の試み能ふ如何なる描寫も超越した美しいものが、無造作に織り出され、築き上げられてゐたのである。

× × × ×

僕達は實に哀れな少さきものであるが故に、こんな語らぬ會話に一切を湛へむとしたその時の雰囲氣を、これまで幾度經驗して來たことだらうか。今球を蹴ることと思想とを混淆せしめようとした愚は喘つて貰ひたくない。吾々は兩者を切り離した穩かな安住の部生活をお互がしたくなかつたからである。

思へば、吾々の部生活の内面性は、常にこの二つを闊はしめて來たことにあると言ひ得る。そして時には相反撥せんとする兩者であつたらう。しかし妥協を嫌ふ限り、部生活を續けむとする限り、兩者の調和は常に試みられなくてはならないものであつた。けれども今本三の春を生きてゐるとき、私の日記に見出される球想など直ちにその儘を書かしむる良心の聲には遭はない。朝を迎へる毎に、夜にその日を別れる度に、私は暫に部生活の私のみならず、私自身の内面的貧困に

て頂きたいのである。

× × × ×

(一)

私に關する限り、一切のものは消滅せよ、一切のもの往きて去れと叫べば、あゝいくら把握したと思つたものも、これからだから一つ一つ逃げて行く。そしてそれは未練を以つて追へるものではない。この體驗は自分の無知なる事に壓倒されたものにのみ許されることである。

けれども、今恰も枯野の眞中に見出されたが如き私は、何も持たない一つのむくろなのであるが、私自身死んでゐない限り——生を意識する限り、そのむくろは、私と云ふからだであつて、決して死んでゐるものではない。手を動かす、足を前に進めることも出来る。今や私に關する限り一切のものは去つた、しかし生きてゐるが故に、唯一つこの「からだ」のみが残つたのである。私はこの「からだ」に對して純粹感情といふ名前を與へる。それは何と名付けられてもいいだらうが、私はひとり私だけが知る純粹感情といふ呼稱を與へて足りりとする。この「からだ」は、純粹感情は、私の一切の源泉であり、生きたる私の生命なのである。そしてこの「か

らだ」が創造のはたらきを営むところに自由の本質があると思ふ。又この純粹感情の世界を、愛と抽象することも可能であらう。だから自由と愛が、私の生きんとする純粹生命の一切であると信じてゐる。

大き過ぎる程の問題に對して、僅かなその輪廓を數行書いたのであるが、何故にしてかゝる叙述に及んだかは私が夥しいことを部生活に於て體験して來たが先づこのことを以て序としなければならない思想に由來するからである。そしてこの序と部生活との連繋を見出すならば、直截にかう言ひ得られる。一箇のボールを追つて無我の境を彷徨ふ體験が、何よりも先づこの「からだ」を意識せしめたと。

凡そ吾々の思想をして實體的ならしむるか否かは吾々の仕事である。私は私の今日あることに對して部生活に捧げる感謝も、常に部生活があらゆる思想に實體性賦與と云ふ大きな役割を果すこと現在信じてゐるのに始る。狭いこの部屋で土の微かな匂なぞと歌つた所で、匂ひは餘りにも距つてゐる。然しながらグラウンドに掘んだ土が腕を通して匂ひを傳へる質感を、四疊半に於て得られるかの天才でない私は、洵に部生活に依つて土の香りも私なりに、匂ふことが出來たの

のを聞いたのであるが、私は彼等に對して何も言はない。吾々から去ることを決心してゐるものに對しは、吾々は寧ろ輕蔑して貰ふ方が幸ひだからである。相反する二つものが當然容れないことを知れば、寧ろ理解せぬ彼等に輕蔑される事は、

吾々の行き方が明瞭なのに起因する。だから彼等以上に吾々は建設から逃げて往く彼等を憐んでゐるかも知れない。この場合たゞあるものがあるであつて、亡びないもの、崩れないとものが残るのである。

思へば吾々は内外に育くんで呉れた故里を必ず持つものである。幸福な人は常に他國に住んでゐる。そして故里を想ひ、高い生活を憧憬する。存在せんとするものが生成への過程にある限り故里は常に憧憬と慰安の對象となる。蹴球部の故里性も、吾々の學生々活に於て存在せんとした純粹な生命の依持であつたからこそ、說かれるものである。虚偽を排した部員お互の正しい部生活が、蹴球部を常住に故里として永遠に輝かしめるものであらうこと、私が今更の様に言はなくとも既に言ひふるされて來たことである。

部員である限り、蹴球部を愛し得ぬ人は去れ。自らが毒されてもながら部をも毒さんとするを惧れるから。蹴球部を愛

である。私は部生活の本質は飽くまで一つの思想に實體性を賦與するにあると思ふ。青年は力の充實するとき、彼の中に宇宙をも直觀する可能性を持つ。けれども彼はその充實せる瞬間を離れるとき、餘りにも小さき貧しき思想の持主なのに見出されると思ふ。

私は「愛と自由」を謳歌して、これを蹴球部生活六年の私の内面的生活に於てはじめて齎らされたものであることを、一つの譬諭として茲に告白した。けれども部生活が後に述べる如く常に五の人格の切磋琢磨の營みであるからには、絶へず發展から發展へ精進する部員の集ひでは、かくの如き偏狹な私の告白なぞは、すつと後に残してもつと大きな寛い思想に對しても、常往にその實體性を與へることになるだらうと思はざるを得ないのである。そしてこんなことは、部を最も完全なる狀態に豫想してのみ言ひ得られるのだとか、魂と魂との交流なぞは望んでも得られるものではないとかと、よく部を去る人々から吾々を憐むが如く注告される

し得るものは、彌その愛を自由に深く堀り下げて呉れ。私は身の程も知らずこんなことを叫ぶ。

(二)

私は最近こんなことを發見した。

部生活を意識した尊敬すべき部員としてのあり方に二つの型がある。それはアリスト型とロマンチスト型である。敢て型と呼んだ理由は、夫々徹底し切れぬ人間の必然的弱さがあると同時に、私自身の獨斷的區別が犯す過誤を多少でも救ひたいからであつた。そして私はこんなことを夢想する。アリスト型には精神を植ゑつけたい。ロマンチスト型には烈しい現實の持つ力を知らしめたい。そして私自身どちらの型に屬しつゝどんなに苦しんでゐるかを、知れば知る程こんなことを考へてゐるのである。

何故なら、前型の人からは傾聽して尊敬せすには居られぬ方法論の示唆に與るし、後型の人からは罪のない部の内的革新の成案の暗示を受けるからである。そのどちらを實踐するにも、二つのものが併行しない限り出来ない相談なので、兩者の言葉は情ない鈍愚の頭腦を破裂の一歩手前におく。けれどもこれは頭腦の劣等に罪があるのであるのだから、優秀なる頭腦に

遭へば譯なく解消するべきものであらうか、この場合愚見を少し狹んで見ると、――

一つの徹底した立場をとつて貰ふことは何よりも望ましいことで、若し徹底出来るものなら兩型の何れをもよしとしなくてはなるまい。しかし徹底しきれないものは謙讓であるべきなのに、況んや一つの立場さへとれないものは謙虚であれば許さるべきなのに、一時にして兩型を兼ねて部全體をも云々せんとする。こんな行き方の根本には、利己の本能に追随することを要領を以て押し隠さうとする醜くさのみがあつて唯驚くばかりだけども、どうもその言はうとする核心は擱めないし、私自らも甚だ怪急で誤を犯し易い性質を知つてゐるし、實に困つたものだと思つてゐる。

思想が離れて來れば來る程蹴球部も深いものとなつて来るだらう。そして自分の立場は尙もつとはつきりとして來るのだらう。だから兩つの型に對して私はどちらがいい」と斷を下すものではない。新段階なぞが生れ出たのも、どちらかの一つの型に規準を置いたのでは毫もなく、唯全體をして向上せしめんとした露れだと思ふ。だから部員は互に内省して自分の立場を考へるべきである。

あらう。

蹴球部は固より人格と人格とのつどひであるが故に、思想存在價値があると思ふ、だから調和は不知不識の裡に露呈されるべきものであつて、決してこれに飛躍到達し得るものではない。創造的活動とは、眞實を愛す不斷の精進を言ふものであらう。

蹴球部は固より人格と人格とのつどひであるが故に、思想或は性格に於てその傾向性の一致は、深い意味で求められるものではない。しかし互の人格の内奥に直觀し得る眞實なるものは當然の一つの系列にある筈である。絶対を豫想してのみ相對の相反撥は實在し得る。そこには一分の間隙も許さない無限の營みが行はれ、この無限性の極限こそが絶対として實在することになるのではなからうか。だから部員と部員は眞實を目的とした鬭ひを挑み合ふべく運命づけられてゐる。そして蹴球部は正しいと信ずることを一つの人格の自由なる意志に則らしめて、行爲することが出来るやうに解放されてゐるものと言へよう。洵に蹴球部は、蹴球を愛好するものが部生活を通じて、互に營まうとする文化的活動の自由の協同生活體と止揚することが出来るのは、私ひとりの獨斷的見方であらうか。私は六年の部生活を以て、今後の蹴球部はかくあらねばならないと信ずるのである。

苟くも神聖なるべきものは犯すべからずである。身を利己の不淨に置いて、或る立場を裝ふときは許し難いことである。純粹な立場が部員の間に明瞭になつて來ると、必ずや時の推移のうちに陶汰が行はれて、新しき蹴球部員の道を確立することとなるであらう。さうしてそれまでには互の切磋琢磨が、必ず自分の立場の内省を喚起して、新しき部員の道の確立に、全體が合流する様になるであらう。私はその日を待つてゐる。それに唯こゝで自己に眞實になれと言ふのみである。

そして最後にこの立場が確立されたとき、その立場が今まで何ら説き明されてゐなかつた昔の部員どものあり方と全く同一であつたことが發見されたら、昔の眞面目だった部員はひそかに悦ぶであらう、たゞへ同一でなかつたにしても昔の彼等はその出現をどんなに蔭から、惜まず讚へるであらうか、云ふまでもなく分り切つたことである。

(三)

部員が全く調和した時は、卅九名が文字通り一心同體の魂の交驅を成し遂げたときである。この調和を豫定するのではなくて、この調和を目的とした部員相互の創造的活動に部の強い體軀が溢らした逞しさを以て、その「熱と意氣」を以て勉強にも精進する互の部生活を、私の愚劣な頭が抽象して到達した決論には唯ひとりうなづくばかりであるからである。唯こゝで誤解を、殊に若い諸君の誤解を避けたい爲に一言書き足さねばならない。

「蹴球する」そのものが持つ意義はもう殆ど言ひ盡されてゐるから言ひ度くない。だから「蹴球する」ことを忘れた蹴球部は殆ど無意味である。この「蹴球する」ことが常に蹴球部生活の権軸とならねばならない。「蹴球する」ことを嫌惡しながら部に席を置いて部の雰囲気のみを肯定して居るのであつたら。その良心を疑はねばならないのである。それで「蹴球する」ことが、常に中心とつて部生活を規定しなくてはならない所以は明らかになつたと思ふが、この「蹴球する」ことが、非運動部人達には分らないどんな重い負擔をかけるかは固より知られてゐる筈。そしてこの負擔を避けて

は蹴球部の道が零と化することを、私は最後まで強調する。

この負擔こそ（この犠牲こそ）負担でもない犠牲でもない愛部の心の露呈なのである、だからよく「勉強だ、勉強せんといかん」などと、一體何を言はうとしてゐるのかその核心の把握に困難を感じるやうなことを、部誌とか部生活の表面に持ち出す人が往々鬱志にも缺け、技術も進歩しないのを見ると、そのぶさなまに眼をそむけたいのである。そして自分が蹴球部にあると云ふことを忘れて、練習が辛いなどと平氣で言つてゐる人を見ると、退部でも懲處して進ぜたいと思はざるを得ない。そして試合などもう時間も決つてゐるのに、缺課が恐しくて何だかだとぶつゝ心の中で言ふ人達も無論同じである。こんな人達は蹴球することに依つて見出された、この大きな蹴球部の母體を知らずに、愚劣なることを口にする矛盾を喜んで平氣な人と断定する。分らない矛盾を愛してゐる人の瞳は名優の演技に接さなくとも澄みきつてゐるが、分りきつてゐる矛盾に平然としてゐる人の瞳はまさに汚濁してゐる、非人間的な不健康な色たること夥しい。

非常に具體的に書いて來たが、蹴球すると云ふ部生活を通じて營ようとする吾々の文化的活動の前提には、飽くまでこきとれなかつたからである。

では蹴球してゐて勉強出来るのか。餘りにも陥落な間であるが致し方ない。言ふ、一體蹴球してゐて勉強出来なかつたらやめるより他はないではないか。出来ないのはしない我である。我を以て部全體を推進せしめ得るか。出来ない勉強はしない我である。いや出来なかつた我であつたかも知れない。結局この我より出發すべきであつて、出来ないと信じた時は前段に戻る。

あゝ私は假に勉強が出来ない時があつたとしても、——全く私のやうな怠け者は勉強しないので、出来ないのでないものであるからこんな言葉は使へないのであるが、——それは蹴球の勉強性に依つてどんなに充たされて來たことか。そして私の孤獨なる心を蹴球部の持つ親和の力がどんなに温かく包んで來て呉れたことか。何と數へ切れぬ部生活の断片は溺れんとした魂に慰安の糧を救ひの薬として與へて來て呉れたことであらうか。かかる私をして君は蹴球部に逃げ込んでゐるなぞとするものがあつたら、私はそんな奴は殺してやつても嫌らないのである。何故なら私は私の眞實を信じ、今日の私を與へられたことを誰よりも私自身克く知つて、これを蹴

の部生活が嚴存することを忘却してはならない。蹴球することは今部史に於て著しい役割を果して來たのである。そして蹴球することが齎らした意義は潔として輝いてゐる。吾々はその光明にいよいよ明るさを與へなくてはならない。その上に總てのものを光被せしめる、強固さを與へなくてはならない。かう思考した私が信じたことを書いたまでのことであり。

(四)

「運動と勉強」と言はれてゐるまゝにその通りを書く。この二つの言葉が定義する意味が既に銘々相異してゐるのが過誤の因なのだが、先づ誰もが用ひた経験のある一番浅いと云ふか、ありふれたといふか、その筆に於て書く。

蹴球してゐて勉強出来ないと信じた人には何も語らぬ。彼には躊躇することは禁物なのである。たゞ出来ないのでないかと、疑惑した時は話合ふ餘裕がある。一般によく部を去るものが種々言つて來るが、畢竟蹴球部にて「蹴球する」ことが嫌だと明言する程のリストがるない事は、悲しむべきことである。吾々はその疑惑の心を部員同志の向上のためにうちに溶かんとして試みたが、かゝる明言を彼の口から聞む。

球部に感謝してゐるからである。

最後に今一度言ふ。勉強してゐない自分を發見するのは結構である。自分の無知を嘆ぐのは喜ぶべきことである。然しこれから直らに部生活に我を介入させて貰ふことは拒む。自らの精進の不足にたち歸つて頂きたいのである。運動してゐて勉強出来ない人には、廣い世界が双手を擧げて待つてゐる國がある。そこへ行くことを些かも引き留めようとする頑迷な蹴球部ではない。私達同志は凡人であつて構はぬ。何でもいゝ、ただ蹴球することをやめると生心地が悪いのである。どこにゐても、吾々の學生々活どの断片をとつて見ても、部員としてあることが何かしらこの脚を大地にしつかりと支へて呉れる氣がしてならないのである。

あゝその時如何なるものなるやと尋ねる者ありしならば、予は自ら卑下の色を面に泛べつゝたゞ愛とのみ答へしならむ。

私はこんな一句を口ずさんでゐた。そして、私の心ではこんな言葉が繰返へされてゐた。

意識せる生活即勉強なり。蹴球即勉強なり。

恥しいとも思はず、よくもこれ程書いて來たものである。

私の輕蔑に値する球想の陰影であることは豫め斷つておいた

のだから、餘計な杞憂はやめるがこのことは追記しなくては

ならない。

こんな文章は長瀬さんを始めあの時代の雰囲氣に育つた先輩の方々から見られると、まさに噴飯物かも知れない。何故ならばこんなことは書かなくても一切俺達は實行してゐたと云ふ答へが譯もなく豫想されるからである。恐らく亡くなられた長瀬さん、荒井さん、偕にあの淨土の樂園の木陰に會されて、蹴球部員の質的低下を嘆かれてゐることであらう。そしてこの想像は他の部員にあたるものではなくて、私自身に當て嵌る想像なのである。しかし私は思ひ上ることも、無きを有るが如く裝ふことも出來ない。たゞありのまゝを書き出したのに過ぎないから恥を曝らすとも言へる。嘲笑を自ら買つて出たとも考へられる。それだからこそ、私を輕蔑して貰つて新なる發展、蹴球部の本來の相への復歸が多少なりとも刺激されるところがあつたら、私は無上に悦ぶのである。以上私の球想は、固より輕蔑に値すべきものなることを承知して而かもその暗い陰影をこゝに映し出したのである。

と思ふ。

我々が價値ある生活を送ると云ふ事は、此の意味に於て、眞の内省に依つて見出されたる自己の裡に住む不斷の敵と不斷の闘ひをなすことであると云ひ得よう。何故なら、凡そ眞摯な生活を愛し神の國を求めるとする者にとつて、それは征服せざれば止む事を得ざる不斷の敵であり、従つてそれは我々が完成される迄は、限り無く續けねばならぬ闘ひであらう。そして人は此の闘ひに打ち勝つことによつて、一つく此の敵を征服することによつて始めてその人格の進歩發展と云ふ事を實現することが出来るのではなからうか。真正の内省こそ我々に永遠に進むべき道を示すものであり、我々の生の根本であると云ひ得るであらう。

闘志！ ファイティングスピリット！ 實に魅力あり力強い言葉である。だが一體これは何を意味するものか。闘志とは何に對する戦ひなのか。相手は一體何か。

自分は眞の闘志なるものは、道に從ふことであり、人格の發展にともなふものであると思ふ。闘志の觀念は正義の信念を根底としてのみ理解し得る。何故なら闘志とは必しも他人を撥ね飛し又亂暴を働く事でも無く、又單に所謂心臓が強い

ひとり往く旅とはしどひとりなる

よすがをあはれ君はしらすも

球 想 斷 片

米 山 大 三

一、闘志と張り切り

我々が價値あり進歩ある生活を送らんとする時、常に内省と云ふことを離れる事が出来ぬはすである。自分は眞の内省の試練を経ざる思想や行爲はすべてその人にとって、所謂浮いたものであり、身に着いて居らぬものであると考へてゐる。眞正の内省とは自己の現實を、それが苟も眞實である限り如何なる己れの醜惡さ弱さの前をも決して面を背けること無く、自己の眞の相を明るみに照し出すことである。従つて我々は内省することに依つて己れの弱點缺點を明確に知ることが出来る。つまり眞正の内省によつて我々は自己の内に不断の敵を見出すことが出来るのである。我々が世の不正不義を嫌惡し、正義の爲世の爲に闘ふと云ふとも、内面的に見れば自己の裡の弱い心——不斷の敵——と闘ふことに外ならぬ

と云ふやうなことでもあるまい。眞の闘志の征服すべき相手は、前述の如く自己の裡に内省によつて見出されたる不斷の敵に外ならぬ。だからそれは或る時には外面に表れて他人と闘争することとなる場合もあらうし、又極めて心臓強く厚顔に見えることもあり得るであらう。だが闘志は何よりも先づ自己の心の深みに於てその働きを發揮すべきものであることを忘れてはならぬ。眞摯なる生活を營む者にとつては、如何に全く外に表れることなく一人己れの心の裡で無言のそして極めて激烈なる闘ひをなすことが多い事であらうか。闘志は決して力強き者頑健なる者の専有物ではなく、眞摯なる生活を營む者のみの専有物であると思ふ。

かくの如き闘志は、蹴球に於てグランドに於てはファイトとよばれ張り切りと呼ばれるものである。だから張り切りは決して單なる興奮狀態でも無く、又一時的な調子によつて生ずるものでもない。何故なら上級生の激勵やグランドの雰囲氣等は、張り切るべき楔機となることはあつてもそれは決して眞の張り切りを生み出すことは出来ない。それはあく迄自己の心の中より湧き出るものでなければならない。

眞正に張り切る爲には眞面目な生活を送ること、自分が蹴

球をやる氣持とが、はつきりして居ることが根本的前提出る。何故なら、張り切りとは前述の如く闘志の別名に外ならず、従つてそれは、自己の裡の敵、安逸を求め己れを瞞着せんとする弱い心に打勝つた状態に外ならぬ。而して、自己の弱い心は内省することによつて見出されるものであると共にこれに打勝つには眞理への強き愛と、人格完成への熱烈なる追求心とが絶対に必要であるからである。張り切るにはファイトを出すには己れの僅かな弱點をも直ちに見出す敏感なる内省の心と、己れの弱さ醜さをあく迄嫌惡し憎悪し、至高なるものを真剣に求むる心が必要なのである。いゝかげんな氣持でボールを蹴つてゐて何うして張り切る事が出来る譯があるうか。

自分は人がグランドで真に張り切つた時には神の如く強い時ではないかと思ふ。それは自己内のあらゆる弱い心、敵に打ち勝つた時であり、肉體に對する精神の完き勝利の時であり、あらゆる善に對する障害をぶち破つた時である。眞に張り切り得た人々は魂の底より湧き出づる無限の感激を覚え、神への接近をすら感する事が出來得るのである。

我々は蹴球によつて闘志を養ひ得る。始めから終り迄苦し

無數の機會と方法が存するのである。

二、生活態度と蹴球

人間の行爲はその人の意志に基つくものである。だからその人が如何なる人であるかはその人の行爲を見れば分かるものと思ふ。行爲の連續がその人の人格の表れに外ならぬ。一人の人の行爲は、如何なる時に於てもその人自身の行ひであり、例外なる行爲と云ふものは認めることが出來ぬ。「人に勧められたからあ、云ふ事をしたのだ」「雨が降つたから約束を守れなかつたのだ」等と云よ人は、人に勧められゝば悪い事もし、雨が降れば約束を破る人に外ならぬ。その人の行ひの責任は他人にあるのでも無く又雨にあるのでも無く、實にその行ひをした本人自身が負ふべきであると思ふ。自己の行爲に對しては自分がその全責任を持つと云ふことは、人が人間らしく眞面目に生きて行く爲に第一に必要なことであると考へる。

練習のために授業を休むのも、その責任は部にあるのでも無く、主將やマネージャーにあるのでも無く、休む人自身がこれを負はなければならない。それは部員であると云ふ事の爲に又従つて自分が部生活を肯定してゐるが爲に、部の行き

みの一言につきると云つても良い練習によつて闘志を磨くことが出来る。何故なら練習に於ては己れを省ることが極めて容易であり、その征服すべき敵は極めて具體的に表れるからである。弱い心に負ければ張り切つて練習をやらねば、第一にボールが飛ばぬ、ダツシュは効かぬ、ヘッドをせねば必ず負ける……皆からは頑張れ／＼とどなられる……又極めて具體的な己れの職責を果すことも出来ず、自分一人のためにチームワークが目茶苦茶になつて来る、その上體は益々重くなり苦しくなつて来る。更にその上、練習が終つた後全く不愉快であり、氣が重い……そして苟も眞面目なる部員は、眞の蹴球をやらんとする者は到底かくの如き練習に甘んずる事は出來ず、之等と全く反対の練習を行はんとする事勿論である。だがさうする爲には己れの弱き心に打ち勝たなければならぬのである。

苦しみの一言につきる我々の練習の數時間は常に己れの心を征服せんものと機を窺ふ弱い心、さぼらんとする氣持との一瞬も心を許す事の出來ざる、必死の闘ひの數時間に外ならぬ。グランドは修養の道場である。そこには真正に張り切りの心を解する部員にとつて、闘志をファイトを磨き養ふべき

方に應するのである。だが部生活を肯定するか否かはその人自身の自由であり、又部員となつたのもその自身である。従つて我々は皆すべて己れの責任に於て或は正しいとの自信をもつて休んでゐるはずである。徒らに部に盲従し、奴隸的服従をなす者、部生活に他律的強制を感じる者は、商大蹴球部員の名に價せぬものである。

自分がかくあれと思ふ部の行き方と、現實の部の行き方と相容れざるときは、上級下級の別を問はず自分の信する所を堂々と申し出すべきである。かくて部はその偏見や予盾を除去し向上し發展することが可能となるのである。併しながら如何に努力するも己れの信する所が容れられざるとき、そうして正しさの自信をもつて部の行き方に従ひ得ざるに至つたとき、その人は決然として部を去る外はあるまい。部としてもかくの如き人に對して犠牲を要求し得る何等の理由も無いのである。

話は思はず横道にそれ始めた。要するに人のあらゆる行爲はその人自信の責任に於てなさるべきであり、行ひは人格の表れに外ならぬと思ふのである。行爲と人格とは表と裏との密接不離の關係にあるのだ。だからよく話しに出る「誰さ

んは平常は大したことは無いが一度グランドに出ると別人の如く張り切る」と云ふ言葉は、自分にとつては意味をなさぬ事となる。何故なら真正にグランドに於て張り切ることの出来る人は——張り切りと云ふ意味を自分のやうに考へてゐるものにとつては——平常日常の生活に於ても價値ある生活、充實せる生活を、換言すれば内省の心を原動力とせる鬪ひの生活を營み得る人であるべきだと思ふ。一人の人の行爲はその形こそ、時と場所に依り大いに變りもしようが、その人の内面的心構へや心情には相異がないはずである。行爲はすべてそれが行爲と呼び得るものである以上、その人の人格の表れに外ならないと思ふからである。

だから若し真正にグランドで張り切る人が、平常大したことがないと云はれるなら、それは唯かく云ふ人がその人の平常の生活に於ける眞剣さを見抜く力が無い事を示すものに外ならぬ。又若し實際に於て一度グランドを去ると全くがらりと人が變り懶惰な無氣力な人間に化してしまふやうな人が居るならば、その人のグランドの態度のみが他の生活に獨立し飛び離れて立派なのであると考へるよりは、その人のグランドに於ける張り切りなるものが、その外見は如何に見えよう

ともその實質は空虚な興奮か、それとも他の淺薄なる動機に基く或るものでしか無いと、考へる方がより眞實であると思ふ。況んやグランドに於てだらし無く無氣力な毎日の練習を續けて平然としてゐる人は、全く問題外の非人間的な人である。

ボールを蹴る態度が日常の生活態度であり、又逆に日常の生活態度が蹴球をやる態度を規定する。自分が張り切つた真正の蹴球をやつてゐるかどうかは、何よりも自分の部生活以外の生活を反省すれば明白になるであらう。だから運動をやるがために勉強が出來すと云ふことはあり得べきでは無く、眞正の運動をなす者は、眞正の勉強をなす者であるはずである。

某先輩が、御卒業の時言はれた「商大蹴球部員の名に恥ぢぬやうに自分も頑張るから、諸君も亦しつかりやつて呉れ」と云ふ言葉も、自分はグランドに於ける強き態度で生活のあらゆる方面に對して身を處して行かうと云ふこの間の心を表すものと考へて居る。

三、部生活（體験）と勉強（讀書）

部生活即ち運動と勉強と云ふ見出しを書いたが、自分は今

此の断片に於てあらゆる學生運動部にとつて永遠の課題である此の大問題と真向から取り組まんとするものでは無い。自分は本節に於ては問題を極度に限定し而もその一面をのぞいて見ようとする位の氣持である。即ち蹴球部生活を單に體驗としての部生活と限定し、勉強を讀書而も哲學的文藝的方面に於ける讀書と限定し、そして此の兩者に就いて自分が平常考へて居る事の一面を述べて見ようと云ふのである。

如何にものを見るかは、その人が如何なる人であるかに係る。召使には英雄を解せぬと云はれる。物質的利己的な生活、非精神的な生活を送つて居るものには、高貴なる愛に満ちた生活、利他的精神的な生活を送つてゐる者が居ると云ふことを想像することも信ずることも出来ないであらう。又一枚の繪畫を見るにしても、一曲の音樂を聞くにしても、それ等のもつて味は人によつて非常な相異をもつて受け取られるであらう。何故なら我々は自己の體験を超したものを受け取らざる採り出すことは出來ぬからである。自分の體験の深さを超して物の深みへ入り込むことは出來ないのである。物の理解は體験を前提とする。

部生活こそ無限の寶庫である。何故なら部は一つの團體で

あり、一つの社會である。それは世の縮圖でありあらゆる社會や團體のもつ問題は色々な形に於て多かれ少なかれその内に宿されてゐるものと思ふのである。だから我々は六ヶ年の部生活を眞摯な心をもつて營む時、部は我々に向つて次から次へと色々な問題を投げかけて來るのである。そして我々は此等の問題に眞正に己れを欺くこと無く相對し或る時は悩み苦しみ、又或る時は心の底より涙と共に感激し、喜びにうちふるへ、又而して種々の問題に深く沈潜し思索しその問題のもつ眞の意味をくみとつて進んで行くならば、我々は限り無く多くの而して深い體験を此の身に積み貯へることが出来るであらう。云ひ換へれば、我々が部の爲に己れを忘却し、部の發展向上の爲に己れを捧ぐるとき、即ち我々が部と戀愛する時、部は我々の前に體驗の爲の無限の寶庫となつて表れ出て來るのである。

部生活を寶庫とするには部を愛さなければならぬ。而して部を愛するには精進が努力が必要である。逞しい闘志と張り切りとに依つて、己れを瞞着し苦しみを回避し安逸に隨せんとする弱い心に打ち勝つことによつて、部生活に徹底する事がなければならぬ。精進を忘れ部を愛する心を知らざる

ものにとつては、部生活は灰色の砂漠となる。真正に努力する者にとつてのみ部は無限の寶庫であり、所謂修養の道場である。

かくて自分は部生活を體驗の泉と云ふ見地から見た。而して又前述の如く體驗は理解の基礎である以上、讀書も體驗を根底としてのみ理解されるのはなからうか。讀書は我々の體驗と思索とを補ふことは出来よう。しかしそれは我々の體驗と思索とに替ることは出来ない。平生自から體驗を深める努力もせず、従つて眞剣に思索し内省すること無きものにつては本を讀んでもその本當の意味は理解し得ず、又その内容の眞偽の批判を爲す事も出來ず、唯書いてある事を記憶するか盲目的に信仰する外仕方が無くなるのである。併しかくの如きものは石ころのやうに無用の邪魔物でしかないのである。

我々が讀書してよく解かつた、大變有益であつたと感ずる時は、我々の裡にある體驗、混沌として或は未解決のまゝ意識の外に埋れてゐた所の我々自身の體驗が整理され秩序立てられ再生して活動狀態に置かれたと云ふ感じ——自分に外からつけ加へられたのでは無く、自分の内から湧き出て來たと

索する者にとつてのみ可能なことである。此の意味に於ては運動と勉強は單に二つのもの、兩立するものと云ふばかりではなく、より積極的に互に相關を有するもの、魚と水との關係にあるものと云ひ得ること、ならう。

四、部員としての務め

「部のためなら俺は何でもする」 「部の爲なら死んでもよい」此等の部を愛する美しい言葉を自分は度々聞いて來た。何と美しい立派な決意であらうか。正に團體生活の眞髓にふれた感情である。かくの如き言を聞き得る事は商大蹴球部にとって此の上なき誇りである。だが此の言葉を眞に己れを欺く所なく、又内省の銳き眼にとがめられる事無く云ひ得るに至る迄には、我々は尙非常に多くの困難なる段階と闘ひとを経なければならぬ。果して眞にかかる境地迄當達し得た部員は何人居たことであらうか。

「部の爲なら、俺は……」とりも直さず個體と全體、個人と社會との問題に歸着するものと思ふ。これは我々にとつて運動と勉強の問題と共に常に胸裡を離れることの出來ぬ問題である。

『部はそれが全體とか社會とか團體とか云はれるものである

云ふ感じがするものである。自分は決して讀書を輕視するものでは無い。否それどころか、自分の如き鈍才には精神的零圍氣をもたらし、又己れの反省や思索力を養ひ、自分が價値ある生活を營むために讀書は絶対不可缺なものである。唯自分はそれにも拘らず精神生活に於て前進するためにはあく迄も自分が自力で道を拓いて歩まねばならぬと思つてゐる。あらゆる讀書は絶対に自分にとつて必要なことであるが、それは結局助言者助言者であることを忘れてはならないと思ふ。不適當な又極端な例かも知れないが、體驗を食物とすれば讀書は消化剤と云へよう。先づ第一に必要なことは食物を腹に入れる事であり、消化剤はそれが血となり肉となるのを助ける作用をする。従つて全く健康な人——精神的な傑人天才——一人で消化し得る人にとっては藥は讀書は少しも必要なものではない。たゞ自分の如き凡人は此の例に於ては赤子か病人であり獨力では完全に消化することが出來ぬ。而して部生活こそ食料の寶庫を我々に呈するものであり、我々は此等を腹に入れるには前述の如く我々自身の手を働かさなければならぬのである。

眞正の讀書は自己の體驗を尊重し信頼し、そして眞剣に思

以上、その生命は調和にあるものと思ふ。調和の無き團體は單なる集りであり群集に外ならぬ。部が團體として調和によつて生命を有すると云ふことは一つの目的に向つて有機的に結合してゐると云ふ事であらう。而してその目的とはその團體成員各人の人格の發展の爲の道場となる事である。蹴球部の本質は修養團體たることにあると信する。部員各目が互に切磋琢磨し合ふ所に部の本質がある。個人々々單獨では得ることの出來ぬものを部はその中に藏してゐる。従つて部の發展進歩なるものも一に此の道場たるの意義を直接間接向上せしめる事に外ならぬのである。

それではかくの如き修養團體は如何にして成り立つか。一つの目的に向つての調和は如何にして、又何所から生ずるものであるか。自分は部がかくの如く全體として調和を持ち、生命を有する爲の基礎は、部員が部員としての自覺即ち團體の一員である修養團體たることの本質とする蹴球部の一員であると云ふ自覺、部に於ける自己の責任、職務の自覺にあるものと思ふ。全體はそして眞理は個なるものに宿るのである。部員各員がよくその職責を盡すことに依つて始めて部は生命を得、切磋琢磨の道場となり得るのである。

しかば部員各自の自覺とは如何なることか。それは内面的・精神的抽象的に見るならば、すでに述べ來つた如く、眞摯なる生活態度であり、内省の心を源とせる圓ひの生活であり

又張り切ることであり精進と努力とをすることであり己れを忘却し部を愛することである。而してこれを具體的外面上的行動的に見るならば、グランドに於て々部室に於て、各人各様のそのポジションを死守することであり又本三は本三、豫科生は豫科生としての務めを果すことである。部員は皆各自少しく自分の部に於ける立場や地位を省るならば、容易にその職責を具體的に明瞭に見出す事が出来るはずである。かくの如く部員としての務めは外面上的には相異するも、内面的に見るならば、人格の發展の爲への眞摯なる努力と云ふ點に於て等しく一致せるものである。部員の務めは目前にある。道は近きにある。常に全體を意識しその一人としてかくの如き務めを果す時部は始めて済潤たる生命をもつ事が出来るのである。

かくの如くして成立した部は、又その生命は今度は逆に部員各自に働きかけるに至る。所謂修養の道場として各人に修養の場所と機會と方法とを與へるのである。全體と個體とする所を只ひたむきに、謙虚な心をもつて實踐して行かうと思ふ。

自分は本三にもなつてこんな文しか書けなかつた事を恥しく思ふ。だが如何に貧弱なものであらうとも自分のものは自分にとつて實に大きな力となつて呉れる。自分は己れの信ずる所を只ひたむきに、謙虚な心をもつて實踐して行かうと思ふ。

反省

荒川守之助

なぜ蹴球をやつてゐるか、これは「好き」だからであらう、私はこんな原始的感情に因つて蹴球部に入つたのであり、然も尙この「好き」と云ふ感情に支配されてゐるのである。凡らく運動について根本的なものはこの感情の世界であつて他の要素は從屬的なものに過ぎないと思ふ。

それ故運動部が感情的に圓滑に行つてゐる事が進歩發展の過程にある證據である。

そこには理智では説明のつぬもの、経験せずには把握されぬものが存する。

私が過去四年間蹴球部生活をやつて來て何を得たかと云は

は、部と部員とはかくの如く互に相關關係にあり、密接不離の關係にあるのである。

「一部の爲なら死んでも……」と云ふ言葉は實に部と戀愛する迄に至り得た人のみの發し得るものであり、團體生活の眞髓にふれた言である。だから此の言葉は換言すれば、俺は道の爲、人間として生きて行く爲に必要なら死んでも良いと云ふ言である。部の爲と自分の爲とが全く同じ事になつてゐるのである。犬死や奴隸的盲従とは全く縁の無い所の尊い決意である。

五、結び

今年も又自分は部誌の原稿には隨分苦しめられた。そして結局自分が苦しむ一つの理由は自分の心の中に立派なものを作り上げようと云ふ氣持、自分の力以上のものを作り上げようと云ふ虚榮的な心がある爲である事を知つた。そこで決然その態度を更め、自分にとつて分かり切つたことを、そして平常考へてることを自分の考へ方で書いて行かうと決心した。だから云はゞ自分の日記にでも書く時位の氣持で書いて見たのが此の一片である。従つてそこには獨斷と偏見と矛盾とが満ちあふれてゐる事と思ふ。

れても何とも表現のしやうがないのであるが、唯經驗をして來たのだ。少くとも感情的なものを身につけて來たのだと云ふ感じだけはする。

所感

堀尾貞一

蹴球をやり出してから既に四年半、雨の日も風の日も雪の日も、又炎熱の日も、勿論晴天微風絶好の蹴球日和の日も、何時も同じ顔の連中が怒鳴つたり笑つたりして過して來た事を思ふと、實に此は貴重な體験であると思ふ。

顧れば、よく四年半飽きないで蹴れたものだと思ふ。しかも現在でも、一日練習の休みがあると翌日は飛びたつ思ひでグラウンドに駆け付ける、その時の練習開始前のKICKの嬉しさ。

蹴球生活に對する自己の態度に就ては最近諸君が種々自覺されて居る様であるが、此事は我々各自に取つて必要な事此の上もない。しかし私はそれに「蹴球が好きだ」と云ふ事を付け加へて欲しい。

蹴球生活に對する自己の態度に就ては最近諸君が種々自覺されて居る様であるが、此事は我々各自に取つて必要な事此の上もない。しかし私はそれに「蹴球が好きだ」と云ふ事を付け加へて欲しい。

蹴球する喜び

金井雄吾

僕は幼年時代から戸外で「球」を弄ぶ事が好きだつたし、無心になる事が出来た。此の事が僕をして現在蹴球に第一、生命を打ちこませてゐる一大要因だらう。

豫科入學當時別に深い理由もなく、唯中學時代一寸蹴つた経験があるといふだけの理由で當部に入り、以來一貫して此の光輝ある蹴球部に暮らしてゐるが、今では切つても切れぬ忘れやうと忘れられぬ強い縁によつて結ばれてゐる。幾多の貴い先輩及び同輩、後輩諸兄によつて醸成された蹴球部の清い貴い雰囲氣、之が僕をして商大の蹴球部で蹴球をさせる第二の要因であり、蹴球をする喜びなのだ。學生としての蹴球生活は餘す所一年餘だが、僕と商大蹴球部との深い深い縁は永遠に切れる事はない。

次に僕は蹴球なるスポーツが文句なしに、理窟抜きに好きなのだ。從來屢々僕は次の如き質問を受けた。即ち「君は何の爲に蹴球してゐるのだ?」。蹴球生活の意義を具體的にか

んでゐるのか?」と。之は對する僕の返答は常に斯うだ「俺は蹴球が文句なしに好きなのだ。商大蹴球部が好きで好きでたまらぬから蹴球をやつてゐるのであつて、それ以外の何物の爲にやつてゐるのでもない」と。僕の自然に備はつた本性が蹴球を好むのであつて、蹴球をやる其事自身に絶大の價値ありと感ぜられるのだ。戀愛にしたつてそうだと思ふ。或る特定の偶然なる一異性に對し、直感的に其人の全身全靈が好きでたまらぬから、圓満なる戀愛關係が生まれるのだらうと思ふ。具體的に其人的一部分が好きで爲す戀愛は無理な戀愛であり、やがて破滅に陥るだらう。僕は此所に一寸注告して置き度い。或る一定の時期を限つて試験的に蹴球部生活をなし而して其時になつて具體的な意義をつかめば更に續けて行かうとする人は、必ずや其の時に失望するだらうし、失敗するだらう。又貴重な短い學生々活を徒費する事になる。何となれば蹴球の意義は具體的のものではなく、又そうあつてはならないものだ。我々蹴球する者は全力を以つて蹴球にぶつかり、ヘト／＼になつて、學窓を出て幾何かの年月を経て、振り返つて見て其の意義を知り得るものだと信づるからだ。

次に稍稍具體的な蹴球の喜びとして、無心になつて球を見る事の出来るのは何と幸福な事ではないか。

蹴り、廣いグラウンドを駆け廻る壯快さ、突進して敵に全力を以つてぶつかる意氣の出し得る事等、特に夕闇の迫る頃練習後の疲労の中に綠の彼方に漂ふ夕景色眺める事だ。此時こそ毎日の事乍ら、僕は蹴球しない奴に對し、俺達だけの特權だと自負の念を懷くのだ。此は又武藏野なるものに對しても感謝せねばならない。此の景色だけは如何なる藝術家も描き出せない一幅の繪だ。蓋し彼等は僕達の如く緊張し、汗を流した後の疲労を知らないからだ。お互に之程素晴らしい繪を見る事の出來るのは何と幸福な事ではないか。

次に蹴球する喜びでは部員諸兄の厚き友情、樂しき集ひだ。私生活の憂鬱も部員の集ひに入れば、全く吹き飛ばされる。而もスポーツマンらしく快活な、清純な諸兄の集りだ。私は全く蹴球部に居る事が幸福だ。僕は永遠に商大蹴球部員だ。

雜木林のひごとき

清水睦

空には未だ黒い雲がたゞよふて居るし、草木は雨の名残り

をとゞめて居る。私はレンコートを肩にひつかけて武藏野の雜木林に踏み込んだ。雨あがりの薄暗い小道を俯き勝ちに歩いて居ると一枚一枚嘘が不純がはぎとられる様に、何時の間にか私は周圍をとり卷いて居る静けさの中に沈んで行く。時々聞えて来る小鳥の鳴聲が静けさを心の奥にしみこませる、あの草もこの松の木も、そして枝にさへづる小鳥も總ては孤獨の淋しさを胸に抱いて居る。御互に孤獨を慰め會ふてか、松からも小鳥からも何かひし／＼と迫つて來るのを感じる。噫お前も孤獨なのか、松は小鳥は自然はこんなにも愛しいものであらうか。歩みつゞける私は孤獨を愛しさをひし／＼と感する。あゝ、眞を求めての私達の焦燥も總てを頭腦によつて理解しやうとして落ちて行く虚無の淵も所詮は靜かな自然を心から味へる日への道程でなくてなんであらうか。この中にもこそ眞が美が愛が潜んで居るのではないだらうか。人につまらぬ優越を感じたとて所詮私達は空虚なのだ。すねて生きるなんて餘りに自分が可愛相だ。私達の心の奥には蹴球部で身につけた、素直な涙がたゞへられて居るのではないだらうか。過去四年半餘りの蹴球部生活は私に何か素直に眞剣に求めて生きることを教へて呉れたものと思ふ。私達は「馬鹿に

なつてやること」によつて謙しく眞實を生き抜くことを身につけるのではないだらうか。なりきることを身につけることではなからうか。ある眞實を歩めと言はれた言葉が。こゝ迄來ると私の思念はふつりととぎれて終つた。ボケツトから煙草をとり出して、一息フーツと煙を吐いた。何時の間にか、小鳥が盛んに鳴き出した。この深い静けさの奥には何者にも堪へて行かうとする逞しい情熱が宿つて居るのだ。さうだ、私もまだ／＼これからだ。

× × ×

材をぬけ出すと太陽が私の上に直射して來た。

「團體」と個人

高橋道太郎

一

確かに、團體は個人の集合に相違ないのである。併し個人の集合といつても、それには二様の型が考へられる。一はそれを構成する各個人が各々孤立し相互に内的な結合を有たず

丁度花が蕾から自らの姿を咲出することによつてはじめて人の目を樂しませることが出来るやうに、人は各々の自我の殻を打破り我の外に自己を表出することによつてはじめて汝に對して意義を有ち得るやうになるのである。

私は、街を黙々と歩いてゐる人達を見て、時々、それらの蓋し如何なる人も各々自分の思想なり所信なりを自らの内に宿してゐる。而もそれらの所信や思想は外に向つて發現されぬ限り、終に全體的に何等の意義を果すことなく一個の自我の内に死蔵されてはらねならない。

蓋し又如何なる人生もその殻を破らんとする衝動を有するのである。而もそれは、或はそれが發動すべき適當な刺戟があたへられず、或は自らその殻を脱出せんとする勇氣に乏しく、或は又一度脱しても他人の固い殻に衝き當つて忽ちに消沈し、敢て他の殻を破らんとする努力もなさずに再び自己の殻の内に逃避して了ふのである。

而も人はまことに「葦の如く、自然の中の最も弱きもの」なのである。それは「考へる所の葦」ではあるが、併し自ら全く外的な羈絆によつて、結ばれてゐるもので、恰も一定の團の内に一緒に入れられてゐる家畜の群の如きものである。他の一はその構成員が各々互ひに内面的な有機的な關聯を有し各自を結合せしめる所のものがその構成員の生命そのものである如き結合體である。それは恰も一個の人體の如きものである。人體を構成する各部分、頭、胸、腹、手、足等々は各々獨自の意味を持つものでありながら、それは各自他と無關係に孤立して存在するのではなくしてそれ／＼有機的内面的に關聯して一の生命體を形成してゐるのである。眞の團體といふものが後者の如きものである事は言ふまでもない、

それは又かうも表現することが出来る、「眞の團體といふものは殻をかぶつた個人の機械的な集合體ではなくして殻を破つた個人より成る有機的な生命體である」と。

二

三

人達がまるで鎧、兜、鐵假面に身を堅めてゐるやうな氣がすることがある。謂ふに自我の殻の中にあくまで閉ぢ込もつて自己の内にある所のものを表さない人は、極言するならば、鳥獸と異なるものではない。鳥獸は自己の内なるものを傳へるべき術を持たぬ故に、吾々は、彼等が眞實内なるものを持つと持たぬとを問はず、彼等に内なるものを認めないのである。

蓋し如何なる人も各々自分の思想なり所信なりを自らの内に宿してゐる。而もそれらの所信や思想は外に向つて發現されぬ限り、終に全體的に何等の意義を果すことなく一個の自我の内に死蔵されてはらねならない。

蓋し又如何なる人生もその殻を破らんとする衝動を有するのである。而もそれは、或はそれが發動すべき適當な刺戟があたへられず、或は自らその殻を脱出せんとする勇氣に乏しく、或は又一度脱しても他人の固い殻に衝き當つて忽ちに消沈し、敢て他の殻を破らんとする努力もなさずに再び自己の殻の内に逃避して了ふのである。

而も人はまことに「葦の如く、自然の中の最も弱きもの」なのである。それは「考へる所の葦」ではあるが、併し自ら全

外的な羈絆によつて、結ばれてゐるもので、恰も一定の團の内に一緒に入れられてゐる家畜の群の如きものである。他の一はその構成員が各々互ひに内面的な有機的な關聯を有し各自を結合せしめる所のものがその構成員の生命そのものである如き結合體である。それは恰も一個の人體の如きものである。人體を構成する各部分、頭、胸、腹、手、足等々は各々獨自の意味を持つものでありながら、それは各自他と無關係に孤立して存在するのではなくしてそれ／＼有機的内面的に關聯して一の生命體を形成してゐるのである。眞の團體といふものが後者の如きものである事は言ふまでもない、

それは又かうも表現することが出来る、「眞の團體といふものは殻をかぶつた個人の機械的な集合體ではなくして殻を破つた個人より成る有機的な生命體である」と。

が、人は各々その性質によつて或は前者に傾き或は後者に傾くやうになる。先頃戦死された荒井さんは後者の一の典型であらうと思ふ。彼は自分の信念といよものを多く語ることはしなかつたが、それを躬らの實行に於て表した。彼のグランドに於ける態度の一々を見て居れば吾々は明かに彼の内に持つ所のものを見ることが出来た。即ち荒井さんは實踐的に、自我の殻を破つてゐたのである。之は又日本の方法とも言へるかも知れぬが、又スポーツを中心とした團體に於ける本質的な方法と言ふことが出来るであらう。吾々が運動部生活の精神といふて先輩から承け継いで來た所のものは多く之であつた。その意味で之を運動部的な方法と呼ぶことも出来るであらう。

併し勿論それが唯一の方法であるといふのではない。吾々の團體は一方に於て又學生の團體なのである。即ち吾々は學生の本質に側して吾々の大なるものを科學的に探求して之を思想として言葉に表現することを知つてゐる。従つて吾々は自我の殻を開いてその内に持つ所の思想を發表するに、言論に依ることも出来るのである。

即ち吾々の團體は、學生の運動部であると同時にそれは學

又彈力性に富むと言ふのは、他人の言を容れ得る力のある事を指すのである。即ち他人が自己の缺點を指適する痛烈な言を十分に素直に聽き入れる寛容さを持つことである。

丁度樽の中で芋が互に撻ち合ひ摩し合ひながら、次第に洗はれて行くやうに、吾々は運動部といふ團體の中で、互に琢き合ひ勵まし合ひながら次第に磨かれて行くのである。

四

今まで團體に於ける個人の方面を主として見て來たのであるが、それならばこのやうな自我の殻を破つた所の有機的な結合體である所の團體とは如何なるものであらうか。私は先にそれは一の生命體であると言ふたが、この生命體といふものは如何なる事を意味するのであらうか。

最初に言つたやうに團體は個人の集合である。それならばこのやうに個人を集合して出來た所の團體はそれを再び個人に分解したならば、一度生じた所の團體を後かたもなく消滅し去るのであらうか。それは全くもとの個人に分解し盡されて後には何も残らなくなるのであらうか。然しそこには尙分解しつくされぬ何ものかが残存するのである。それは即ちそ

生の運動部なのである。従つてそこに於て吾々は自我の殻を破つて自己の内なるものを表出するに、實踐の方法に依つてなされると同時に、言論の方法に依つてなされるのである。藝術家が各々音樂に依り詩文章に依り繪畫彫刻に依つて、自己の内なるものを表出せんと努める如く吾々はスポーツにより言論によつて自己の内なるものを表出する。彼等がその藝術活動の各方面に於てその働きの場を持つ如くに、吾々は運動部生活といふものに於てその活動の場を持つのである。尙、吾々が學生であるといふ事は又吾々が未完成な人間であるといふこと及彈力性に富むといふことをも意味してゐる。

即ち吾々の所信なり思想なりは未完成なものなのである。従つて吾々は一面に於て自己の主張を絶體的なものとして之を他に強要し、之によつて他を導くといふ如き態度によらずむしろ互に、相補ひ相援け合ひつゝ他と共に進んで行くといふ態度によるべきことを知る。又一面に於ては皆が、未完成なのであるから、各自が自己の未完成なることに臆することなくその所信なり思想なりを發表し、而もたとへそれが誤であつても十分に許されるといふことも覺るべきなのである。

の要素たる各個人より出でて各個人を超越した所の團體、それ自身の生命なのである。

團體は一個の人格者である。それは一度構成された後に於てはその構成員の人格とは別に一の獨立した人格をそれ自身に有するやうになるのである。それは恰も先に述べた如く、頭や胸、腹、手、足等が結合する事によつて一個の新たな人體といふものが生ずるやうなものである。かくして生じた人體はその各構成部分を超えた所の一の全體的な人間としての働きを持つやうになるのである。それは又、長短針や文字盤やゼンマイや齒車が適當に組合されて時計を構成するやうなものである。時計はそれを構成する各部分が各々ばらくに存在する時にはいくらよせ集められても爲し得ない所の一の働きを、それが適當に組合はされて時計といふ一の全體を構成する時に果し得るやうになるのである。即ちこのやうにして生ずる所の人間活動又は時を計る活動といふものが恰も團體の個人を超越した所の人格に相當するものなのである。

而もこのやうな團體の人格は個人より出でて個人を超越したものであると同時に、それは個人より出でて個人を超越し

たものなのである。即ち團體の人格はもとより個人の人格にその源を有つのである。かくして吾々は再び團體に於ける個人の問題に歸つて来る。吾々はかかる團體の中に於て如何なる態度で行動すべきなのであらうか。

それは今まで述べたことから自から導き出されるであらう。即ち個人は團體に於ては自己の人格を顧慮するより前に先づ第一に團體の人格を顧慮しなければならないのである。個人は各々自己に有する所のものを以て先づ團體の人格の向上發展に資せしめねばならない。自我の殻を破つて我の内に有する所のものを全體のいはゞ大我の人格のために一の糧として捧げねばならない。このやうにして大我の成長をはかるといふことは又その中に於ける各個人の義務なのである。

即ち團體に於ける個人は各々獨自の自我の向上をはかるのではなくして、直接的には先づ大我の向上をはかり而してかくして多くの我によつて作られた所の大我を通じて、謂はゞ間接的に自我の向上をはかるやうになるのである。それは丁度毎年新學年の初めに各部員が自分の有つてゐる教科書等を部室にある本棚に持ち寄る如きものである。

かくして大我は歴史的に成長する。日本の國といふ大我は

にうたれて全身づぶ濡れとなつて了ふ。折角自分達でローラーをひいたグランドを墳じては大變だと、私達は大急ぎで部室に戻つて雨の止むのを待つ。なかく、やみさうもないでの其の日の練習は打切りとなつて、濡れたユニホームを脱いで風呂に入り乍らぼんやりとしてゐると、次第に風呂場の硝子窓が明くなつて、湯氣を通して雨後の澄み切つた明い日の光が流れ込む。こんな時には自然の子供っぽいづらを感じると共に、今迄長い蹴球部生活の間に経験した色々な雨の思ひ出が不圖頭に泛んでくる。

○ ○ ○

私が豫科に入學した當時、グランドの横の林の中に弓道場の古い建物があつた。其處が當時の本科生達の脱衣場であつた。掃除等は一度もした事がなく埃が一寸も積つてゐて、履きふるした靴が所々にゴロゴロしてゐるといふ状態である。その頃の本科生達は櫻堤から川沿ひの小道を辿つてグランドにやつてくるのを常としてゐた。そして風呂場等はなかつたので傍の小川に板を渡して身體をふいて歸るのであつた。

私が入部して暫くした頃、又例の春の驟雨に見舞れた。餘り激しいので私達は此のあばら家に避難せねばならなくなつ

建國以來無數の我によつて成長し來りそれは永遠の將來に向つて發展する、吾々のサッカー部の大我是大正九年の創業時代から長瀬、二階堂、水島、神野、淺枝、荒井等々の多くの我によつて發展し來りそれは又無限の未來に向つて成長の可能を有するのである。

こゝに於て又、我は大我の中に含まれることによつて死すべき個人を超えて永遠の生命を獲得しうるやうになるのである。

尙、甚だ拙文で分り難いのであらうと思ひますが、之について何か質したい事があつたり又は意見があつたりする場合には直接に言つて下されば、いつでも悦んで應じます。

雨の想ひ出

早野廣太郎

長いシーズンの間には、私達は時々天候の氣まぐれに遭遇する。春の光がグランド一杯に溢れてゐる絶好の練習日和に快適な氣分で走り廻つて居ると、突然天空が暗くなつて、背中に雨の落ちるのを感じる。そして瞬時にして滝のやうな雨

た。雨は一向に止まぬ。すぐ傍の小川は瞬時に水嵩を増して、水際の新緑の草々を洗つて流れ去る。皆は始の内こそ何か話し合つてゐたが、次第に靜になつて、唯黙りこくつて破れた窓から雨脚の爲に煙つて見えるグランドをぼんやりと眺めやつてゐた。新入生の私も一隅にしやがみ込んで雨の激しい音に聞き入つてゐた。雨の休みない音と、二十何人かの人々の静寂との間の奇妙な對象を私は今以て思ひ出す事が出来る。そして又此の古ぼけた家が雨の勢に耐え切れなくなり、天井のあちらこちらからボツリ／＼と雨漏がして、其がボツンと床の上に落ちると地圖のやうに擴つていつた光景を、今は取り拂はれた家と共に懷しく思ひ出すのである。更に又、太陽が森の彼方に眞紅に燃る頃、小川に渡した板に腰を下して草を押し分け乍ら流に足をひたした快い感觸等様々な思ひ出が去來する。あの頃の事を考へてみると、あの原始的な蹴球部の生活の中に、何かしら、部の眞實な息吹、男らしい野生的な體臭といったやうなものを感ぜずには居られない。

○ ○ ○

凡そ蹴球は如何なる天候に於ても試合が行はれるとは一概の常識である。雨が降らうが雪が降らうが、特に公の對外試

合は定刻より開始されなければならない。併し私の四年有餘の部生活の間唯一回だけ自然の猛威に壓せられた例を知つてゐる。其は多分私が豫科二年の秋のリーグ戦の時であつたと思ふ。敵は東都大學の雄慶應であつた。商大は此の大豪に打勝たんものと、決死の心を藏して練習に精進していつた。しかし試合の當日になつてみると早朝より物凄いばかりの豪雨で、試合場の石神井附近一帯の田畠や道路は全部水底に没しさる有様だ。由來商大はキツク・アンド・ラツシユ戦法で敵のゴールの中に球と一緒にとび込むのを最も得意としてゐた。從つて私達は直ちに試合を開始する事を主張した。兩校の幹部連が、ズボンをたくし上げ、全身をベタ／＼にぬらして協議を續けてゐたが結局「此の雨では試合する事は不可能」なるを以て延期する事に決定した。併し當時豫科の一年生で年も若く血氣に燃えてゐた私は、此の決定が不満で心中甚だ安からぬものがあつた。蹴球とは雨が降つても槍が降つてもやるものだ、天氣が悪いからといつて戦争をやめる事があるか、などと考へて頗る不平をいつたものである。併し歸りのバスの中で、ボールが浮いて了ふやうなグランドの有様や、まるで池の様に氾濫した道路をタイヤまでも水をかぶつて走

つてゆくバスの事などを冷静に考へてみると、此の延期も無理ではないわい、と思ひついて、次等に心が落付いてゆくのであつた。

○ ○ ○

商大蹴球部は雨中の練習が得意であつた。冬ともなれば雪片霏々として舞ふ中に身を躍らせてボールを蹴り、男兒の意氣を大自然に誇示するのが蹴球部である。私は幾度となく此の感激を経験する事が出来た。部室で體操を済ませ、冷々とした空氣を感じ乍らグランドに向つて走つてゆく間に、血管は温い血潮に満され、男らしい壯快な氣分に迄高められてゆく。殊に豫科の時代には、何も考へずに此の悦が與へられた事は幸福であつた。練習試合でも行はれようものなら、物凄く勇敢なタツクルが各所で行はれ、次第／＼に若さと意氣が廣いグランド一杯にたち上り、商大獨特の意氣と熱とが力強い調子に乗つて醸し出されてゆく。商大の「纏り」も一朝一夕に得られたものではない。創設の時代以来、幾多の先輩達が次の世代の若き人々に残していつた貴い遺産なのである。豫科が部の原動力であると屢々云はれる所以は、多少とも分別臭くなつた本科生の心に、ひた向きの熱を以てぶつかつてゐる。

てくる所に在る。大自然の試練に對して、一橋の蹴球部を雄々しく立ち向はせる意氣の源泉こそ、豫科の人々のそれでなければならない。

○ ○ ○

秋の豊かな收穫を期待する人々は、同時に自然が下すあらゆる苛酷なる試練に向つて勇敢に立ち上がらなければならぬ。創業以來私達の部は、雨を恐れず、暑さに敗けず闘ひ續けてきたのだ。今後も自然是私達に多くの苦を投げつけるであらうが、「何くそ」といつて立向ふ氣力こそ、私達に最も必要なものであると思ふ。

愛、蹴 球

吉澤貞雄

純粹なる理性と純粹なる感情とは常に一致すると思ふ。そして私は純粹なる感情を愛と考へる。

人の行爲を善しと思ひ、或ひは悪いと考へるこれは理性が判断する。我々が悪い行爲を憎む餘り、行爲した人まで感情的に憎んでゐたら、之は純粹なる理性に恥ぢなくてはならぬ

い。

然し以上の言葉は善惡に對して道徳的に不感症な人の辯護となる危険を持つてゐる。

我々は善そのものは極度に愛し、惡そのものは極度に憎まなくてはならない。

この愛憎の對立を含みながら、尙この對立を越えた愛をもつて人を愛さなくてはならないのであると思ふのである。

だから善惡と愛憎する念が激しければ激しい程、この對立から止揚し得た愛はより大きなものとなると信する。そしてこの愛こそ、純粹なる理性であり、純粹なる感情である。

以上の如く考へられた愛は、考へられただけでは何んにもならない。愛はそれ自身血となり肉となつて、不知不識の間に身より流露するものでなくてはならない。

然らばこの様になるためにはどうしたらいいか。これは思索によつてのみ得らるゝものではない。我々が現實に愛し、憎み、愛憎の對立から止揚しようとする、苦闘によつてのみ得られる。思索はこの闘ひの一方便である。我々が現實に愛し、現實に愛憎する場として蹴球部生活がある。蹴球部員のお互ひが全て未完成なる故に、清も含み濁も含む。

この清、濁そのものを愛憎し、然もこれを止揚した愛で人を無意識の中に愛し付る様に、毎日の蹴球部生活を努めて行きたいと思ふ。

隨想

吉田富彦

年を重ねる事、此處に五年、過ぎ去つた豫科生活を省みる懐しいと云ふ外に言葉が無い。其は豫科の頃が樂しかつたと云ふ譯ではない。餘りに早く過ぎて行つて了つた。なんか自分には豫科の生活が物足りなかつた。だからもう一度あの時の自分になつて見たいと考へて見たりするのだ。だがこう云ふ自分は豫科三年間ボールを蹴り續けた事が正直な所本當に自分の喜びだ。

全ての變化、動きが自分には餘り懸りもなく過ぎて了つた。自分が常に全て動きを傍観して來たのか、自分の取付いてゐる事に熱中する事が出來なかつたのか、と口惜しくなつて來る。

部員を持つて來ても、自己の姿は全體に比較して小かなるものであらうが、決して弱いぼんやりしてゐるものであつてはならぬのだ。積極的な力も其處に基を置いてこそ伸されて行くのではなからうか。

前轍ご後車

折下章

一、國立驛から學校の門まで毎日歩く毎に、僕も本科生となつたのかなあと思ふ。全く、「なつたのかなあ！」である。そして、更に「なつたのだ」と自分に言ひ聽かせる。豫科生活と、本科生活との區別なんかあるかと言へばそれ迄である。健全なる心構へのある人にはそんなことは問題ではないかも知れぬ。しかし、少くとも不完全な氣組しか有つてゐないものには、この様な何か生活に區切りを付けてくれるもののが要る。意志の弱いものには何かにつけ、又新しい力を吹き込んでくれるものが必要だ。もう豫科生ではないのだぞ、本科生として恥かしくない生き方をしなくてはならぬぞと。餘りにも弱いと言へば言へる。

全精力を集中して飛び込み得ない者はその中から涌き上つて来る粹を汲み取る事が出来ないのだ。假令自分は眞剣にやつて居ると思ふ場合も其が一時的な熱に動かされてゐる時は前と同様な状態に留つてゐると言へるだらう。

探し求める力には斷えざる熱とその熱を發揮する行動が必要なのだ。

蹴球部なる一つの纏つた團體の中にあるて生活してゐる吾々は、此の蹴球部が持つ特有の雰圍氣に、心から愛着を感じず居れない。此の蹴球部に居られた諸先輩の生活が知らずに、此の部の香りとなつて残つてゐるのだ。年は重なり、卒業してゆかれる上級生或は新に入つ来る豫科一年、次から次へと部員の顔は變つて了つても、現在の此雰圍氣は創設當時、或は躍進當時のものでなくてはならない。

蹴球部にゐる自分を、此の團體の一員とし眺めた時、團體の嚴然たる姿に比較して自分の姿が宙に浮いてゐると感じられる時がある。自分の姿は餘りにもぼんやりとして、支柱を失つてゐると思へる場合、自分の態度を大いに反省してみなければならぬのだ。團體の中に居ながら本當に融け込み得ない状態なのだ。勿論蹴球部なる團體の前に、一人の

二、それにつけても思ふのは、自分の豫科生活だ。一體今迄何をして三年もの長い間を過して來たのだらう、と。自分的事だから自分が一番良く知つてゐる筈であるが、自分の事だけに、又一番知るに難い事だ、とも言へる。勿論、自分の生活を他人がより良く知つてゐる、と云ふ意味ではないが。この歩んで來た過去の途がはつきりと浮んで來ないから、右の様な氣持が何時までも抜け切らないのではないか。

一體豫科三年間の生活とは何か、一言にして之を表はせば、「豊かなる生活」だ。更に補言すれば「高い理想に向つて猛進する多面的な生活」だ。更に、そのすべての面に何か一貫性があらねばならぬ。これが豫科三年の生活でなくてはならぬ。そしてこの各面が或一定の角度を保つ所一つの多面體が出来る、この多面體こそ、その人の人間である。その多面體が相似的に生長してゆく過程こそ、將來の生活なのではないか。蹴球部の生活、その中にある精神、それはこの多面の中権を爲すものなのだ。豫科部員諸君よ、若き激渾たる意氣をもつて、小さながらも、この多面體を作つてくれ。

三、誰かが、「近頃俺は精神的スランプに陥つてゐる」と言つた時、「俺も」と返したに對し、「折下のは墮勢だよ」と言はれた。その時は全く背筋に冷水の思ひだつた。さうだ！ 墮勢で生活してはいけない。自らの力をもつて自分の生活をリードしなくては。

四、グランドに於ても自分で動いてくれ。「笛なんかに踊らされるな」と言ひたい。墮勢で動いて何になる。「俺が斯うやるんだ」といふ意氣をもつて皆んな動かう。

愚

言

片 山 光 夫

總て名前には曰因縁古事來歴がある。

× × ×

「C、H、A、N、G」——「チャヤング」!!

何と云ふ歎切のよい響だらう。

部員諸兄はこの「チャヤング」たるや何者かよく御存じの筈だ。實にスマートな優男の渾名ださうだ。

誰の綽號にしろ、すべてその因つて来る處があるが、この

斷 想（三年間の回顧）

櫻 井 孝 次

蹴球へのあこがれと、部生活に對する期待とが、私を商大へ蹴球部へ導いた。

初陣は代田橋に於てある。全く夢中だつた。淺枝さんの聲が、耳にこびりついてゐる。

初めての夏の合宿は、「苦」の一宇に盡きた。兎に角それを乗り越える事が出來た。

秋、私として最も辛い試合を経験した。

第二年目の春の合宿。大きな心の試練であつた、餘りに大きかつた。

長瀬さんにお會ひした。「シンカリやつて下さい」のお言葉。初めて踏む神宮のグランド、全くみじめな私であつた。高商大會優勝。

右せんか左せんか、大きな迷路の前に立つた。友情と愛とに包まれて、私は新たな一步を踏み出した。左のウイングをやる、左足の全く蹴れなかつた二年間を省みる。

浦高戦、最初のシューイーの経験、フルバツク、ボール、キ

「チャヤング」にはどうしたことか何故にこの男を斯く呼ぶのか判らない。「チャヤング」とは象といふ意味だそうだ。象なうやるんだ」といふ意氣をもつて皆んな動かう。

この男が中學へ入つた時に、つけられたのださうだ。それ以來「チャヤングウー」とか「チャン公」とか「チーン」とか種々様々に言はれて來たさうだ。

ある日、一年の某氏が「チャヤング」とは「失はれた地平線」といふ映畫に「チャヤング」といふ支那人がるたが、それに似てゐるから斯く云ふのだらと言つてゐたのを耳にしたことがある。なんてひどいことを云ふ人も居るものだ。

何れにしてもこの男の渾名の曰因縁古事來歴は判らないらしい。

「逆も亦眞なり」といふ言葉があるさうだが。

斷

想

（三年間の回顧）

一バ一、ネット。

二部優勝。

秋の浦高戦、最も良い試合では無かつたらうか。

斷 片 三 題

鈴 木 英 二

一部に昇格した今シーズンは春國立の合宿に依つてその幕は切つて落された。元來春の合宿はプレイの向上を主眼とするものではなく部員相互間の親睦を計る事が第一の目的であり第二にシーズンオフよりの長い休の間に伸び切つた身體を又元の引締つた身體にし、春のシーズンの練習に備へる爲のものである。

合宿中第一の目的は相當程度成功した様に思へる、特に本科生と豫科生との間の親しみは増し、遠慮もなく冗談も云へるし、色々の話も出来る様に成つた氣がした。第二の目的の方は天候に恵れなかつた爲に、思つた程の効果はなかつた。

天氣の良い日に、富士見通りの遙か彼方に未だ溶けぬ雪を全身に纏つた靈峰富士の勇姿を眺め乍ら、春の暖い太陽の光

を身に浴びて、二十有餘名の心は唯一になり、四十何本かの足より出るリズミカルな聲音を聞き乍ら走る時何ともいはれない愉快な楽しい氣持になる。と同時に今日の蹴球部の基礎を築かれた、幾多の先輩諸兄も一橋蹴球部傳統の精神に生き乍ら、此の芙蓉の峰を仰ぎ見て此の道を走られ、血と汗とに塗れて奮闘された事を想起する時現在、部員は變り、時は遷るとも一橋蹴球部精神は嚴然として我々の心の中に脈打つてゐなければならぬ。

現在新段階と盛に云はれて居るが要するに我々は良心に恥じない、眞摯な生活をすればよいのであるが其の中には蹴球部精神は今も昔も變らざる形にて一貫して流れてゐなければならぬ事は勿論の事である。

我々は自分が間違つて生活してゐる事を知り、いかに生活すべきであるか、又如何に生活し得べきものであるかを知つてゐる、故に此處に我々の生活は改善せられ得るのであり又改善せられねばならないものである。

然し此の生活の改善の背後には精神的、肉體的な、物質的な種々の誘惑が立ち並び、我々の行く手を阻んでゐる。此の

誘惑を打破し得るのは強固なる意志、人生に對する清く美しい高く熱情に充ちたる憧憬を置いて外に何物もないものである。

生活の改善を記憶する事は唯他人、及び自己の生活を非難せんが爲でなく、毎日毎時些少なりとも自己を良くし人間を磨き、人生を有意義にせんが爲である。これが人生の最も主張する事、又最も快い、尊い、仕事であると思ふ。

練習にて感じた事一つ。

一部に返り咲いた今春より練習の方針は個人プレイに主點を置いてゐる。私は個人プレイの練習必要なしと云ふ物では勿論ないが、元來商大サッカー部は名實共に精神力の上に立つ部である。私は今日迄の練習を顧みて我が部が精神力なき技術を持つ様な部になる事を惧れてゐる一人である。

最後に私の現在の氣持を卒直に云へば二階堂、米山兩兄の指導に黙々として商大サッカー部の發展の爲に同時に自己完成の爲に全力を盡す事あるのみである。

てくると、新しい若さの躍動するのを感じる。

朝、目の覺めるまゝに學校へ出かける。もとより授業へ出る氣はないから先づ食堂へ、しかる後圖書館へ行つて大して張切りもせず亂讀する。それも三時間もすれば飽きるから飯を食ふ。未だ練習には時間があるので無駄話をしたりして時間を潰す。そしてさうした日には決つて不快な氣持が残つてゐるから多摩湖電車の中では一人でいらしくして友の一寸した冗談にも内心、本氣でムクれたりする。

さうかと云つて午前中家にくすぶつてゐる自分を考へてきかけたくなる。そして原稿用紙を前にして何時の間にかとんでもない外の事を考へてゐる。これでは仕様がないので少し無責任だとも思ひますが緩方的な断片でも書いて、目をつぶつて出す事にしました。

毎年感ずる事ながら春の合宿には一抹の淋しさがある。しどくと降りしきる春雨の夜路を三々伍々一橋館へ集れば紫煙の立こめた薄暗い電燈の下には最早去年の本三の顔はみえない。どつと起る笑ひも心なしか風の音に消されがちだ。けれどもあの蹴球部獨得の快活な氣分の最も良く働くのは合宿だ。天候回復と共に練習も本調子となり皆が此の氣分に浸つ

断片

松岡義彦

此の頃

茂木利孝

があり、英には英の個性がある、此の個性を個別的、具體的に擱んで行かねば日本の經濟の行く可き道は分らんね……等皆しんとして聽いて居ります。（眠つてゐるのだらう等と云ふ奴は誰だ）

一、角帽

いつのまにか大學生になつてしまつた。然しこんな實力のない大學生があるだらうかと思ふと急に角帽が重くなる。時に手に持つてあるいてゐます。

二、ゼミナール

今年は皆ゼミナールの問題で心配しました。自分も空の頭を絞つて名論文（？）を作りやつと入れて貰ひました。堀尾、金井兩兄のおかけです。金子教授お得意の個別的具體論曰く「櫻も五瓣なり梅も五瓣なり故に共に五瓣花植物なり、此が自然科學の普遍的抽象論だがね、然し、櫻には櫻のいさぎよさがあり、梅には梅の氣品がある。此の個性を抽象し去つて共通點のみを見ようとする所に自然科學的方法の缺點がある。經濟界に於てもさうだね。英も紡績業の國であり、日本も紡績が盛んだがね、それだけで日英の利害が相反するとはちよつと云へんね、君、日本の紡績には日本獨特の個性付けて呉れる。

思ひ付くまゝに

居川達一

吾々豫科部員にとつては、技術よりも寧ろ燃える様な「闘志」が必要なのだ。本科部員のリードに任せて徒に泰平の夢を貪つて居てはならない。今こそ、豫科部員の覺醒すべき夢だと思ふ。水島を中心にもり立てゝ、もつと積極的に動かう。「部」を「樂しむ」様な部員は、直ちに淘汰されるべきで「部」は「部」を「苦しむ」部員達のみで送らるべき、團體生活であると思ふ。

某運動雑誌に、外國人が試合の結果如何に拘はらず平氣で笑つて居るのを「餘裕のある立派な態度だ」と賞めてあつたといふ。然し「試合は練習の總決算なり」と言はれて居るからには、吾々の勝利の蔭には、又敗北の裏には、必ず血の涙

三、住所變更

私はつい先頃本郷の西片町へ越して參りました。早野の家に近くなりました。（一緒にビールなんか飲まんぞ）小學校の裏です、毎朝野球放送に聞えてくる様な喚聲に目を覺されます。

當人部の中心に出て來たつもりで人にも告げ、自らも喜んで居つた所バスの中でサラリーマン風の人人が話し合つてゐるのを聞いてがつかりしました。「本郷つて君隨分田舎だね君」「どうして」

「たつて此の前、歌舞伎座前からタクシーに乗らうとしたらね、歸りに乗る人がないと云つて来てくれなかつたぜ」

四、思想

自我の強さとさうかと云つて物事に徹底出來ぬ意志の弱さに悩んで居ります。

あるべきだ。試合に勝つては相擁して嬉し涙にかきくれ、敗れでは共にない、雪辱を誓ふ、あの純な氣持を何時迄も持続けて行き度い。

今年こそは「斃而後止」の意氣を以て必ず浦高戦に勝たう。中支戰線に護國の華と散られた荒井先輩への、吾々豫科部員よりの唯一の餞としても。

自分からサツカーレ除いたら答は零と出さう。それ程僕はサツカーレ身も心も入れて夢中なのです。

感想

淵上明

俺は俺の信する所に生きるのだ。

日支事變は日本の興亡浮沈に關する。我々は此の事變の中にあるのだ。我々は此の日本の我々の偉大な理想に邁進しよう。

× × ×

荒井さんは死んでも神として祀られ、陛下の御親拜を仰

133

ぐのだ。日本人として最高の死なのだ。

ないことを残念に思ひます。

自己に對して不安を感じる時、それに打ち克たねばならぬのだと思ふ。

× × ×

俺も二年間ボールを蹴つて來た。試合には負けてばかり居て誠に相濟まぬ。俺は自分を顧みてお詫する。浦高戦には必ず勝つんだ。

所感

藤塚亮策

本能が如何に死を忌避しようとも、生き抜くことは死ぬことより遙かに困難であることを今にしてはつきりと知りました。

そして理性は私に生き抜くことを嚴命します。

私が或る社會の中で生活することを自ら擇ぶ以上、其の社會に生甲斐を感じてゐることは言ふ迄もありません。

私は未だすつかり自性を回復してゐませんので多くを語れ

私は次の様な言葉を聞いた。「今年は本科は樂だが、豫科は苦しい」と。本科のメンバーは去年と大差は無いし、豫科は新人が多い。此の言は當つてゐる。

そこで豫科蹴球部に就て一言したい。勿論、商大サッカー部は本科、豫科の區別なく、本科の試合には豫科が、豫科は本科が、サブとなり、一丸となつて試合し、又團體としても、個人としても何等區別も隔たりも無いのは云ふ迄もない事であるが、此處に重要なは、本科は本科として、豫科は豫科として、チームに型を持たねばならない事である。

豫科の今年度のチームは、前に比し、確に弱くなつてゐる。上手なプレイヤーの卒業、若干部員の退部等が直接の原因であるが、然し、豫科サッカー部にとつには苦しいが、良い一大試練である。豫科は今年に於てこそ、豫科獨自の型を造りあげねばならないのである。

即、錯雜せる理論、バラバラの體系より、古い、が確固なる原理へ戻り、其處より出直す時機なのである。今日の隆盛の基礎たる昔の三部四部時代である。

「歴史は繰返す」と言ふかも知れぬ。然し、今年の豫科こそ、技巧や理論よりも、只管堅實なる豫科、猶將來も築かれ行く豫科の、しつかりした地盤を礎き上げて行かう。

五月三十日、對慶應戰前夜、思ひ出するまゝに。

隨想

村木杉太郎

しかば何故私がかくも自信を以て云ひ得るか。私自身の氣持を簡単に述べて見やう。

唯斷つておくが私が此處に對稱として考へて行くのは、學生の中で無自覺極まる唯隨性として、生生活を送る人々ではなく、その人自身としては極眞面目に、(表面は眞面目に見える)所謂學問をしてゐると稱する人々である事は勿論である。

このやうな人々の態度を見るに、所謂學問と云ふものを極めて抽象化し、單なる現象としての眞理のみを求めて、生活感情を無視すると云つた傾向のある事は、否み得ないであらう。即ち我々を育て、きた教育の弊でもあらうが、知性の偏重と感情的精神性なもの、無視とから来る一面的眞理の探求に寧日無き有様なのである。こうした傾向の一般學生生活にあつて、運動と精神の實に苦しい鬪争の中に部生活そのもの内に深く藏せられてゐる、機械的、形式的、表面的な眞理でなく、眞に眞なるもの正なるものを探し掘り下げ握み出して行く。こう云つた所に學者生活に對して部生活の確信があり、私は我がサッカー部の意義を見出して行くのであり、私は部生活を誇りとするのである。

一年有餘、私の蹴球部生活は僅かだ。又私が此の生活から得たものも又拙いものであるかも知れぬが、私自身としては此の部生活が入學より今日に至る迄二年有餘の學生生活の基調を爲して來た。少くも現在では所謂學問居士を前にして何の恥ずる氣持もなく「俺の學生生活の大部分は部生活だ、學生として、出てくる氣持は皆部生活の何ものから生れてくるものだ」と寧ろ誇りを以て云ひ切る事が出来るし、又してゐる。

此の意味に於て、我々の部生活は唯ボールを蹴る丈ではな

く、部員一同も又ボールを蹴る個々の者の單なる集合ではなく、精神的に絶えず勵まし、勵まされてゆく有機的雙闘にあるのである。

今度の所謂新段階と云ふものもその外面的變革は如何なるものにせよ、眞に眞なるものへの覺醒と、部員相互の切つても切れぬ關係の強化と見るのは唯私一人の考へであらうか。

時代の一大轉換期特に聖戰下にあつて、我々部員に望まれてあるものは健康の増進は云ふ迄もなく、緊忍不拔の氣力と、我が部が自覺するとせざると拘らず持つてゐる全體性より生ずる精神的なものを確把する事であらう。

思ひ出する儘

宮澤

力

一日の練習に心身共にすつかり疲れ切つてはゐるものゝ、何かしら全身を包む様な一種の満足感にひとりながら、或静かな夜、机にもたれて今迄の部生活を回想して見た。

× × ×

體験がなければ眞に生きた自分が得られない。體験即ち精

神と肉體とを以て、實際にぶつかつて見るもの、合理性は、體驗なしでは得られない。併もそれは自己の熱と誠とを注いだ眞面目な體驗でなくてはならない。

目標が定まらなければ、方針は定まらない。方針が定まらなければ、確歩し得ない。無味乾燥にして何等得て殘る所のものはなく、遂には破滅を來す。併も目標は體驗に依つて得られる、と私は信する。机上の合理主義一點張りは愚の至りである。我々は飽くまで現實に即して生きて行かなければならぬ。之は極めて普通の事で、私が茲に敢て噪々するまでもなく、誰しもすぐ感ずる所の事であらうが、所謂『行ひ難し』とか云ひ、意志の力に依る所大なるものがある。

私は此處まで思を周らして來た時、今迄の自分の部生活を反省して見て、思はず愕然たらざるを得ない。私は最近までうつかり之に氣が付かず、餘りにも慢然と過して來た事に、唯只管慚愧と悔恨に堪へなくなる。自分がよく氣が付かない儘に、今迄蹴球部に喰ひ下つて來たものだと一驚せざるを得ない。如何によく自分の態度に對し、周圍が許し自己が許して來た事か。私が總てに對して深く陳謝し度い理由は此處にある。今にして思へば、蹴球部は私にとつてどうしても離れる事は、勉強に於ても張切る迄延長せられなくなつたからである。

る事の出來ない、大きな吸引力を持つてゐたには相違ない。

併しながら私は豫科も三年になり、その責任の重大となるを考へ、又無智なるまゝで経験して來た今迄の部生活を反省して見た時、自分の眞の姿を描く事が出來た。深い停滞から押

出やうとする強い力の滲み出るものを意識した。此の力こそ私にとつては、生涯を支配する尊い力なのであつた。之はあたかも深い淵の中に、長い間渦紋を描いてゐた水が、どうしても流れ出やうとする、強い意志を持つた而も自然な本能的な力に外ならない。私は飽くまでも此の力を、新らしき出發の中心として蹴球をやつて行く覺悟だ。

凡そ人は苦しい境地に立てば立つ程、強い意志が養はれる。それ故我々の蹴球は如何に苦しくとも、我々はへこたれないのだ。否大に苦しくあつて欲しい。何處までも信念を以つて體驗して行かなければならぬ。あまりに明らかであつて、而かも往々顧みられない事實は、何事によらず一つの思想が體驗的の検察なしに受け取られると云ふ事だ。それは思想の提供者を空しく勵かせ、享受者を空しく苦しめる。我々は先輩により、部誌によりその他あらゆる方面より得た知識を、先づ體驗によつて自己のものとする事を、先決問題とし

なければならない。

屑

籠

山田久寧

吾人の生活はその目標を常に倫理的善に置かねばならぬ。最良の生活をせんとする者の當爲は當に善であるべきだ。我々の善とは或一種又は一時の要求のみを満足する事ではなくて、或る一つの要求は唯全體との關係上に於て始めて善となる。例へば身體の善は其一局部の健康ではなくて全身の健全なる關係あると同一である。

○

鐘が鳴る。曉の鐘が、進撃の鐘が、新段階の革新は、此處に具體化された。曰くシーズン期間の短縮、曰く日曜日の練習廢止、曰く各人が一層勉強する事、特に第三が強調された。昔、運動部員は勉強家であつた、それでゐてグランドでは馬鹿になつて頑張れと云ふ事が叫ばれた。しかしに長年月の間に、此れはその本來の意味を没却せられて、グランドで頑張る事は、勉強に於ても張切る迄延長せられなくなつたからで

ある。

○
讀書とは何ぞや、書物を讀んでその内容とする智識を吸收し、その思想を理解し批判し己が所有とする事である。智識を多く得んと慾せば、多讀を可とす。理解し、批判しその思想を自己のものとする爲には、必しも多讀を要さない。前者の態度は、博識を誇らんとする者のそれであり、後者の態度は眞に自分の血となり肉となつた智識を追究する者の態度である。限られた時間をしか持たず爲すべき事の餘にも多い吾等の讀書は、小數の良書を精讀するを良しとす。

○
十八世紀の最大なる思想家はジャン・ジャシク・ルソーであつた。民約論の、又エミールの著者にして最もよく自然を愛好し自然に歸れと高叫したのは彼であつた。

ユーゴーの藝術は一定の型を有しその型を守らぬ限り文學に非ずとされた古典主義に對する浪漫主義を明らかにした物である、彼の大作レ・ミゼブルに代表せられた、ジャン・バルジヤンが姉の子の爲にパンを盜んで重罪とされたのは、ルソーの民約論より發展せる罪型法定主義に依つた。ジャン・

ヴァルジヤンとファレティースとジャヴエルとの三つの人格に依て吾等に教へんとしたのは、所有權及び契約の自由の社會と罪法定主義の文化に對する熱烈なる批判であり、深刻なる論評であつた。

○
蹴球部と云ふ一つの團體は、確かに四十幾名かの各個人が集まつて成立してゐるには相違ないが、一度此處に建設せられた吾等の國土は、既に全體としての血と肉とを持つ生命ある者となる、全體たる蹴球部を離れて各蹴球部員は意味をなさぬ。第一意義的に存在するのは蹴球部であつて、蹴球部員は全體の分岐として存在すべきものである。即ち各部員は全體に制約され、絶對的ではない。しかし各部員を否定し去るものではない、部員相互に切磋琢磨して人格を陶冶して部員自身を向上せしめる事に依つて、全體たる蹴球部を向上發展せしめんとする、自由主義的な、個人主義的な（もつとも、個人主義自由主義に於ては、個人相互に人格的な結合はなく唯、功利的に行爲の世界に於てのみ交易を認めるのが）要素の（各個人の自由な發展が全體を高上せしめる意味に於て）存する事も決して看過する事が出來ぬ。蹴球部とい

ふ團體は、全體主義或は自由主義で解決出来る存在ではなくて、非合理的な、寧ろ超合理性を有する實在ではあるまいかと思はれる。

日記抄

青木育郎

○月○日

足に任せて櫟の林を歩む。一面に散つてゐる冬枯の木の葉を踏んで行く度に、ふくよかに凹んだ。櫟の木立の間を抜け行く中に、夏の合宿で走つたのはこゝかなあと思はれる小徑に行き當つた。私は森を愛する、けれども森を愛するが故に迷ひ込んではいけないと思ふ。そして此の小徑を歩んで行けば森に迷ひ込む事は無いだらう、私は此の小徑を愛す。

私の心には豫科の生活は森の様だ。又蹴球部は此の小徑の様だ。

○月○日

私は昨夜夢を見た。それは私の蹴つたボールが快適な當り

○
でゴールを破つた夢だつた。
○月○日
私は自分の眞實の姿を捕へたい。人生觀も、生活方針も結局、自分をよく知つてからでなければ正しいものは得られないのではなからうか。机に向つて如何程頭を捻つても自分を捕へる事は出来ない。然し何かやつて居る時に、あれが自分で無いだらうかと思はれる様なものに偶然ぶつかる事がある。そしてその時見る自分は多くの場合非常に醜いものである。それは自分乍ら自分を否定したくなる様なものである。その時、もう一度勇氣を振つて自分を正視する。——丁度痛いのをこらへて、腫れものの腰を川す様に——さうすれば吃度何かよい事があるだらう。

私は自分が醜くければ醜い程、いとほしくなつて來る。そして何とかしようと何時も考へるのである。

○月○日

何時か時は流れ行く。小平の森の緑が目にしみる様な季節が來た。小川の畔では梢が緑のトンネルを作つて居る。木の間を洩れる日光を浴びて歩むと私の心はロマンティックに

なる。

雑感

瀬 藤 俊 雄

こうして一年間部生活を送つて來た僕は、蹴球部に居たからと心の底で誇を感ずる様な事もなかつた。と云ふのは我々にとつて内的の變化が大きな意義を持ち、その變化の動機たる實踐とか思惟とかに就てみると、寮生活が最も意味を持つてるたからであらう。

寮生活は一面非常に惠れてゐた。もつとも堪らなく嫌だつた他面の経験も舐めた。それは餘りに街ふ人間が多く眼に着いたから、彼等の云ふ赤裸々な姿と云ふのは自己偽瞞の衣一枚着た姿らしい。偽瞞の陳列場の中では僕に室長は、その儘の姿で接して呉れた。

總ての學問、否生活の茶飯事迄も根本にその人の人格乃至人生觀が横はつて居り、それ等はその表徴に過ぎないものであらう。

而してその表徴がその人の本心を偽つてゐる時に何の價値

があらう。それは何等かの報酬を求める様と意識されてゐるので、決して純粹な活きた行爲ではないであらう。

こう導かれた僕も人一倍良い子になりたいと云ふあらぬ野心に妨げられて活きた行爲が見當らなく、益々偽瞞の生活を病的に究明し出す様になつた。此の様な非自己偽瞞即ち自己に對して眞摯な態度が擴大されて、眞摯な敬虔な愛の生活への憧憬が導かれた。

毎日の生活、そして部生活も手近な鍛練場であつた事は云ふ迄もない。續ける事一年、そして窓な満足を感じる様になつて寮生活も終り、通學する様になつた。

社會と云ふものは一般に皮相的實際的に物を判断する。より一般的な社會で生活する様になつた自分は深く理想と實踐のギャップに氣付かされた。意志の弱い爲に自分がしなければならぬと考へた事がどうしても出來ない。人格から透み出る所の何物も無い。寛大に目こぼして批判しても自分の缺點は數へ切れぬ程ある。

殘る豫科二年間、學問に對する情熱を寸時も忘れる事なくもつと鍛へ上げたいと思つてゐる。

感想

吉岡敏夫

蹴球部に入つて滿八ヶ月、今自分の生活を反省して簡単にのべたいと思ひます。

「運動と勉強との問題」此は最近になつて特に大きく——上級生の方々のお話等を聞いて知つた事ですが——表面に浮び上つて來た問題です。まだ蹴球部の生活といふものをつけめでるないし——二年や三年でつかめるものではない大きなものと考へてゐますが。——又勉強といつても何も分つて居ない私が嘴を入れる事なんか出來やう筈もないのですが、本を読んで居て幻想の様に感じた事、一寸耳にはさんだ事等をいつぱりなしに書かうと思ひます。

○

私は最近こんな語をきいた事がある。

「運動から得られるものと、勉強から得れるものとは全然別なものなんだ。そして體力かゆるすならばそれは兩立するのだ。」

俺はこの語をきいて此の人は商大サッカー部の人間ではないと思った。そして運動をやる人が目標として進む「まこと」「愛」といふものに於て學問の世界と一致してゐるといふ事を感じない人だと思つた。

又こんな事も聞いた。

「運動やつて何が得られるんだ。何も得られないものをやつて、體を消耗さして何になるんだ。そんなものはやめてしまへ。」

この人間は知識・學問の何物たるかを誤解してゐる人間だと思つた。そしてあはれな人間だと思つた。俺はその人間に強く、徹底した心からの答が求めたい。「學問をやつて何になるんだ。青白い思想を持つて何になるんだ」といふ間に對して。

又こんなことを聞いた。

「馬鹿になつて、氣狂ひになつて運動をやれ。そしたら何か尊いものが得られる。」

俺は希ふ。かくいふ人が講義に出て眠つて居る人でない事を。この語はグランドに於て聞かれるべきだ。俺達の全生活を此でしばつてしまつてはいけない。俺達は學生であり、俺

達の運動は學生の運動だ。

又こんな語も聞いた。

「練習なんてごまかしてしまへ。試合になつたら何とかなるさ。それより早く家に歸つてドイツ語の單語一つでも澤山覚えた方が得ぢやないか。」

俺はさけびたい。「大馬鹿野郎」と。

蹴球部に入つて

大森源一郎

中學時代、運動部に入らなかつたので、今度、生活が變つたのを幸に、運動部に入る事に決めて居た矢先、上級生の方々から、「部に入つて部の空氣を味へ」と教へられたので、運動神經の至つて鈍い自分ではあるが、心臓を強くして入部した次第です。入つて見て蹴球部の練習が一番真剣で、熱心な事、又それだけ長時間に亘つて行はれる事を知り、精神の緊張を覚えました。日數の経つにつれて足を痛めたりして練習は苦しくなつて行く。然し池尾さん始め諸先輩の御熱心な指導に對し、ヘバツタリしては申譯ないと考へ、意を新たに

はない。兎に角、俺の心は理窟なしに蹴球部に惹き付けられる。俺は此の心を只管伸して行きたい。

笛の一吹に、唯一心に球を蹴つてゐる時の純粹な心持。何んでもよい、何も考へずに頭の中の有らゆる雜念を拂ひ捨てゝ、夢中になつて球を蹴る。自分はそれだけでいい。部に入つてやつと一ヶ月、まだその眞髓と言はれる合宿の経験もなく、部を一丸としての試合といふものもありませんでした。それで部生活の何割を味つたのかは知れませんが、今の所毎日の練習と時々に行はれたコンバに部の雰圍氣も呑み込め、その中に溶け込んで行つてゐる積りです。

感想

古賀文之介

入部して茲に一ヶ年半を過ごしたが未だ蹴ることすら充分出來ず、自分の不甲斐なさに泣き度くなる様だ。

クラスチャンも終つた此の頃は周囲の人々にも落ち着きが出来て來たようだ。暇な者は思ふ存分に讀書することだらう。自由な時間を多く持てる夏休みが待ち遠しい。

して練習を勵む。又自分に取つて、練習後の疲れた肉體を風呂場に運び、そして湯に浸る時の氣持は全く何とも言へないのである。特に中學時代、部生活を經驗しなかつた爲であると思はれるのだが。これあるかな／＼の感は入部より一月経つた此の頃時に強いのであります。

途中で足を捻坐したりして見學を餘儀なくされたが、人の練習を見て居るのは全く辛い。早く動きたい氣持で一杯になる。人間の足は何故かく脆いかと思はれる事さえある。

之から後、六ヶ年、自分の出来る限りの力を盡して、東京商大蹴球部の爲に働くといふのが現在の自分の心境です。

入部所感

太田賢三

蹴球部といふ團體の中に没入してしまつて、部の中で苦しみ、喜こび、團結のリズムの中に生きる、部生活が自分の生活の根幹、斯の如く、自分の心身を六年もの間打ち込んで行ける生活といふものは、さうた易く得られるものではないのだ。對象が低級だとか、價值缺きものだとかいふ事は問題で

然し讀書が吾々の生活の總てではない。部生活或は寮生活を通じて始めて、其の中に流れる豫科生活或は一橋精神の一部に觸れることが出来るのではなからうか、私の部生活に飛び込んだのもこの動機からである。

兎に角蹴球部に眞裸になつて侵り、出来る丈のものを吸收しよう。球を蹴る間だけでも無中になれるることは確かに幸福であらう。

今後も一層精進を續けよう。
次に或る日の日記を揚げる。

昭和十四年五月十八日 晴

昨日のチブス豫防注射が祟つて何となく體がだるい。暑さの所爲もあらう。三時限終了後床を取り臥してプラトンの「ソクラテスの辯明法」を読みかけたが間もなく夢の世界に入つた。睡から覺めたのは置休も後三十分ばかりの時だつた。起きて部室に行かうとしたが氣乗がしない。其の儘同室の者の談笑に耳を藉す。五時限始業のベルも何のその序だから二時間も休めど、今度は罪と罰を讀む。読み始めは大して興が起らなかつたのが、此頃は段々面白くなつた。愈々と云ふ時練習の事が氣になつて来る。後五分ノ一讀めばよいのにと思つた

が毎日缺かさず練習に出ると休むのが罪になる様に思はれ、床を蹴つてユニホームに着替へる。張り切るぞと意氣込んでも肉體が伴はず、一番苦しい練習を送つた。それでも風呂の味は格別だ。後百頁だ。九時半頃から碁をする。就寝十一時兎に角蒸し暑い夜だ。

感 想

白鳥義夫

蹴球部に入てから一月経つた。一通り部の生活にも慣れた。

僕は元々餘り運動をして居なかつた。しかしこれからはもつと元氣よく青空の下で生活をしてみねばならぬと思ひ、蹴球それ自身にはさしたる關心も持たないで入部したのであつた。

確かに勧誘の時も歓迎會の時も、商大の蹴球部は部の空氣がとてもいいのだと云はれたことを憶えて居ますが、僕は誇張かと思つた。しかしこの一月の間にそれが誇張ではなく眞實のものであつたといふことを感するやうになれた。

入部して練習を始めてから暫くの間は、餘りに練習を何時迄もやつてゐるので少々驚いた。僕は豫科に入つたら今迄受験勉強のために少からず抑壓を受けた讀書も飽きる程出来る時間はあると期待してゐたのであるが、僕の努力の足りない爲か思ふやうにいかない。それで運動と勉強とは大きな矛盾があるのかと思ひ、これから先やつていけるかと不安を感じるやうになつたが、部の空氣のよさに引ずられてかそんな事も征服して行けるやうに思つた。尤もそれを眞に解決出来たのではないと思ふ。自分で自分の心にそんな事では駄目だぞといふ意志によつて抑壓してしまつてゐるのではないかとも思はれる。しかしこんな不安もう少し蹴球が分るやうになれば解決出来るのではないかと此の頃は感じてる。

練習終つて暮れてゆく空を仰ぐ時は全く運動するものでなくては味へぬ爽快な氣分がする。僕はこの感じと前に言つた部の空氣のよさとに非常に引きつけられてゐる。僕はボールを蹴るとか蹴球といふものに眞の味を知ることが出来ないで居る。これは誠に残念な事であるがその中に蹴球を本當に分る時も来るであらうと思つてゐる。

入 部 所 感

西内碩男

サツカーボー部に入るといふ氣持は、サツカーボーが好きな運動であり、面白いといふ慢然とした氣持であつた。そしてサツカーボーとしてボールが蹴れるといふ所に興味があつた。

併し練習を始めてみると、それは實に苦しみそのものである。そして弱氣が出て来て、練習が休みとなる。然し之に堪へてゆかねばならない。

以前にこんなことを讀んだことがある。

「華かな競技場に於ける試合よりも、苦しい練習に眞のスポーツの意義があり、苦しんで苦しみ抜き苦しさを楽しむ境地を見出しが貴重である」

今之を思ひ出してあくまで練習を苦しみそしてそれを楽しむ境地を見出したいと思ふ。

感 想

森 谷 玄

入 部 所 感

安田興三郎

入部以來既に一箇月の日子は過ぎた。毎日の激しい練習も堪へられぬ事はない。此の分なら六年間無事に球を蹴つて行けさうである。他の部の事は知らぬが、此の蹴球部は僕の豫

期して居たよりはずつと眞面目な、否嚴格過ぎる程の規律を

持つた部である。僕には中之内君の退部した所以もうなづける氣がする。僕自身も、最初は蹴球をエンジョイし、併せて身體の鍛練を第一目的として入部したのであつたが、一月を

経た今では、その目的の誤つて居る事がはつきり判つて來た。勿論、眞面目に練習を重ねて行けば、身體も丈夫になり遂には蹴球をエンジョイし得る境地に達するかも知れぬが、

それは第二義的の事であらう。我々は先づ眞の蹴球部員たらねばならぬ。然らば、眞のサッカー部員たるには？ 僕はまだ新米なのではつきり判らぬが、矢張り眞面目に練習をして行けば良いのだらうと思ふ。苦あれば樂ありと云ふが、僕の

毎日の練習は、今のところ苦しい丈である。然し何時かは此の苦も報はれるであらう。だが報はれなくともよい。自分は飽くまで此の苦しみを味ははうといふ位の概がなくては眞の蹴球部員にはなれまい。僕は之から眞摯な部員としての勤めを果さうと思ふ。

てるた様な氣が致します。

中學校迄、部生活といふものを経験しなかつた私は、同級の運動部員の持つ、或一種の底力を感じて、俺も商大へ入つたら、こいつをものにしてやらうといふ氣持で居たのです。

そして入學し、さてどの部へ入らうかと、長い間考へました。此の目的達成の爲には最も團結した、不撓不屈の氣概ある部でなければならぬ。そこで上級生にも當つて見て、蹴球部に入つた次第です。

いざ、入つて見ると、始めの中はよかつたですが、段々練習の辛いのに最初の意氣はどこかへ行つてしまつた様です。

今から考へて見ますと情ない次第ですが、「限りなき前進」への一過程として之も大目に見て戴きたいです。

入部の感想

山 地 鴻

私が商大のサッカー部に入つて最も強く感じた事は、部そのものから受ける感じが何となくおとなしく紳士的で、親しみ易さを持つてゐると云ふ事である。

おとなしいと云ふのは、決して元氣がないと云ふのではない。少くとも商大のサッカー部の今日あるは、そのファイトによる處大なるものがあると信ずるのである。

私は幸にして商大サッカー部に入る事が出来たのであるがこれからは商大サッカー部の基礎である熱と意氣とでもつて精進して行かうと思ふのである。

入部感想

鷺野和夫

入學、入部して以來早や三月有餘経つてしまひました。其間、恰も小人が大きな樽の底で一人でわめきながら駆け廻つ

昭和拾參年度試合戦績

○五月卅一日(火) (豫科リーグ)
商大豫科 3 $\begin{smallmatrix} 1 \\ 2 \end{smallmatrix}$ 0 0 中大豫科

○六月十二日(日) (豫科リーグ決勝)
商大豫科 4 $\begin{smallmatrix} 3 \\ 1 \end{smallmatrix}$ 1 1 法政豫科

○六月十八日(土) (定期戦)
慶應豫科 4 $\begin{smallmatrix} 1 \\ 3 \end{smallmatrix}$ 1 0 1 商大豫科

○六月十九日(木) 一軍對専門部戰
浦和高校 3 $\begin{smallmatrix} 2 \\ 1 \end{smallmatrix}$ 2 2 商大豫科

以上春季シーズン終了 (前號既載)
○九月十五日(火) 一軍對専門部戰
於小平。三時半、専門部先蹴

一軍 8 $\begin{smallmatrix} 5 \\ 3 \end{smallmatrix}$ 1 0 0 専門部

專門部 脇 平田 囲山女 木井倉島澤
倉 森末 有神五月 鈴荒種中戸
門 G. K. F. B H. B F. W
軍 川 藤堂 嶋野尾 本井山尾水
一 居 後二 岩早堀 橋金片池清
居 6 G. K. 21
後 4 C. K. 1
二 2 F. K. 2

- 五月二日(月)
- 帝大新人 7 $\begin{smallmatrix} 2 \\ 5 \end{smallmatrix}$ 1 0 1 商大豫科
- 五月七日(土)
- 商大豫科 1 $\begin{smallmatrix} 1 \\ 0 \end{smallmatrix}$ 1 武藏高校
- 五月十一日(水)
- 早大 4 $\begin{smallmatrix} 1 \\ 3 \end{smallmatrix}$ 1 0 0 商大
- 五月十五日(日) (豫科リーグ)
商大豫科 3 $\begin{smallmatrix} 3 \\ 0 \end{smallmatrix}$ 1 1 農大豫科
- 五月十七日(火)
- 帝大 2 $\begin{smallmatrix} 1 \\ 1 \end{smallmatrix}$ 0 0 商大
- 五月廿一日(土) (綜合選手権)
豊島サッカ 1 0 $\begin{smallmatrix} 0000 \\ | | | | \end{smallmatrix}$ 0 商大(抽籤負)
- 五月十九日(木) (豫科リーグ)

方的に終る。

○九月廿五日(火) 對帝大戦

於東高球場。商大先蹴

帝大 4 $\begin{smallmatrix} 3 \\ 1 \end{smallmatrix}$ 1 1 2 商大

○九月廿六日(水) 對文理大戦
於小平。四十分ハーフ。
文理大 3 $\begin{smallmatrix} 1 \\ 2 \end{smallmatrix}$ 1 0 0 商大

帝大 4 $\begin{smallmatrix} 1 \\ 1 \end{smallmatrix}$ 1 1 2 商大

春は手も足も出なかつた一部の強豪に對してよく戦ひ、殆ど對等の試合であつたが、F・Wの突込みの不足と、バツクのスリーバックシステムに對する用意の不足からして、二點の差をつけられた。

前半十一分 L・H 屬の R・W へのロングバスから、奥田にきめられたが、十七分、松岡一片山一清水と渡つて、清水之を極めた。十八分、二十六分に G・F 阿部によつて強引に中央を割られて入れられる。

後半は二十八分、片山一金井一片山一堀尾一清水一橋本と

きれいに渡り、橋本之をきめる。その後チャンスあるも入らず、タイム・アツブ直前敵 L・W の強引の切れ込みに會ひ、阿部にきめらる。

○九月廿六日(水) 對文理大戦

於小平。四十分ハーフ。

文理大 3 $\begin{smallmatrix} 1 \\ 2 \end{smallmatrix}$ 1 0 0 商大

帝大 4 $\begin{smallmatrix} 1 \\ 1 \end{smallmatrix}$ 1 1 2 商大

前日の對帝大戦の八十分の熱戦に引き続き、文理大を小平に迎へて、又も八十分の試合を行つたが、前日の疲れか、バスも悪く、出足も鈍り、前半もリードされ、後半十分頃になれば豪雨沛然と降り來り、試合を尙も續行したが、全くの泥試合となり、グラントは一瞬にして泥海と化し、二點を取られ 3-0 にて敗る。

○十月三日(火) 對千葉醫大戦 (リーグ第一戦)

於慈惠醫科大學球場 商大先蹴

商大 5 $\overbrace{2 \mid 1 \mid 2}^{3 \mid 0}$ 4 千葉醫大

葉橋 藤原 田田井 内村田村岡 河源外吉
千高 加福 山石今 大杉源外吉

K. G. F. H. B. F. W. 1. G. K. 19 5 1
大森 藤堂 階崎野尾 本井山岡水 10 C. K. 2 F. K.

商狩 後二 岩早堀 橋金片松清

拓山 河坪 山宮清 左鈴大北小
大村 田田 田野水 方木保川林 久

大澤 藤川 越野尾 本井山岡水 F. W. 11 G. K. 25 3
商吉 後荒 岩早堀 橋金片松清 6 C. K. 13

拓山 河坪 山宮清 左鈴大北小
大村 田田 田野水 方木保川林 久

三部より二部に上つて來た千葉醫大と第一戦を行つたが、敵の出足頗るよく、我軍の球に充分馴れない中に、七分チャージ・ボールを上げてそれが味方の足に當つて入り、早くもリードされ、その後チャンスあれども入らず、三十六分、ゴール前に上つたボールを金井のドロップキックはクリーンシュートとなり左隅を破り、四十分金井のシュートによりやつとりードしたが、四十四分、敵のR・Wチャージ・ボール、F・Bヘッドで返さんとしたが却つて味方ゴールに入り、同點のまゝ、タイムアップ。

後半は七分片山の中央突破によるクリーンシュート、三十九分橋本のノドマークのシュート、四十二分片山のシュート

何れも綺麗に決り、結局五一二で勝つ、最も選手の心魂を傾けた試合であつた。
○十月廿三日(日) 對拓殖大學戰 (リーグ第二戦)
於慈大球場 商大先蹴

商大 5 $\overbrace{1 \mid 0}^{5 \mid 0}$ 1 拓大

拓山 河坪 山宮清 左鈴大北小
大村 田田 田野水 方木保川林 久

大澤 藤川 越野尾 本井山岡水 F. W. 11 G. K. 25 3
商吉 後荒 岩早堀 橋金片松清 6 C. K. 13

拓山 河坪 山宮清 左鈴大北小
大村 田田 田野水 方木保川林 久

大澤 藤川 越野尾 本井山岡水 F. W. 11 G. K. 25 3
商吉 後荒 岩早堀 橋金片松清 6 C. K. 13

前半風下を取つた我軍は強風にあふられて、高く蹴つたボールはどんく戻され、よく押したが決定的なシュートがキーパーの正面をつき却つて十分混戦よりの敵L・Iのシュートが右隅を破り、その後兩軍得點なく、後半に至れば逆に風にのつて攻め立てく盛にシュートするも不運にも何れも際どい所で防がれたが、六分ペナルティライン一寸うしろにて得たフリーキックを、早野之を狙つてきれいにきめ、その後二十四分、二十六分、二十八分と續けて片山のシュート入

る。我がL・W清水が右腕首を骨折する程の負傷をしたがそれをおして詠合を續け三十一分左から切れ込んでシュートされいに極める。その後は壓倒的に攻むるも、得點なく終る。

○十月卅日(日) 對慈惠醫科大學戰 (リーグ第三戦)
於青師球場 商大先蹴

商大 4 $\overbrace{2 \mid 1 \mid 1}^{2 \mid 0}$ 1 慶大

立教 石本崎 藤野藤 上村田宮仁
教大 2 $\overbrace{1 \mid 0}^{1 \mid 0}$ 0 立教

立教 白岡岡 内藤海 井中植二今
大澤 藤堂 階木川尾 本井山岡井 F. W. 19 G. K. 20
商吉 後二 鈴荒堀 橋金片松櫻 11 C. K. 5
大澤 藤堂 木野尾 本井山岡井 F. W. 11 E.K. 10

慈西 淵藤 薩内濱 位山宇佐馬佐
大澤 藤堂 木野尾 本井山岡井 F. W. 11 G. K. 22 5 6 0
商吉 後二 鈴早堀 橋金片松櫻 9 C. K. 3 P. K. 1

前半三十五分P・Kを得て、片山之を極め、その後二十三分、片山のシュート極まる。三十七分敵の逆襲によりR・Hのロングシュートは左隅に入り、その後應援團の猛烈な喝次と共に調子に乗つて來たが、我軍よく之を抑へ、後半十二分櫻井の蹴つたボールを敵が足に當て、入れ、三十三分橋本の單身強引にバックを抜き之を極める。

○十一月六日(日) 對立教大學戰 (リーグ第四戦)

問題の一戦を前にC・H早野が練習中足首を捻坐して、出られず、荒川之に代り、二三日のハーフ・センターとしての練習ではと氣つかはれたが、殆ど完全に敵C・Fを抑へ、他のバックの果敢なる守備と相俟つて敵をノーゴールに終らしめた。前半は殆ど互角であったが、四十分左のコーナーキックを櫻井がゴロでコロがし、松岡が敵バックの體を抑へる所を金井そのまゝ突込みリードす。

後半五分頃、立教R・I中村と二階堂がヘッドを争つて顛倒し、右腕を折り、退場し、立教は十人で戦ふ。三十分右の絶好のコーナーキックを片山ヘッドできれいに入れる。その後は全く我軍の壓倒する所なるも得點に至らず終る。

○十一月十三日(日) 對法政大學戰 (リーグ第五戦)

於青山師範球場 法政先蹴

(リーグ第五戦)

5法政、6拓大。

商大 5
1 4 1 0
1 法政

於小平 商大先蹟

{G. K	{和	田
} F. B	{猪	鼻
	{青	柳
} H. B	{河	野
	{安	永
	{大	平
} F. W	{張	端
	{川	井
	{櫻	木
	{鈴	澤
	{小	
G. K	17	
C. K	3	
F. K	7	

商吉	大澤
後二	藤堂
鈴荒堀	木川尾
菅金片池櫻	瀬井山尾井

リーグ最終戦ともなれば負傷者多く、松岡、橋本の二名の
缺けたF・Wは仲々調子出す、風上に居るに拘らず、二十七
分にして金井のシュートによる得點を最初とするものであ
る。その後は三十二分堀尾、三十三分片山、三十四分金井と
續け様に得點する。

後半は風下にて苦しんだが、敵の凡攻によつて救はれ、九分L・Wのノーマークシュートによつて一點入れられたが、十八分片山入れ、遂に五一にて、二部制覇を完成した。

尙リーグ戦の順位は1商大、2立教、3慈大、4千葉醫大

	高	田	内	田	田	宅	田	谷	川	西
早		島		織原		永三村		杉片	米吉	河
大	川	木	木	木島嘴	H.	B	F.	W		
商	居	村	茂	鈴水三	本	岡				
豫	科	の	浦	高	橋	松	片	淵	櫻	
豫	科	F	・	W						
リ	ー	ン	シ	ニ	一	ト				
一	方	的	に	勝	つ					

○十二月三日(土) 豊田対浦和高校戦 (秋期定期戦)

於小平 商大先蹟

大	浦	高
川} G. K	{ 閩	本
木} F. B	{ 小 奥	島瀬
下} H. B	{ 生 淵濱	島士田
島翁} F. W	{ 奥 加種 有田	島川田馬中
本岡山上井		
15 G. K	9	
4 C. K	9	
0 F. K	1	

春久し振りに敗れた豫科は、復讐の念に燃え、大いに張切つたが、豫科主將鈴木病の爲に出場出来ず折下代つて奮闘したが、前半九分、敵L・Iが極め、十三分櫻井よくきめたが、二十六分C・F、二十九分R・Wに夫々に極めらる。後半は十八分L・Wに極められ四一一と離されたが我軍奮起し、十九分橋本のクリーンシニート、二十六分櫻井と續けて入れ尙攻め續けたが、レフェリーの時間の誤りから五分早くタイム・アップとなり、惜しい所で敗戦の涙を呑む。

高木	田津輪	野尻谷内出
上田	喜水三	若江大山小
井大正	H. B.	F. W.
藤堂	崎野尾	田尾瀬井水
吉	後二	岩早堀 吉池菅金清
大澤	(狩森)	(荒川)
G. K.	F. B.	
6 G. K 12		
1 C. K 4		
4 F. K 1		

於帝大 三十分ハ 1 フ

東	京	神	戶
吉	澤} G. K	{稻	上
後	藤堂} F. B	{尾藤	崎井
二階			下下神
岩早堀	崎野尾} H. B	{竹木島	井野野江本
吉池菅金清	田尾瀬井水} F. W	{永磯丸吉松	

17 G. K 5
4 C. K 6
4 F. K 2

ふ。前半は二十六分吉田のシューント、後半は六分金井、十二分菅瀬夫々入れ、結局3-10にて勝つ。

ふ。前半は二十六分吉田のシュート、後半は六分金井、十二分菅瀬夫々入れ、結局3-10にて勝つ。

一月廿四日() 本科對戸神
於甲子園南運動場

方廿四日() 本科
於甲子園南運動場
神商大4 2-10-2
上 崎井 下下神

高木	上田	田津輪	野尻谷内出
一 鈴	大井正	喜水三	若江大山小
商 大澤	藤堂	崎野尾	田尾瀬井水
(狩森)吉 後二階堂		H. B	F. W
(荒川)	岩早堀 吉池菅金清		
6 G. K 12			
1 C. K 4			
4 F. K 1			

高木	上田	田津輪	野尻谷内出
一 鈴	大井	大正	
大 澤	藤堂	F. B	
吉 后	崎野尾	H. B	
(狩森)	岩早堀	田尾瀬井水	喜水三
商 二	吉池菅金清	F. W	若江大山小
(荒川)			

(羽林) 古澤	J. K. 鈴木
後藤	F. B. 大井上
二階堂	正田
岩崎	H. B. 喜水三
早堀	田津輪
(荒川)	野尾

後半は六分金井、十二

起し、十九分橋本のクリーンシート、二十六分櫻井と續けて入れ尙攻め続けたが、レフェリーの時間の誤りから五分早くタイム・アップとなり、惜しい所で敗戦の涙を呑む。

し、十九分橋本のクリーンシート、二十六分櫻井と續け入れ尙攻め續けたが、レフエリーの時間の誤りから五分早タイム・アップとなり、惜しい所で敗戦の涙を呑む。

○十二月廿四日() 本科對戸神商大
於甲子園南運動場

(三商大リーグ)

前半風下で、強風を受けて苦しんだが、十四分にしてR・Iによつて破られ、二十分、吉江のクリーンシュートにて二〇と離される。

後半九分にして敵L・Wによつて一ヶ取れたが、二十四分堀尾巧みにバツクを抜いてシュート決まり、更に三十七分清水のバツクを抜いてのロングシュートは風にのつて綺麗に極つたが、三十八分R・Hによつて又一點取られ、結局又もや敗ける。

○十二月廿五日() 本科對大阪商大戰(三商大クーラー戦)
於神戸市東遊園地球場

東商大	7	4	0
	3	1	3
大阪	3	0	3
阪崎	村鶴	村田	田嶋友野宮川
大山	松竹	野永松	岡金佐大戸
京森	G.K.	B.F.	H.B.
藤堂			F.W.
崎川尾			
田尾瀬井水	8	G.K.	28
	4	C.K.	5
	1	F.K.	4
東狩	後二	岩荒堀	吉池菅金清
やはり強風に遭ひ、前半八分清水、十四分池尾、十七分吉田、三十八分池尾と夫々きめ、後半は三分菅瀬極めて五—〇			

以上 総試合廿三戦

勝 十二
負 十

引分 一

全一橋軍 六勝。二敗。
本科 二勝。四敗。

豫科 四勝。四敗。一分。

又得點から云へば

總得點 六十五—四十七 で勝

全一橋 三十一—十二 で勝
本科 十二—十三 で敗
豫科 二十二—二十二

得點を見ると本科、豫科共に單獨では殆んど對であるが本科、豫科が一緒の全一橋軍が好成績なのは今迄とは變つて居る。然しが首肯出来る點である。

と離したが、十八分L・Iに一點入れられ二十三分 尾又入れ、ほつとする所を三十六分R・W、三十七分R・Iと續けて入れられてやつと立直り、四十三分堀尾ロングシュートし入れ、七—三にて勝ち、本リーグは第二位となる。

此を以て昭和十三年のシーズンは全く終る。本年は高専大會が専門學校大會になり豫科それに出場出来ず、又遠征の費用から云つて、全部員が行く事出来ず本科だけで遠征を行つたが、結果は前掲の如く優勝出来なかつたのは殘念である。

一橋蹴球部部員名簿錄

編輯部調查

輯部調查

一橋蹴球部部員名簿錄

役員

主部 將長 二佐 階堂 藤晴 三弘 (本三 教授

委員長 水米山島大行三（豫三）
委員長 豫科主將
委員長

佐二水米藤
藤階堂晴弘教援
山大亮策行三本三
島同豫三

佐藤弘

右注所

左勤務先

兵庫縣武庫郡住吉村反高林一、八七六
（電）御影五、六七八
大阪市北東梅田町二八ブリミヤハウ

六合會社進藤商店

卷之三

芝區白金三光町二七三
有隣生命保險株式會社

豐島區長崎仲町二ノ三、六五八
東那火災保険株式會社

大森區馬込東一ノ一〇八四
名古屋市港區稻永新田字ヨ六七五
金成工業株式會社

自牛 金
營 达 姬
區 工 菊
津 桃
久 梅
土 衣
町 會
二 社

北支派遣軍木村（兵）部隊氣付山口部隊

株式会社 上野一紀 尾井町本店 六

大連市山城町 第二アベント
三井物産株式會社 大連支店

麹町區有樂町三信ビル内

丸之内海上ビル新館 旭石油株式會社

四谷區南寺町四（電四谷九七九）
明治生命保險株式會社營業部
(電丸ノ内一〇一六專用銀座四九一二)

渡邊甚吉	有芝區白金三光町二七三
(村吉改)	有躋生命保険株式會社
城島鎮雄	豊島區長崎仲町二ノ三、六五八
伊藤健吉	東那火災保険株式會社
森綠	大森區馬込東一ノ一、〇八四
近藤豊太郎	名古屋市港區稻永新田字ヨ六七五
平松宣夫	金城工業株式會社
豊田達治	北支派遣軍木村(兵)部隊氣付山口部隊 三上隊
津田弘精	麹町區紀尾井町六
大連市山城町	株式會社三越本店
三井物産株式會社	大連支店
大連市山城町	第二アバート

✓ 松 本 正 雄	杉並區西高井戸一ノ一三九 東京市京橋區銀座西一丁目 實業ビル内 松本法律事務所 (電) 京橋六、〇八六〇
✓ 川 村 通	大森區田園調布四ノ二 調布高等女學校 (電) 田園調布八三五〇
✓ 高 橋 朝 次 郎	麻 布 區 廣 尾 町 五九 麒麟麥酒株式會社 (電) 京橋六、一二二〇
明 石 穀	兵庫縣武庫郡東芦屋藤ヶ谷莊園 大阪瓦斯株式會社 上本町營業所 (電) 南一八〇〇
猪瀬辨一郎	杉並區馬橋一ノ三七 (三浦方)
昭和三年	
三 宅 弘 方	仙 壱 市 南 町 通 一 日本脂油株式會社 東北營業部
昭和四年	
瀬 社 家 力	小石川區小日向臺町一ノ六四

別和十二年

✓ 浅枝彦太郎

✓ 田島輝重

✓ 角田昇

✓ 森田昭之

✓ 枝村藤三郎

✓ 鈴木彰

✓ 大掛隆久

✓ 浅田英暉

✓ 重見敏之

✓ 鈴木彰

✓ 大掛隆久

✓ 浅田英暉

✓ 重見敏之

✓ 鈴木彰

✓ 大掛隆久

✓ 浅田英暉

✓ 重見敏之

✓ 小西正夫

✓ 米山大三

✓ 二階堂晴三

✓ 池尾隆二

✓ 菅瀬五十朗

✓ 狩森正雄

✓ 金井雄吉

✓ 堀尾貞一

✓ 荒川守之助

(宇都宮中)

杉並區天沼一ノ二〇秋葉方
栃木縣宇都宮市大町二三(電宇都宮二三)

杉並區阿佐ヶ谷二ノ五九五新居方
神戶市灘區篠原本町一ノ三二(電御影六、二三四)

杉並區上荻窪一ノ三二(電荻窪四一二二)
杉並區阿佐ヶ谷二ノ五九五新居方
神戶市灘區篠原本町一ノ三二(電御影六、二三四)

満洲國海拉爾、岡本部隊、春田社隊
朝鮮無煙炭株式會社

別和十二年

✓ 林田毅

✓ 村井恒典

✓ 世田谷區玉川奥澤二ノ五四七

✓ 三井物產(電田園製布二、六九〇)

✓ 銀座第一中隊第一班

✓ 岩崎寛貞

✓ 後藤虎雄

✓ 銀座第一中隊第三班

✓ 銀座第一中隊第二班

✓ 銀座第一中隊第一班

✓ 銀座第一中隊幹候

◆在學者姓名 () 内八出身校

◇在學者姓名 () 内八出身校

現住所

現住所

本科三年

✓ 小西正夫

(廣附中)

✓ 米山大三

(五中)

✓ 二階堂晴三

(廣一中)

✓ 池尾隆二

(五中)

✓ 菅瀬五十朗

(上野中)

✓ 狩森正雄

(上野中)

✓ 金井雄吉

(神戸一中)

✓ 堀尾貞一

(神戸一中)

✓ 荒川守之助

(宇都宮中)

本科一年

✓ 吉田富彦

(神戸一中)

✓ 清水睦

(八中)

✓ 石割知之

(開成中)

✓ 早野廣太郎

(五中)

✓ 片山圓

(西片)

✓ 茂木利孝

(五中)

✓ 鈴木英二

(一中)

✓ 櫻井孝次

(神戸一中)

✓ 松岡義彦

(八中)

本科二年

✓ 早野廣太郎

(五中)

✓ 小石川區駕籠町四六

✓ 杉並區馬橋二ノ一七〇(中野二七三)

✓ 千葉縣東葛飾郡野田町中ノ臺二二二

✓ 杉並區馬橋二ノ一七〇(中野二七三)

✓ 幹野縣飯田町知久町二

✓ 杉並區馬橋二ノ一七〇(中野二七三)

✓ 杉並區馬橋二ノ一七〇(中野二七三)

✓ 杉並區馬橋二ノ一七〇(中野二七三)

豫科三年

藤塚亮策

神田區五軒町四八

森谷（府一中）玄

太田賢三

小石川橋寮

指ヶ谷町一三七

居川達一

府下吉祥寺一、八八四 藤本五

太田（府一商）

一並橋阿佐ケ谷四ノ四五四

淵上明

臺灣崎隆市壽町三ノ五

白鳥義夫

山地（神戸一中）鴻

水島行

中野區宮園通五ノ四四

古賀文之介

杉並區八幡町二ノ六五

淵上（二中）

濱松市名残町三六〇

鷺野和夫

山内（豐中中）

水島（濱松一中）

長野縣埴科群西條村三七五一

安田興三郎

神戸市灘區八幡町二丁目

宮澤力

世田谷區代田二ノ七六一

西内碩男

一橋寮

山田久寧

福岡縣小倉市上富野四〇秋葉方

仙臺（仙臺二中）

世田谷區北澤四ノ四一三

豫科二年

瀧谷區千駄ヶ谷一ノ五六二

大森（麻布中）

一橋寮

青木育郎

世田谷區北澤四ノ五〇三

大森區雪ヶ谷町八六八

世田谷區北澤四ノ四一三

吉岡敏夫

瀧谷區千駄ヶ谷一ノ三三

大森（麻布中）

一橋寮

潤藤俊雄

瀧谷區千駄ヶ谷一ノ五六二

大森（麻布中）

一橋寮

物故先輩

編輯後記

大正十二年高商卒

兵藤世平治

昭和二年

吉岡敏夫

昭和五年

吉岡敏夫

昭和七年

吉岡敏夫

昭和九年

吉岡敏夫

昭和十二年

吉岡敏夫

孟蘭盆の日なり。吉田君の家へ行く。途上チンドン屋の行列あり。美しい蝶の死を見る。直ぐ「荒井さん」と關係させて考へる。一部二部三部と分けたが、皆「荒井さん」を頭に置く事なしには考へられぬ。

「荒井さん」の幸福を想ふ。

戦線の諸兄からは原稿戴けず。この部誌が戦線に送られ、又新しい會話が「荒井さん」との間に交される事と思ふ。

「新段階」といふ言葉が現はれた。荒井さんの日記を読んで貰ひたい。

今、部誌が發行出來たらと思ふ。「荒井さん」は待ち焦れてゐたかも知れぬ。「荒井さん」に又黙つて譲らすのかと思ふと、自分の不甲斐なさが恐ろしい。

それ以上に「荒井さん」は秋を待つてゐる事と思ふ。いつもいつも私達を凝視め乍ら。

昭和十四年九月二十日印刷

昭和十四年九月廿八日發行

【非賣品】

編輯兼 東京商科大學内

一

印刷人 杉真一

一

印刷所 東京市本郷區金助町二九

一

印刷所 東京市本郷區金助町二九

一